

少年が高校で野球部に入
るようですよ

Arupejio2

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

はい、全世界の皆さん、おはこんにちばんわ。アルペジオです。この小説はパワプロコンポケットの世界観を元にして作った二次創作品です。この小説に明確なストーリーなどない！時代はギャグですよギャグ！↑

まあ、そんなわけですから、そういうのが苦手な人は回れ右！それでもいいよって方はゆっくりして行ってね！

目次

新しいマネージャー	1
野球部に出会いを求めるのは間違っているだろうか？	7
紫杏事変	13
サクラ舞う空	20
S H I N S E T S U H A Z A R D	前
編	35
S H I N S E T S U H A Z A R D	後
編	39
M G N	46
カーテンコール	52
小話詰め合わせ その1	60

修学旅行!!!	前編その1	69
修学旅行!!!	前編その2	76
修学旅行!!!	中編その1	80
修学旅行!!!	中編その2	86
セツトヴァルエンチンは死の香り……？		95
打ち上げえええええ!!!		104
修学旅行!!!	後編その1	112
修学旅行!!!	後編その2	118
M G N 2 n d		123
R e q u i e m i s q u i e t l y		130
played		143
全ては未来(さき)のために		143

打ち上げええええ!!	その2	152
ジエネレーションギャップ		162
キャプテンとロボット		172
親切高校の主張!		177
ハーレム少年の苦悩		182
天国か地獄		187
Hello New World!		
191		
『偽物』の愛		201
教えて!アルペジオさん!		211
やっぱり好きやねん		218
ノーラブ、ノーライフ		227
親切警察		232

S H I N S E T U M @ S T E R		
240		
紫杏事変	その2	247
ダイヤモンドは硬いけど砕ける	前編	
253		
ダイヤモンドは硬いけど砕ける	後編	
260		
そして少年達は、馬鹿でいる。		266
バレンタインデーキッス		276
シアンと巨人		282
バイトクエスト		292

新しいマネージャー

何かがおかしい。いきなり何を言い出すんだと思うかもしれないがちよつと聞いて欲しい。俺は昨日、野球部の仲間といつものように練習をし、真つ直ぐ家に帰り、いつものように寝て、今日もいつものように起きて、朝食をちゃんと食べて、今もこうして、いつものように登校しているのだが、何かがいつもと違う。それは自分の身に何か起きたとかそういうんじゃない、俺の周りの環境が変わったように思えるのだ。自己紹介が遅れちゃったな。俺はアルペジオ、親切高校の2年生だつて、俺は一体誰に話しかけてんだ(汗) ま、まあそんなわけだから、今俺は非常に悩まされてるわけだ。一体何かおかしい?それが何かはわからないが何かがおかしいのは間違いない……。

アル「……登校している時間……問題なし。いつもの通学路……だな。制服は……着ている、パジャマで来てたわけじゃないな(汗) じゃあいつも共に登校している荷田は!?」

? 「問題ないよ!」

そうか問題ないか……!?

アル「お前誰だ!? あつぶねえ! 誰だか知らないけど問題ないって言われたからあつきり聞き流してたけど(汗)」

「そうだ、何かがおかしい原因はこの女の子だ。いつも湯田……荷田と共に登校しているはずが今日に限って見知らぬ女の子だったとは!! (↑気づかない馬鹿)」

「もうっ、やっど話しかけてくれたね。たまたま君が家を出てきたところを見つけ、そこから後を付けて早くも10分は経ったんだよ?」

アル「そ、そうか、そんなに長い間……つてちよつと待て! お前俺が家を出てきた時からずつといたのか!」

「?」

「そうだよ?」

「新車のストーカーか何かか? この子は(汗)」

アル「と、取り敢えず君、名前は?」

唯「ああ、そうだった! 私唯! 『神木唯』! ○▽△」

アル「別に腕ぶん回して自己紹介しなくても……(汗)」

唯「へへっ、今日から親切高校に転校してきたんだ!」

アル「親切高校に?」

「?」

「そういえば、この子が着てる制服、うちの高校の女子用の制服だな。………待てよ

アル「お前、まさか転校初日にして学校までの道忘れて、それで途方に暮れてたらまたま俺を見つけてよく見たら制服が親切高校のだからついていけば辿りつけると思ったから俺の後つけてきたんだろ？」

唯「なななな何言ってるの、そそそそんなことあるわけけけけななないじやななない(汗)」

アル「凶星なんだな(汗)」

唯「だ、だつて！投稿初日で慣れるわけじゃないじゃない！」

アル「まあ、確かにそうだけどさ(汗)」

唯「……………ねえ、そういえばなんだけど。」

アル「ん？」

唯「今、何時？」

アル「えーつと、今は……………8時25分だな。」

唯「ホームルームは何時から？」

アル「8時半だな。」

唯「……………」

ああ、今日は厄日か畜生!!

アル「走れええええ!!」

唯「わかってるって!! あーもう!」

アル「朝から散々すぎるわ!!」

くそして、その日の放課後く

アル「ほんつとついてないな今日は(汗)」

荷「まあまあ、間に合ったんでやんすから、結果オーライでやんす。」

こいつは荷田。俺と同じ野球部の仲間にしてマニア。実は俺もメガネをとったこいつの顔を見たことがない。

アル「まあ、確かに、あの転校生ともこれでしばらくは関わりはなさそうだし」

監督「おいお前ら、ちよつと注目しろー。」

く、くそう、人が話している時に(汗)

監督「今日から、うちにマネージャーができることになった。」

マネージャーだと? このタイミングでか。誰だ……?」

部員A「マネージャー?」

部員B「どんな奴だろ?」

荷「聞いたでやんすか!」

アル「聞いたさ。マネージャーだつてよ。誰だろうな?」

荷「ヌツフツフ、これはチャンスでやんす(ニヤリ)」

アル「な、なんだよ荷田。気持ち悪いニヤけ顔になって（汗）」

荷「ついにオイラにも春が訪れる可能性が来たでやんす！」

アル「はあ？春？」

荷「野球部のマネージャーって言ったら可愛い子に決まってるでやんす！」

アル「ま、まあ確かに……。まてよ？」

その時の俺の考えは甘かった。モンブランより甘かった。この時俺は、荷田と同様、可愛い女の子のマネージャー（出来れば桜（ry））が入ると思っていた……。

アル「た、確かにいいかも……。ニヤリ」

監督「じゃあ、マネージャー。入ってこい。」

？「失礼しまーす！」

アル「（あれ？この声どつかで……）」

だが、俺のそんな期待は、

唯「神木唯です！よろしくお願いします！〇〇〇」

いとも容易く崩れ落ちたのであった。（泣）

荷「いやー、まさか転校生がなるとは思ってたでやんす！ねー、アルペジオ君！……アルペジオ君？寝てないで起きるでやんす！あつ、もしかしてマネージャーが美女過ぎて気絶しちゃったでやんすか？アルペジオ君も男でやんすねえ（ニヤニヤ）」

アル「(どうなっちまったんだああああああああああああ!!! (泣))」
俺の高校生活に暗雲が立ち込めたのであった。

野球部に出会いを求めるのは間違っているだろうか？

越「……なあ、荷田。最近ちよつと悩みがあるんだが。」

荷「越後君が悩みでやんすか？明日は槍が降ってくるでやんすね。」

越「お前俺のこと馬鹿にしてるだろ！真剣なんだ。」

荷「んー、じゃあ一応聞くでやんす。」

越「……彼女が欲しいです！」

荷「アルペジオくん！キャッチボールするでやんす！」

越「最後まで話を聴けええええ!!」

くそしてく

アル「あつ？彼女が欲しいんだあ？それをなんで俺に……？」

越「恋愛上級者のお前ならなんとかなると思つて！」

アル「嫌な肩書きだなオイ!!」

荷「どうするでやんす？」

アル「んー、たしかに放っておくわけにはいかないしな。………わかったよ、手

伝ってやるよ（汗）」

越「よっしやー!! ありがとうアルペジオ! 荷田!」

荷「ちよつと! オイラを巻き込むなでやんす!」

くそしてく

アル「ちなみに希望とかあるのか?」

越「んー、可愛くてー、優しくてー、浮気しなくてー、頭良くてだなー。」（ドゴオン

アル・荷「寝言は寝てから言え。（でやんす）」

越「す、ずひばぜん……（ガクツ）」

アル「んー、優しくて可愛いなあ……。」

荷「天月さんはどうでやんす?」

アル「五十鈴か!! いいね!! 彼奴には勿体ないぐらいだ!」

くそしてく

アル「ほら越後、行ってこい!」

越「き、緊張するく!!!」

アル「ここまで来て怖気付いたのか!? 根性見せろ!」

越「わ、わかったよ……（汗）」（スタスタ

荷「………越後君大丈夫でやんすかね?」

アル「んー……多分まずいと思う（汗）」

荷「ちなみにもし越後君と天月さんが付き合っちゃったらどうするでやんす？」

アル「それはそれでいいんじゃない？」（スタスタ）

アル「おつ、帰ってきたぞ！どうだつ……!?越後!?どうしたその怪我!？」

帰ってきた越後は、全身から血が流れて、見るも無惨な姿となっていた。誰にやられていたかは言うまでもあるまい。

荷「な、何があつたでやんす!？」

越「……なにも……ながつだ……!？」

アル「そこでそのネタぶっこまなくていいから（汗） どうしたって聞いてんだよ!？」

越「……天月さんに……『私がアルペジオ以外の男と付き合うと思つていいのか!』つて、怒られた……。」

アル「はあ?何寝ぼけたこと言つてやがる（汗） 取り敢えず保健室行くぞ!？」

くそしてく

アル「なあ越後ー、もうやめようぜー。」

越「いやだ!俺は彼女が欲しい!!」

アル「そうは言つても……奈央は付き合つてる人いるらしいし、いつきちゃんはそういうのよくわかんねえだろうし、カズは男嫌だし、浜野は……殺されるだろうし、紫

杏はそもそもそういうの許さないだろうし、妙子………そうだ！妙子はどうかだ!？」

荷「おお！その手があったでやんす！」

越「あ、あれ？さ、芳槻は……？」

アル「ナニカイツタ？（ドドドドド）」

越「ひいひい!!何でもない!!!」

くそしてく

アル「さて、例のごとく越後に行かせたわけだが、どう思う荷田？」

荷「んー、多分無理な気がするでやんす（汗）」

アル「だよなー、越後だもんなー（汗）」

荷「でも妙子さんなら……ワンチャンあるでやんす!」

アル「どうだかねえ？」

荷「そーいやアルペジオ君。」

アル「んー？」

荷「最近芳槻さんとはどうなんでやんす?」

アル「ん?どうって、何が?」

荷「どこまで行ったかって事でやんす。（ニヤニヤ）」

アル「ど、どこって……そりゃあ……2人でデートしたりとか?」

荷「うわあ、アルペジオ君もヘタレだったでやんすか笑」

アル「わ、悪いか!!」

荷「そこはキスするとか、後は『自重』とか笑」

アル「アウトロー!!!ま、まだ早いわ!」（スタスタ

アル「ほ、ほら、越後の奴帰ってきたぞ!」

荷「(上手く話を逸らしたでやんす。)」

アル「越後!どうだった!?!」

越「……駄目だった。」

アル「そ、そうか(汗) ドンマイ越後。」

越「いや……それはどうでもいいんだが……。」

アル「?」

越「実は……三島は前から付き合っていた人がいたらしい。」

荷「そ、そうだったんでやんすか。」

越「た、ただその付き合ってる相手が……。」

アル・荷「相手が……?」

越「……高科だった(汗)」

アル「」

12 野球部に出会いを求めるのは間違っているだろうか?

一 荷
同 「
シ
エ
ー
ー
ー
ー
ツ
!!!?!?!?!?!?
」

紫杏事変

私は神条紫杏。親切高校の生徒だ。まあ、今日は休日で、私は今街に来たわけだが。理由は服を買うためだ。つい最近私のカーデイガンが不慮の事故（アルペジオのやんちゃ）によって破れてしまつてな。彼奴は弁償すると言つていたが、まあ、どちらにしろそろそろ買い換えようと思つていたからな。そういうわけだ。

神「しかし……相変わらずこの町は人が多い……。早く買つて帰りたいものだ……。くそしてく

神「おつ、あつた。」

その日私は、前のカーデイガンを買つた店で、前と同じ物を買つて帰る……。はずだった。

神「よかつた。この色が一番落ち着くからな。さて、後は買つてかえ……………」

その時の私は、愚かだった。ある物に目がいつてしまったのだ。

『春シーズンの流行服』

神「……はっ!!いい、いやいや!私はこういう可愛らしい服とかには全くもつて興味なんて無いからな!!興味なんて……。」

くそしてく

店員「ありがとうございます。」

神「……………」

結局買ってしまった(汗) ま、まあ、何時か使う機会があるかもしれないからな！
う思えば今のうちに買って損はないな！

く帰宅後く

神「……はあ。」

我ながら呆れてしまう。私がこんな誘惑に負けてしまうとは(汗) ま、まあ、どうせ
直ぐには着ないんだからな。

神「……そうだ、今すぐには着ないからな。……………き、着てみるだけなら

いいかな……………」

く少女試着中く

神「……………」

ま、まあ、悪くないな。着心地も悪くないし……………結構可愛いし……………。

神「こ、今度これを着て外出するの……………はっ!!」

ダメだ！これを着た私が仮に出かけたでしょう。もしたまたま親切高校の生徒に
会ってしまったら私は終わりだ!!特にアルペジオとかにあつたら!!

神「そうだ、着て外出するのはやめよう。……………髪を……………解けばわからない……………だろうか？」（スッ）

神「お、おお！」

これなら万が一ばったり出会っても誰も私だつてわからないはず!!

神「よ、よしっ！」

く後日く

神「で、いざ外出したてみたものの、どうすればいいのだろうか？変じゃないだろうか？」

い、いや！そもそも今日の私は親切高校の神条紫杏ではないんだ、一人の女としての神条紫杏なのだから、そもそもそんな事を気にする必要は無い！もつと自然に……………自然に……………。

（ガツン）

神・？「あいたっ！」

神「すつ、すみません！ちよつと考え事をしていて注意がさんま……………!?!」

アル「あいてて……………だ、大丈夫です（汗）」

あ、ああああああああああああああああああああああああああああああ!!!私は今もうお終いだああああああ!!!（泣）

アル「あ、あの？君、大丈夫？」

神「えっ？（泣）」

アル「そ、そんなに痛かった？」

神「い、いや、私はだいじょう……あっ！」

そうだ！今の私は髪を下ろしているだけでなく、服装もいつもと違うからバレないはずなんだった！た、助かった〜（泣）

アル「あー、ごめんね。こっちも余所見しちゃってたし。」

神「い、いや！私は大丈夫だ！心配するな……あっ！し、心配しなくても……大丈夫……です？」

そうだ、例えば姿が違えど声や口調でバレてしまう可能性はあるんだった。気をつけなくては！

アル「……あっ！」

神「ヒッ！な、なんだ!?!……でしょうか!?!」

遂にバレてしまったか!?!（泣）

アル「君、怪我してる！」

神「えっ……あっ。」

どうやら膝を擦りむいてしまったらしい。

神「だ、大丈夫です！これくらい……痛っ！」

アル「足ひねったんだな。よいつしょ。」（ギョツ

神「えっ、ちよっ!?!」

アル「病院まで送って行くよ。俺が悪いんだし。」

神「あ、ああ……。」

……そうか、私はずっと、アルペジオはただのおちやらけたトラブルメーカーだと思ってたが、こんな優しい一面もあつたんだな。

神「……あの。」

アル「ん？」

神「……ありがとうございます。」

アル「……いえいえ、どういたしまして！」

くそしてく

アル「ここまで送れば大丈夫？」

神「ああ、大丈夫……です。」

アル「じゃあね！」（タッタタッタ

結果的に言えば、今日の外出は最悪だった。ひどい目に遭ってばかりだ。……けど、

……本当にたまには……こうやって外出するのも……悪くないかもしれない……誰か

とで一緒に。

く後曰く

アル「……おい、なんだ今日の学生新聞は……。」

『アルペジオ！謎の少女とデートか!?』

アル「なんだこれは!!!俺はこの子を助けたただけだぞ!!」

越「アルペジオく、お前なかなかやるな。」

荷「流石でやんす！（ニヤニヤ）」

アル「ち、違っ!!」（トントン）

アル「ん？誰だ？」

芳槻「………。（ドドドドド）」

アル「あつ……。（ナオオオオオオオオオ!!）一生恨んでやるからなああああああ

ああああああああ!!!」

神「あつ……ああ……。正直に言うべきか……でも正直に言ったら私が……。」

とにかく私が悪かったアルペジオー!!!（泣）

アル「そーいや……あの子どっかで見ることある気がするんだよな。」

サクラ舞う空

さら「…………ごめんなさい。やっぱり私は、誰も信じられません。」

アル「えっ…………ちよっ、何言つて…………。」

さら「私は、これ以上耐えられるほど強くないから……。だから…………さよなら。アルペジオ君。」

アル「さ、さら!!!」

さら「…………最後に、アルペジオ君なら、信じてもいいと思えました…………!!」

アル「ま、待てっ!!!さらあああ!!!」

さら「ッ!?!」

あの日の事を、俺はよく覚えていない。何故って、さらが……目の前で好きな人が自殺しようとしたんだぞ？そんなの死にもぐるいで止めるに決まってるだろ？そのせいか、俺はあの日の出来事をよく覚えていない。結果から話せば、俺はさらの自殺を食い止めることは出来た。荒唐治だったが、どうやって止めたのか……それも覚えていない。しかし、俺はさらの自殺を止められても、さらの心を変えることは出来なかった。アル「ほんと……、役立たずだよな……俺。」

自分の好きな人の心を変えられずに終わった俺。何が好きな人だ……。そんな事言う資格は俺にはない。結果、俺はあの日からさらと話すことはなくなった。寧ろ……さらの方が俺を避けてるみたいだ。

アル「当然……だよな。」

ただ、不思議な事が一つある。あの日以降、『誰も俺と口を聞こうとしないのだ』。まるで……『俺がそこにいないような……』。そういえば、あの日の前日は雨だったわけ？ 今思えば、俺達の関係の終わりを告げる啓示みたいなもんだったのかもな。そして、そんな日々が続いて、俺達は明日、この親切高校を卒業する。沢山の思い出を残して……。

アル「感慨深いなあ。俺が卒業だなんて。」

学校生活最終日の今日の放課後、俺は今さらとの思い出の場所、屋上にいる。あの日の出来事から、まるでここだけ時間が止まっているような気がした。それは勘とかそういうのではなく……俺達の関係自体がここに縛り付けられているように……。ここにさらはいないのに、今も俺の近くにいる、そんな気がしてならないんだ。

アル「さら……。ごめんな。俺が不甲斐ないばかりに……。」

そんな罪悪感に駆られながら、俺は空を見上げていた。三月の空、桜の花びらが舞い上がって、とても綺麗……。なのに、今年の桜の空は何処と無く悲しく感じる。愛おしくなるほど可愛らしい色をした桃色が、まるで灰色に見えてしまう。時間をかき消してしまふ、悲しい色。その喪失感漂う空を不気味に思った俺は、ふと、校庭に目を向けた。そしたら……。

アル「……………あれ？さら？」

そこには俺が世界で唯一愛した子がいた。あの日以来、色を失ってしまった彼女。髪

を束ねているピンク色のリボンも、照れると可愛らしくほんのり桃色に染める頬も、彼女の鏡みたいに綺麗な目も、全てが色を失つてるように感じる。まるで、この空の桜の花びらのように。

アル「忘れ物でもしたのかな？」

するとさらは、急に校門を出て、何処かに向かった。何時も、あの子が帰る道とは全く違う方向だ。

アル「どうしたんだ？………？………？………？………？………？………？………？………？………？」

俺は駆け足でさらに気づかれないように、後をつけた。その道のりは、とてもとても長く感じた。そして俺は、何故かこの時さらの思い出が走馬灯のように駆け巡っていた。

アル「どこまで行くんだ………？」

そしてようやく辿りついた場所は、墓地だった。俺は最初びっくりしたが、多分、亡くなったさらのお母さんのお墓参りだと直ぐに理解した。

アル「明日卒業式だもんな。」

そして俺の予想どおり、さらはお母さんのお墓の前で、自分の学校生活のことや、周りの事を話し始めた。そして線香をお供えして帰る………はずだった。お供えをして、事が終わったと思ったら、さらは別のお墓を探し始めた。

アル「な、なんだ？まだ誰かいるのか？」

俺は不思議に思いながらも、さらの後をつけていった。そしてさらが立ち止まった場所、墓地の中でも一際端の方のお墓だった。

アル「誰のお墓だ？」

不思議に思っていると、突然さらは地面に座り込んでしまった。あまりの出来事に俺は動揺を隠せなかった。そして隠れる必要も無いと感じた俺は、さらの元に駆け寄った。

アル「さらっ！大丈夫か!?どうしたんだよ!？」

しかし、さらは俺の返事には答えてくれなかった。けど、俺はその時はつきりと見た。さらが嗚咽を漏らしている所を。

さら「ひつく……………ふう……………い。」

アル「さら?？」

さらはその時何か呟いていることに気付いた。しかし、嗚咽のせいで何を言っているのかよく聞き取れない。

アル「さら、どうしたんだよ、どうして泣いてるんだ?？」

さら「……………なさい。…ごめん……………なさい……………!」

アル「さ、さら?？」

やっと聞き取れたその言葉は謝罪だった。誰に向けられた謝罪家はわからない。

アル「さ、さら、どうして誤ってるんだ？これは誰のおは……………」

きつとこのお墓に埋葬されてる人が関係してると思った俺は、墓に刻まれている名前を見た。そして俺は、目の前の現実に対して、呆然としていた。

『家 アルペジオ 20XX〜20XX』

アル「……………は？……………な、なんだよ……………これ？なんの……………冗談だよ……………？」

俺はしばらくまともな思考が出来なかった。世界がまるで、180度回転してしまつた、そんな気分だった。

アル「さ、さら……………、これどういう……………ツ！」

しばらくして俺は……………ようやく思い出したんだ。『あの日の事』を、すべて。

……………回想……………

さら「……………最後に、アルペジオ君なら、信じてもいいと思えました……………！」

アル「ま、待てっ!!!さらああ!!!」

その時俺は、今にも屋上から飛び降りそうだったさらの腕を、咄嗟に掴みかかっていた。というか、さら自身、もう屋上から身を投げ出していたところを掴んでいたので、俺はさらを腕一本で支えている形になっていた。

さら「ツ!?離して!!私はもう!だめなんです!!」

アル「離すかバカツ!!!」

さら「そ、それに……このままじゃアルペジオ君も……。」

アル「うるせえ!!そんな事関係ねえんだよ!!!」

さら「ツ!？」

アル「俺は!お前が大好きなんだよ!!死んで欲しくなんかないんだよ!!!どんな悲しい事とか辛いことがあっても!強く、強く生きて欲しいんだよ!!!だから俺はこの腕を離さない!!一緒に落ちた時は!俺がお前を庇ってやる!!」

さら「どうして……どうして……そこまでして私に固執するんですか……?」

アル「何度も……言わせんな恥ずかしい!」

さら「?」

アル「俺がお前の事が好きだからだっつってんだろ!!!」

さら「……!」

アル「ま、待ってろ!今引き上げ……!？」

その時の屋上は、雨のせいで滑りやすくなっていた。何時もなら気にしないが、俺はこの時ほど、前日雨が降っていて、屋上がわずかに濡れていたことを恨んだことは無かった。

アル・さら「ツ!？」

俺が足を滑らせたことにより、俺とさらは、屋上から落下した。俺はその時のことを鮮明に思い出せた。世界がスローモーションに見えた。

アル「……………！」

さら「（アルペジオ君……………ごめんなさい……………。貴方はこんなに、私のことを信じてくれていたのに……………私は……………今更それに気づくなんて……………ごめん……………なさい……………！）」

アル「……………さら。」

さら「……………？？」

俺は落ちながら、さらに『最期』の言葉を投げかけた。

アル「……………負けんじゃねえぞ……………！」

そして俺は、文字通り死力を使って、さらの下に回るようにして、さらを抱き抱えた。そして……………。

さら「……うつ、うう……。」

先生「よかった！気がついたか！」

さら「ここ、ここは……？」

先生「病院だ！屋上から落下したって聞いて驚いたぞ!!」

さら「屋上……!!アルペジオ君は!?無事なんですか!?!」

先生「……彼は、彼は勇気ある生徒だったよ。」

さら「えっ……？」

くくく回想終くくく

アル「……。」

全部思い出した。俺はあの日、さらを庇って死んだんだ。だから、あの日の事だけ俺は今まで忘れていて、人々が俺の事を無視……いや、見えていなかったわけだ。

アル「そういう事か……。」

そして、同時に俺が地縛靈的な感じで、ここに存在している理由もわかった。そして全てを思い出した今の俺なら……………。

さら「ごめんなさい……………ごめんなさい……………ごめんなさい……………」

アル「……………さーら。」

さら「えっ……………？……………アル……………ペジオ……………君……………？」

アル「うっす！久しぶり！ようやく話せたな！」

さら「……………わ、私どうかしてしまっただんでしようか？遂に幻覚まで……………」

アル「ぼーか。幻覚じゃねーよ。ちゃんと俺だよ。」

さら「それじゃあ……………あっ……………ああ……………うわああああああ!!! (泣)」

アル「さ、さら!？」

さら「ごめんなさい!!私のせいで!アルペジオ君は!!死ぬのは私だけで、貴方は関係ないのに!!私だけ、平然と生きて……………ごめんなさい!ごめんなさい…………… (泣)」

アル「さら……………泣くなよさら、俺は気にしてねえよ。」

そう言つて俺は、さらの髪をそつと撫でてやる。久しぶりのさらの髪の毛の感触が伝わってくる。しかし、今のさらは、とても弱々しい感じがした。

さら「嘘……………です。」

アル「嘘じゃないよ。本当に気にしてない。」

さら「気にしてなかったら!!!私の前に現れるはずがありません!!!」

アル「……………その事なんだけどさ。俺もさ、わかつたんだ。俺がここにいる理由。」

さら「ここにいる理由……………」

アル「……………さら。」

さら「えっ？」

俺は、優しくさらを抱きしめる。その小さな体で、今まで沢山の悲しみや苦しみを受け止めてきたと思うと、俺まで泣きたくなる。

さら「あつ……………」

アル「なあ、さら。俺以外に友達出来た？」

さら「……………はい、アルペジオ君と一杯練習しましたから……………」

アル「人と話す時、照れないようになった？」

さら「……………はい。」

アル「お姉ちゃんど、仲直り出来た？」

さら「……………はい……………」

アル「もう……………自殺しようなんて、思わなくなった？」

さら「……………はい！」

アル「……………俺がいなくて……………少しでも、ほんの少しでも、寂しいって、感じた……………」

？」

さら「……………かった。」

アル「…………。」

さら「寂し……………かった……………！もつともつと！一緒に話したかった！！色んな場所に行つて、沢山思い出作りたかった！！何時もの屋上で、二人で寄り添つて……………何時までも一緒にいたかった……………！（泣）」

アル「……………そっか。」

その言葉を、どれだけ待ち望んでいただろうか。俺が、心の底から愛したこの子に、その言葉を言われることを、どれだけ待ち望んでいただろうか。

アル「もう……………心残りなんてないよ……………」

さら「えつ……………？」

アル「もう……………いかなきゃ。」

さら「えつ……………、もう、行つてしまふんですか!？」

アル「……………ごめんよ。でも、嬉しかった！最期に……………お前からその言葉を聞けて！俺は今、本当に幸せなんだ！」

さら「……………アルペジオ君……………」

アル「なあ、さら。もう、迷わずに前に進めるよな？」

さら「……はい！」

アル「けど、やっぱり人間ってのはさ、どうしようもなく悲しい時とかあるんだよ。だから……そんな時はさ、」

さら「……？」

アル「俺が、お前に見えなくても、何時までも見守ってるってこと、忘れないでほしいな……。」

さら「……忘れるわけ……ないじゃないですか……。」

アル「……ありがとう！」

ああ、そうか。

さら「ま、待ってアルペジオ君!!」

もう、俺の大好きな人と会えないってのに。

さら「私……本当は……。」

こいつが、強く生きれるって、確信できたから……だから俺は……。

さら「アルペジオ君のこと……。」

最期まで、笑っていたのか。

今日は卒業式です。この親切高校で私は、大切な物を見つけられました。私の事を心の底から信じてくれる人、愛してくれる人、そして……私の大好きな人。そんな大好きな人とすごせたから……私は今日も胸を張って生きていける。例えばどんなに辛くても、悲しくても、笑い飛ばして生きていける。その強さを教えてくれたのは、ほかの誰でも

ない、あの人だったから。

『卒業式の空、別れの空、旅立ちの空。この日の桜は、とても美しかった。空一面に花びらを飛ばして。それはまるで桜の空のよう。その色はもう悲しい色ではない。可愛らしくもあり、綺麗でもあり、そのくせ、一生懸命に舞っている、そんな桃色の桜の花びら。少女は歩いていく。満開の桜の空の下、未来に向かって。』

SHINSETSU | HAZARD 前編

皆さんおはこんにちばんは！アルペジオだ！えっ？「アルペジオ!?死んだはずじゃ!?」だって？残念だったな大佐、トリックだよ。まあ、もしかしたら俺の命はあと少しかもしれないが。何故かって？それはな……。

？「グオオオオオ!!!」

アル「あつ！噂をすればきやがった!!」

そう、今この親切高校は生徒と先生が俺と一部の人間を除いてゾンビ化してしまったりんや!!! えっ、原因？知らんな。取り敢えずやばいんや!!どこのがっこうぐらし!や!
(汗)

アル「くっつそ！次から次へと……!」

ちなみに対処法はないゆえ逃げ惑うしかないというね(泣) ちなみに今のところの生存者は俺と荷田と紫杏だけしかわかっていない。カズのゾンビ化とか勝てる気しないわ(汗)

アル「……さら……大丈夫かな?……ゾンビ化したさら……。」

ヤバイ、目覚めそう。ってそんな冗談は置いておいて。とにかく職員室に逃げなければ。今生存者達は職員室にて籠城してるんだ。

くくくそしてくくく

神「無事でよかったアルペジオ。」

荷「必要な物を取りに行くのも命懸けでやんす(汗)」

俺が外に行つてた理由は、取り敢えず籠城するために必要そうな物を集めてくるためだ。

アル「災害とかが起きたとき用に用意されてた缶詰とかあつたから食料には困(ズ
ガーン

俺が言いかけたその時、誰かがドアを蹴破つて職員室に入ってきた。

カズ「ア……アア……」

アル「うわあ、一番恐れてた事態だ(泣)」

神「カズ……」

荷「に、逃げるでやんす！間違ひなく戦闘力上がってるでやんす！」

アル「私の戦闘力は530000です。」

荷「ふざけてる場合でやんすか!!! (汗)」

くくく逃走中くくく

アル「しまった、無我夢中で逃げてたらはぐれてもうた（汗） ん？あれは……確か生
物室か……。」（ガラガラ）

アル「し、失礼しま……す!?!」

入るなり俺が最初に感じたのはとてつもない臭いだった。間違いなくゾンビ化した
誰かがいる。しかも……

（グチャツグチャツ）

アル「な、なんか嫌な予感が……。」

恐る恐る中に入り、音のする方へ進む。

アル「……………」

その音の正体を見るなり俺は凍りついてしまった。そこにいたのはゾンビ化した奈
央と妙子だったのだから。しかも、2人はお互いの腕や臓器を食べていたのだから。
さっきの音の正体は、2人がソレを食べている音だったのだ。

アル「っ！（まだ2話の百合カップル設定引きずってたのかよ!!（汗）」

ナオ・タエコ「（チラツ）」

アル「っ！（しまった！気付かれた!!） う、うわああああああ!!」（ガタン

俺は猛ダツシユで逃げた。いや、俺自身に百合耐性がない以前の問題に、二人が俺を

襲いかかってくる以前の問題に、その壮絶な場面に耐えられなくなったからだった。

くくくそしてくくく

アル「はあ……はあ……お、追ってこないようだな。男に興味なしかよあんの野郎め。」

？「……………見ツケタ。」

アル「あ？誰を見つけたっ……………て？」

サラ「……………アルペジオ君……………ヤット……………会エタネ。」

SHINSETSU | HAZARD 後編

アル「さ、さら！無事でよかった！いやー、もういきなり声をかけられるからびっくりしちゃったよ！汗」

サラ「スママセン、驚カセルツモリハ、ナカツタンデス。」

アル「まあ、無事ならいいよ！安心した〜。」

サラ「……………アルペジオ君。」

アル「ん？どうした？」（ドサッ

アル「ちよっ！さら、何を！」

さらが不意に俺を押し倒したのだ。一瞬の事で戸惑ったが俺は直ぐに抵抗することはできた。しかし、さらの手が俺をがっちりと押さえつけていて離れられない。前までのさらには……………こんな力はなかったはずなのに……………。

サラ「……………ネエ、アルペジオ君。私今、トツテモ幸セナンデス。」

アル「し、幸せ？な、何を……………」

サラ「コノ身体ヲニナレテ、私ハコノ上ナク、幸セナンデス。」

アル「ッ！」

俺は、認めたくなかった。さっき、さらと初めて会った時、その姿を見て、薄々勘づいていた。けど、認めたくなかったんだ。

アル「さら……お前……。」

サラ「フフフ、アルベジオ君ガ私ト同じニナレバ、ズーツト一緒ニイラレルンデスヨ？ズーツト、ズーツト。ナニモ……辛イコトモナク。」

アル「………確かに。」

さらの言ってることは正しい。俺がさらと同じ境遇になれば、きつと永遠に一緒にいられるだろう。俺だって、本音を言えばそうなりたいさ……けど……。

アル「………じゃない。」

サラ「エツ？」

アル「お前じゃない……俺が好きなさらは……俺が好きなさらは……優しくて、笑うと可愛くて、それに……どんなに辛くたって、どんなに悲しい事があつたって、絶対に逃げずに前向いて歩いて生きていける強い奴なんだよ！俺の大好きな『さら』は、今の『サラ』じゃない……。」

そう言つて俺は、無理矢理サラから離れた。

サラ「………。」

アル「悪いけど俺はゾンビになるつもりは無いよ。俺は紫杏と……荷田と、皆と逃げ
るんでな。」(タツタツタツ)

そうして俺は、一目散に走り出した。振り返ろうとは思わない。振り向いたって、そ
こにさらはいないから……。

くくくそしてくくく

荷「あつ！アルペジオ君でやんす！」

アル「あつ！荷田！紫杏！」

紫「アルペジオ！無事でよかった。」

アル「ここはもう駄目だ。早いところこの学校から脱しゅ」

？「ソウハイキマセン。」

3人「!？」

声のする方を向くと、そこには数え切れない程のゾンビがいた。そして一番先頭に
いたのは……

アル「……サラ。」

サラ「……酷イ……酷イ。アノ時……私ニ……好きダツテ……信ジロツテ……言ツタ
ノニ……！」

紫「芳槻!？」

荷「わわわ！アルペジオ君！何とかするでやんす！」

アル「違うぞ二人共……。あれはさらじやない。」

紫「芳槻じゃない？」

サラ「酷イヨ……酷イ酷イ酷イ酷イ酷イ酷イ酷イ酷イ酷イ酷イ酷イ酷イ!!!シンジ
テタノニ!!!ダイスキナノニ!!!」

紫「……確かにアルペジオの言う通りのようだな。あれは芳槻じゃない。」

荷「か、完全に別人でやんす……（ガクガク）」

アル「サラ……。」

サラ「……ハ、ハハ……。モウ、イイデス。貴方ガナント言オウガ……貴方達ヲ私達

ト同ジ存在ニスルコトニ、変ワリハアリマセン……。」

アル「ッ！」

紫「逃げるぞ！早く！」

荷「わかってるでやんす!!」

サラ「逃ガシマセン……。」

アル「っ！回り込まれたぞ！」

サラ「フフフ、モウ、終ワリデス。」

荷「ああ、まだ見てないアニメがいっぱいあったのに（泣）」

紫「くっ！ここまでなのか……？」

アル「くそっ！」

サラ「ツカマエタ。」

アル「うわあああああああ!!」

(ガバッ

アル「はい！全滅——!!!……あれ？」

ここは……俺の家？………夢だったのか………？

アル「なんだよ夢オチかよー！つまんねえの。どうせならゾンビになったらどんな感じになるのかぐらいは知りたかったわ！………まあ、」

つまりは誰もゾンビ化してないし、サラも………さらのままだつてことだよな。それなら………夢でいいか！

くくくそしてくくく

アル「何時もの学校。何時もの登校時間。やっぱり夢だったんだな。」

さら「あつ、アルペジオ君！」

アル「さ、さら！あく本物のさらだく泣」

さら「ど、どうしたんですか汗」

アル「ううん、なんでもないよ。それより、お前が俺と同じ登校時間とは珍しいな。」

さら「あつ、はい、ちよつと………聞きたい事がありました………」

アル「聞きたいこと？なんだ？」

さら「えつとですね………」

「アルペジオ君は、永遠を、望みますか？」
そう言って彼女は、妖しげな笑みを浮かべた。

MGN

待たせましたね！なおつちですよ！親切高校で新聞部をやっています！今日も一日、頑張るぞい！えっ？何を頑張るのかですか？ネタ探しですよ！この前はアルペジオ君の浮気現場を撮影して大反響を得ましたからね！

奈「とは言ったものの、まだ収穫ゼロですよー汗 このままではいけません！なんとかしなければいけませんね！」

くくくそしてくくく

奈「おつ！ニユダつちと越後君発見です！……とはいえこれがどんなネタになるのやら汗」

荷「いやー！それにしても越後君！あれはびつくりしたのでやんすねー！」

越「まったくだぜ！まさか、高科と三橋が付き合ってるなんてなー！」

奈「……………えー!?なんでバレてるんですか!?あれですか!?普段スクープする側をスクープしてやるっていう魂胆ですか!?っていうかなんでバレたの!?はっ！タエタエが言ったんですね！そうに決まっています！もー、なんで言っちゃうかなー。」

アル「な、奈桜？（汗）」

奈「はひい！ごめんなさい！テンション上がると声が大きくなっちゃう病気なんです！」

アル「それは病気じゃなくてごくありふれたことだ汗」

奈「あつ、なーんだアルペジオ君かー。」

アル「さつきからなんか一人で騒いでたから気になつてな。」

奈「ねー、アルペジオ君。私とタエタエが付き合つてたの知つてました？」

アル「ん？知らないでも思つてたのか？」

奈「流石私とリンさんの次に行く情報屋のアルペジオ君ですね！」

アル「おっと、リン姉さんの話はNGだ。」

奈「えー、なんでですか？」

アル「色々あるんだよ。」

奈「禁断の恋ですか!?!さーらという天使がいながら！」

アル「禁断の恋はどつちかつーとお前らだ!!!ていうかちげーよ!!!」

奈「ま、まあその話はそのうち聞くとして、助けてくださいアルペジオ君！」

アル「どうした？」

奈「このまま私なんのネタも得られなかつたらスクープする側がスクープされるつていう汚名を着せられてしまいます！どうか私を助けてください！」

アル「……ま、まあ、よくわからんが、わかったよ。友達として助けてやるよ。」

奈「かたじけないでござる！」

くくくくくくくく

アル「……………奈桜。」

奈「なんですか？」

アル「ネタを探すために取材に出かけるのはいい。というかぜひそうして欲しい。だ
けど！何故男子更衣室をのぞく必要がある!!!」

奈「それはアレですよ。男子のエ○本やらを探すためですよ！」

アル「お前男子を社会的に抹殺するつもりか!!!」

奈「あとはアレですよ。男子同士の禁断の」

アル「それ以上言うな奈桜！たのむ!!他を探そう！」

奈「えー、つまんないのー。」

くくくくくくくく

奈「というわけで次は生徒会室です！」

アル「お、おい！ちよつと待っ」

奈「こんにちはー！」

紫「なっ！高科にアルベジオ！ここはレジャー施設気分で来る場所じゃないぞ！」

アル「例えが下手！」

紫「う、うるさい！（照）」

奈「ありやりやー。ここにも良さそうなネタは……………あれ？」

アル「ん？どうした？」

奈「前来た時はこんなクローゼットなかったような……………」

紫「ああああああ!!そこは駄目ええええ!!」（ガチャ

奈「こ、これは……………」

アル「……………服……………だな。」

奈「紫杏さん！この服は誰の……………」

紫「……………（プルプル）」

アル・奈「あつ……………し、失礼しましたー！」

紫「二度と来るなー！！うわーん!!!泣」

くくくそしてくくく

アル「い、今のは確かにネタになるが……………」

奈「さ、流石に今のをネタにするほど私も酷くないですよ汗」

アル「引き続き探すか……………おっ！さらー！」

芳「あつ！アルペジオ君にお姉ちゃん。何してるんですか？」

奈「見ての通りネタ探しです！」

アル「何故かこいつの権威が危ういんだと汗」

芳「は、はあ汗 ……あつ、そういうえば……。」

奈「おっ！ネタですか!？」

芳「ね、ネタというか、最近、近くの公園に謎の建造物が出来たって噂が……。」

アル「謎の建造物か……。行ってみるか？」

奈「はいです！」

くくくそしてくくく

アル「多分この公園だろうな。」

奈「手分けして探しましょう！」

アル「おう。」(タツタツタツ)

アル「奈桜のやつ張り切ってるな。しかしそう簡単に見つかるわけ」

奈「ありましたよ！アルペジオ君！」

アル「はええよ!!小説のペース配分を考えると!!」

奈「あれじゃないですか!?!ほら！公園に家がありますよ！」

アル「ほんとだ！公園に家がある………って、ちよつと待て奈桜!!!」

奈「な、なんですか？」

アル「コレ、イエジャーナイ!!!ダンボール!ダンボールだこれ!!!」

奈「だ、ダンボールで出来た家!スクープ間違いないです!」

~~~~~

『公園に謎の建造物が!正体はダンボール製の要塞!!』

アル「要塞つてあんた汗」

奈「なおうちの勝利です!!」

~~~~~

待たせましたね!高坂茜です!お兄ちゃんを募集中です!今日も1日、頑張るぞい!

茜「ふふふくん♪あれ?学生新聞が落ちてます!うわあ、新聞なんて久しぶりです!

どれどれ……ああ!アカネハウスが記事に載ってます!これで知名度更にアップです

!やったねたちちゃん!家族が増えるかもよ!」

カーテンコール

紫「……ここは……？」

私は神条紫杏。ジャジメント日本の会長であり、ツナミグループの会長……だった。過去形なのは、私がたった今死んだからだ。フフフ、呆気ない最期だったよ。それはそうと、ここは何処だ？ いわゆる……あの世というものだろうか？

紫「そうか……本当に死んだんだな……私……。」

フフフ、思えば私の人生は最悪だったな。周りから認められず、周りに受ける人物像を作り、私を殺した。今もそうだ。これは『私』の言葉であって、『神条紫杏』の言葉じゃない。この後に及んで私はこんなキャラクターを演じ続けている。本当に救えない。哀れだ、自分でもそう思う。そうか……神条紫杏は、『とつくに死んでいたんだ』。今死んだのは神条紫杏が演じる役（キャラクター）の1人。ジャジメントの会長としての神条紫杏。皆の憧れの的である神条紫杏。数え切れない神条紫杏がいる。その中のたった1人が死んだだけ……。だから未だに私は演じ続けている。……あれ？……じゃあ私はなんでここに……？ 死んでないはずの私はなんでここに……？ そもそも殺されたのは本当に『ジャジメントの会長としての神条紫杏』なのか……？ じゃあ私は……誰なんだ

……?どんな神条紫杏なんだ……?そもそも……私は、神条紫杏なのか……?私は……
私の……名前は……なんだったつけ……?わからないわからないわからないわからないわからないわ
いわからないわからないわからないわからないわからないわからないわからないわからないわからないわ
らないわからないワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイ
ワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラ
ナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワ
カラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラ
イワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワ
ラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラ
ワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワ
ナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラ
カラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワ

? 「お前は、他の誰でもない、神条紫杏だろ?」

……………誰かの声が聞こえる。懐かしい声……………明るくて、どこかおちやらけていて、けれど安心できる……………私の大好きな声……………。この声は……………。

? 「アル……………ペジオ……………?」

アル 「久しぶりだな紫杏! 元気してた?」

? 「紫……………杏……………?」

アル 「おいおい、自分の名前も忘れちゃったのかよ。」

そう言ってアルペジオはあの懐かしい笑みを浮かべる。わからない……………アルペジオの事はよく覚えているのに……………私は私の名前を思い出せない……………。そもそも……………。

? 「なんで……………ここに……………?」

アル「……あれからちよつと色々あつてね苦笑」

あれから……？……その時、私は自分の名前より先に、あの日の出来事を思い出してしまった。

？「ツ！わ、私……私は……お前になってことを……！い、いや、そもそもあの日の私は私だったのか……？わからない……わからない……。」

アル「お、落ち着けよ（汗）別に気にしてないよ。お前を変えられなかったのは俺なんだから。」

？「ち、違う……！あれは……あれは………な、名前が……思い出せない……。」

アル「だーかーらー、お前神条紫杏だろ！しーあーん！」

？「わ、わからないんだ………私は、余りにも沢山の人を、演じてしまったんだ……もう思い出せないんだ………助けて……アルペジオ……。」

アル「………紫杏。」

？「えっ？あつ……。」（ナデナデ

アル「落ち着いてよく考えてみるよ。自分の名前。まだ、お前の名前は死んでないはずだぞ？」

？「ど、どうしてわかるんだ？」

アル「………だって、紫杏は俺の事を覚えてただろ？俺と話したりしてた時の紫杏

は、紛れもない本物の紫杏だったはずだぞ？」

？「お前と一緒にいた頃の……私……？」

私は、思い出してみる。あの頃の私達を……。

？「……………アルペジオは、何時も問題ばかり起こしてたな。」

アル「い、いや、それは思い出さなくてもいいんじゃないかな？（震え声）」

？「それで……………私が何時も怒って……………。けど何時も私はお前に言いくるめられて

……………。ついには私のプライベートにまで関与してきたな。」

アル「えっ？何のこと？」

？「……………あの日、お前が病院に連れていった女は私だ。」

アル「えー！そーなのお!?!知らなかった!!」

？「(ムッ)」

アル「あつ、いや、続けて(汗)」

？「……………けど、私が周りに理解されないような悩みや……………辛い思いをしてる時……………何時も助けてくれたのは……………アルペジオだった。沢山励まされた……………今みたいに頭を撫でられて……………恥ずかしくても嬉しくて……………。そのうち私は……………お前に心を開いたんだ……………。本当の私を……………知ってほしかったんだ……………！」

アル「……………。」

？「本当の私は……誰かの助けがないと、何も出来なくて！何時も周りの期待を裏切って！周りの人の評価を恐れて逃げて！でも……誰にも頼ろうとしない弱虫で……取り柄もない……。それが本当の私……。……本物の……。『神条紫杏』。」

アル「……。やつと思い出せたんだな。」

そう言つてアルペジオは笑つた。私は……。神条紫杏……。死によつて『役（キャラクター）』を降板した……。本物の私。

アル「……。なあ、紫杏。」

紫「なに……。？」

アル「どうだ？『台本』を置いた気分は？」

紫「……。なにもかも……。無くなっちゃつたみたい……。。」

アル「なにもなくはないだろ？どんなに些細な事でもいいんだ。今のお前には、何かある？」

紫「……。……。アルペジオがいる。」

アル「ぶふっ！ほんとにちっぽけな事だな笑」

紫「ちっぽけじゃない。私にとっては、これ以上のものは何もない。」

アル「それは光栄だな笑」

紫「本当の私に、大切な事を教えてくれたのは、他の誰でもない、アルペジオだから。」

だから私はもう、演劇からは手を引くよ。決まった役はいらぬ。台本もいらぬ。ここからは私の、私自身のアドリブ。」

アル「……それでいいんだよ紫杏。もう、自分を押し殺さなくなつていいんだよ。」

紫「うん。だから……これで私の演劇は終わり………じゃない。」

アル「えっ!?!お前この後に及んでまだ演じるの!?!」

紫「違うわよ(汗) ……演劇の終わりは、ハッピーエンドで締めくくるって決まつてるのよ。」

そうして私はアルペジオにキスをする。そう、これでこそハッピーエンド。私の演劇の集大成。私の思いの全てが詰まつた締めくくり。

アル「………つたく、盛大なハッピーエンドにしやがつて!こいつめ!」(コツン

紫「ちよつ、ちよつと!何するのよ!」

アル「不意打ちは卑怯だろうか!!」

紫「じゃあ不意打ちじゃなければいいってこと?」

アル「………ま、そうだな。」

紫「ふふつ、死んだからつて自由になれると思つたら大間違ひよ。絶対にアルペジオから離れないから!まだカーテンコールが残つてるんだから!」

アル「……ハハハ、随分と長いカーテンコールだこと。いいぜ、最後まで付き合つて

やるよ。」

紫「……………うん……………」

私が押し殺してきた日数は、思い出は、とても多かった。けれど、それもこれから埋めていけばいい。アルペジオとなら……………出来る気がする……………いや、絶対に出来るから……………。さあ、長い長い、カーテンコールの始まりの時。この先には、きっと明るい未来が待っているから。

小話詰め合わせ その1

その1 魔法少女誕生！

アル「……覚悟はいいか？」

荷「当然でやんす！」

越「失敗したら死ぬからな？」

岩「……何やってるんだ？」

アル「おつ！岩田！フツフツ……今から俺達は『浜野の眼鏡強奪作戦』を開始するのだ！」

岩「なるほど、今日でこの3人は見納めか。」

荷「ちよつと！最初からオイラたち死ぬ前提で話さないでくれでやんす！」

アル「ぜーったい成功するから！」

くくくそしてくくく

浜「……。」

アル「いた！いいか、作戦通りにやれよ！」

越「うつつす！……いくぞ！うおおおおお！！！」

浜「！」（右ストレート）

越「あべしっ！」

荷「い、痛そうでやんす汗」

アル「怖気付いても仕方ないだろ！越後に気を取られてる今しかねえ！うおりやあああ！」

浜「アルペジオ!?」（パシッ）

アル「つしやあああああ！ゲットだぜ！（某マサラ人風）」

荷「大成功でやんす！後は早く逃げるだけでやんす！」

浜「……………」

越「おいおいヤバイぞ！早く逃げ」

浜「たくんじょう！」

3人「!?」

浜「呼ばれて飛び出てジャジャジャーン！魔法少女浜野ちゃんだぞっ！☆よつろしく〜！」

アル「……………」

荷「あ、アルペジオ君、口開いてるでやんす汗」

アル「へ？あ、ああ、スマン汗」

越「め、眼鏡を取るとキャラが変わるのか……?」

アル「それにしたって変わりすぎだろ!!!」

荷「こ、こんな事になるなら眼鏡つけてた時の方がいいでやん」

浜「とりやー!」(ゴスツ)

荷「ぐええ!」

越「な、なんか前よりも凶暴になってる気が……」

浜「それー!」(ドゴオ)

越「ツエ、エン!」

アル「あわわわ……。」

浜「とりやー!どんどんかかってこいやー!」

アル「お願いだから元に戻ってー!!!泣」

その2 五十鈴事変

アル「あつ!やつべえ、教室に忘れ物した!悪い荷田!先に部活行って!」

荷「あつ、わかったでやんす!」

くくくそしてくく

アル「忘れ物忘れ物つと！」（ガラガラ

天「!？」

アル「!？」

俺が教室に入って一番先に目に飛び込んできた光景は……余りにも衝撃的な場面であつた。

アル「い、五十鈴……？何やってんの……？」

天「ば、馬鹿っ！教室に入る時ぐらいノックしたらどうなんだ!!」

アル「職員室かここは!!!!それでさ………それ、誰の体操着よ汗」

天「こ、これは私のだ！」

アル「嘘つけ！男子用の体操着じゃねーか！誰のかはもういいや、質問を変える。お前、なんでその体操着クンカクン」

天「わあああああ！それ以上言うなあああああああ！」

アル「………汗」

天「うう……この事は黙っててくれ……。」

アル「わかったよ汗 俺も忘れ物取りに来ただけだし。」

天「そうか……。で、その忘れ物ってなんなんだ？」

アル「……………体操着。」

天「……………。」(ドサツ)

アル「気絶した!?しつかりしろ五十鈴ーー!!」

天「(もうダメだ…………おしまいだあ…………泣)」

その3 百合

アル「……………」

俺アルペジオは今、物凄い重大な事に気づいてしまった。この学校…………百合が何本も咲いてる(汗) ナオタエだとか、あさゆらだとか、天唯だとか…………かなりの百合カップルが存在する事に気づいた(汗)

アル「これは…………男子高校生最大の危機なんじゃ…………汗」

?「やつと事の重大さに気づいたでやんすかあ?」

アル「うわっ!荷田!何時からそこに!」

荷「これは大ピンチでやんす、少子高齢化がまた進むでやんす。」

アル「そ、そんな大袈裟な…………汗」

荷「とにかく!今から百合カップルを直ちに排除しに行くでやんす!」

アル「は、排除って汗」

くくくそしてくくく

荷「まずは高科さんと三橋さんのカップルからでやんす。」

アル「えー、あいつら引き離すの？汗」

荷「えーじゃないでやんす！これも男子の未来のためでやんす！」

奈「あつ！アルベジオ君にニユダ君！」

荷「ニユダって言うな。アルベジオ君！今がチャンスでやんす！」

アル「ちや、チャンスって言われても汗」

奈「なになに？なおつちに何か聞きたいことがあるんですか？」

アル「……奈桜、お前と三橋って……ほんとに付き合ってるのか？」

奈「なーんだそんな事ですか。本当ですよーもう！当たり前じゃないですか！」

アル「いや当たり前ではねえよ汗　ちなみにどこまでいった？」

奈「聞きたいですか？」

アル「えつ、まあ。」

奈「では教えてあげましょう！ナオタエのすべて！」

アル「お、おう汗」

奈「まず『自主規制』はしました！」

アル「ちよつと待てー!!!おまつ！最初からクライマックスかよ!!電王かよ!!馬鹿

じゃねーの!？」

奈「お、落ち着いてください汗」

アル「ま、まあいいや汗 続けて。」

奈「御両親に挨拶しに行きました！」

アル「既に結婚する前提の付き合いツ!!」(ズドン)

奈「あ、アルペジオ君!?!地面に顔を打ち付けてどうしたんですか!?!」

アル「大丈夫だ、問題ない。続ける。」

奈「え、えーつと、こ、子供は二人いたらなーつて。」

アル「オーマイリトルナオー!!オーマイリトルナオサーン!!!」

奈「あ、アルペジオ君!？」

アル「……すまん、ありがとな。参考になった。」

奈「は、はあ汗」

くくくそしてくくく

荷「どうだったでやんす?」

アル「……荷田、俺にはあのピュアなカップルを壊すことは出来ない。別のターゲット

トにしよう。」

荷「は、はあ。じゃあ七島さんたちはどうでやんす?」

アル「……いや、あのカップルは問題ないと思う。」

荷「どうしてでやんす？」

アル「……麻美がゆらりの事を友達としか思っていないから。」

荷「じゃあ問題ないでやんす笑」

アル「残るは天本と唯のカップルか……。」

荷「い、嫌な予感しかししないでやんす汗」

アル「ん？噂をすれば……あの2人だ！」

荷「後を追いかけるでやんす！」

くくくそしてくくく

アル「……女子トイレ汗」

荷「嫌な予感の中でやんす汗」

アル「……中から何か聞こえるぞ。」

荷「耳をすませるでやんす。」

唯「ああつ……ダメ……もう、駄目です……／＼／＼」

天「ふふつ、まだ早いですよ唯さん。これからが楽しみなんじゃないですか……／＼

／

アル「アウトアウトアウト!!!これ以上やったら小説がR―18指定になる!!!」

荷「もー、誰1人救えない奴らばかりでやんすー!!泣」

?「……お前ら何してるんだ?」

アル・荷「ヒツ!!お、おお鬼鮫先生!?!」

鬼「……ああ、お前ら……いい筋肉してるな……♡」

アル「(まずい……) 荷田!後は頼んだ!!!」

荷「えつ!ちよつ!」

鬼「フッフ、もう我慢出来ん!」

荷「えつ、ちよつ、アーーッ!!!」

ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!

ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!

ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!

ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!

ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!ソイヤツ!

終劇!!!

修学旅行!!! 前編その1

アル「ふふくふく♪た〜だいま〜!」

? 「あつ、おかえりなさいアルペジオさん。」

アル「あれ? 典子ちゃん来てたの?」

典「はい、そろそろアルペジオさんが帰ってくる頃だと思ひまして。」

申し遅れました。私は田村典子といひます。アルペジオさんの住んでるマンションの隣に住んでる、お隣さんっていう感じでは。今のようにアルペジオさんのうちに行つてご飯を作つてあげたりもしてひます。

アル「いつもありがとうね。ご飯作つてくれて。」

典「いゝいゝえ、お気になさらずに。」

私には……両親がひません。そんな私にとつてはアルペジオさんは家族同様の存在なんです。だから……この人のためなら……。

アル「ん? どした典子ちゃん?」

典「あつ、いゝえ! なんでもないです!」

アル「ふーん。」

典「それはそうと……アルペジオさん、なんか今日はゴキゲンですね。」

アル「あつ! そうなんだよ! 驚くなかれ……俺明日から修学旅行なんだよ!!」

典「えっ……?」

アル「京都だよ京都! 初めてだから楽しみだなあ。あつ! 勿論お土産買ってくるからね!」

典「……………」

アル「ん? どうしたの?」

典「……アルペジオさん。」

アル「えっ?」

くくく次の日くくく

芳「東京駅の……確かここに集合のはずですよね……?……あつ! アルペジオ君!」

アル「あつ! さらおはよう。」

芳「はい!……あれ?」

アル「ん? なに?」

芳「アルペジオ君……なんだか荷物が大きくありませんか……?」

アル「き、気のせいだよ!! 汗」

芳「……そうですか？」

アル「そ、そうだよ！汗 ほ、ほら！みんな集まってきたよ！早く行こ！」

芳「あつ、は、はい！」

アル「(あ、あぶねえ……汗)」

~~~~~

紫「全員揃ったな。今から新幹線に乗るわけだが、車内でははしやがないように！」

一同「はい。」

アル「(頼む頼む……京都まではバレないでくれよ!?)」

紫「アルペジオ、何してる？早く乗らないと。」

アル「あつ、はーい！」

~~~~~

アル「あー、緊張した汗」

奈「アルペジオくん！一緒に写真撮りましょうよ！」

アル「おつ、いいぞー。」

奈「これで新聞に載せたらスキャンダル間違いなしですね。(☆▽☆)」

アル「その前に妙子に止められるぞ汗」

芳「その前に私が止めますから大丈夫ですよ。(ドドドドド)」

奈「じよ、冗談ですよ汗 ところでアルペジオ君、少しお話が。」
アル「ん?なに?」

奈「この修学旅行って、あっちでは私服で行動するんですよ? (小声)」

アル「そうだけど? (小声)」

奈「てことは、紫杏さんの私服って……! (小声)」

アル「あつ…… (小声)」

アル・奈「これはネタにするしかない! (☆▽☆)」

芳「ど、どうしました?」

アル・奈「ナンデモナイヨ。」

芳「絶対嘘ですよね汗」

荷「アルペジオ君! トランプするでやんす!」

アル「おっ! いいねー!」

奈「なおつちも混ぜてください!」

芳「わ、私もよろしいでしょうか……?」

荷「いいでやんすよー! ババ抜きするでやんす!」

アル「負けたら罰ゲームな!」

奈「受けてたちます!」

くくくそしてくくく

芳「あうく泣」

アル「ま、まさかさらが負けるとは汗」

奈「フツフツフツ、さらりんの罰ゲームはもう考えてますよ!」

荷「な、なんでやんす?」

奈「さらりん!あのね……(ゴニヨゴニヨ)」

芳「えっ、ええええええ!?む、無理です!!」

奈「罰ゲームですから拒否権はありません!」

芳「んく泣」

アル「じゃあさらの罰ゲームまで、3!2!1!どうぞ!」

芳「よ、芳槻さら、う、歌います!」

荷「おー!歌でやんすか!」

芳「あつ、ありのくままのく姿見せくるくのよく」

アル・荷「ぶふう!アハハハハハハ!」

奈「いいですよーさらー!笑」

芳「うー、もう終りですつ!／／／」

アル「さ、さらにこれを歌わせるとかwwwあつ、悪意しか感じないwww」

荷「じゃ、じゃあ二回戦目でやんす！」

紫「お前ら、騒がしいぞ？何をやってるんだ？」

アル「あつ、紫杏もババ抜きしよーぜー！」

紫「ババ抜きか……いいだろう。受けてたつ。」

くくくそしてくくく

紫「……………（プルプル）」

アル「だと思つた笑」

荷「というわけで罰ゲームでやんす！」

紫「……仕方ない、負けたものはしょうがない。罰ゲームはなんだ？」

アル「これ着て！」

紫「……なんだこれは汗」

アル「何って、某魔法少女のコスプレだけど？」

紫「わ、私にこれを着れというのか!？」

アル「罰ゲームですから（ゲス顔）」

紫「くつ、くろう……。」

くくくお着替え中くくく

紫「こ、これでいいか!?!?!」

荷「おー！いいでやんす！アリでやんす！」

アル「しあーん。」

紫「な、なんだ？」

アル「はい、チーズ！（パシヤツ）」

紫「わ、わあああああああああ!!!今すぐ消せえ!!!」

奈「アルペジオ君！後で送ってくださいね！」

紫「送るなああああああ!!!泣」

アル「（静かにしろって言ってたやつが一番騒がしいな笑）」

修学旅行!!! 前編その2

『まもなく、京都。京都でございます。』

アル「おっ！そろそろつくってよ!!」

荷「楽しみでやんす！」

くくくそしてくくく

アル「うおおおおお!!京都だ！お寺だ！舞妓はああああん!!!」

荷「て、テンション高いでやんすね（汗）」

紫「では、今から宿泊する場所に行くから、全員勝手な行動は慎むように。」

一同「はい。」

くくくそしてくくく

アル「ここが宿泊施設か。ええーつと、俺らの部屋は……403号室か。行くぞ野

郎共!!!」

荷・越・岩「おー！」

くくくそしてくくく

アル「おお！流石京都！和室だったか！」

荷「景色もいいでやんす！」

アル「……………さて、ここまでくれば安心だな。皆、ちよつと話がある。」

アル以外「なんだ（でやんす）？」

アル「……………俺ら以外に誰もいないよな……………」

荷「いないでやんすよー。」

アル「そ、そうか。……………出てきていいぞ。」

アル以外「えっ？」

典「ぶはあ！あー、バッグの中はやつぱり苦しいです……………」

荷「あ、アルペジオ君!?この子は誰でやんすか!？」

アル「ああ、話せば長いんだが……………」

くくく回想くくく

典「……………アルペジオさん。」

アル「えっ？」

典「私も修学旅行に連れて行ってください!!」

アル「フア!?なんで!？」

典「……………アルペジオさんを放っておけません。きっと何かしでかすに決まっています。」

アル「酷い！典子ちゃん酷い！泣」

典「だから私もついて行きます！拒否権はありません！」

アル「あはははあ！どうなっちまったんだあああああああ!!!」

くくく回想終わりくくく

アル「というわけなんだ汗」

アル以外「どういことなんだってばよ……。」

アル「頼む！先生にバレないように上手く誤魔化してくれ!!!この通りだ!!!」

荷「仕方ないでやんすねえ。」

越「やれやれだぜ！」

アル「心の友よく泣」

くくくその頃くくく

紫「先生、話とはなんでしようか？」

先「いやね、明日の行動班のことなんだが……実は2人組にしようと思うのだ。」

紫「…？それは何故ですか？」

先「この修学旅行は生徒同士の親睦を深めるための物でもある。それは男女分け隔てなくあるべき物だと思っている。これが理由だ。」

『我流親切高校では、修学旅行の行き先は当日決めるといふ事になってます。かなり無

茶振りだね！これも設定のためだ、我慢してくれ（汗）

紫「………………。わかりました。ただ、一つだけよろしいでしょうか？」

先「ん？なにかい？」

紫「……………。私事なのですが…………その…………／／／」

くくくそしてくくく

アル「いや、明日楽しみだな！」

荷「今のうちにルートやらを考えておくでやんす！楽しみでやんす！」

越「馬鹿野郎お前ら、修学旅行って言ったら恋愛だろー！」

荷「……………。恋愛なんてオイラには無縁でやんす泣」

アル「そんな事ないって！汗 荷田にだって彼女できるって！」

荷「はいはい、もう寝るでやんすよ泣」

アル「お、おう、お休み汗」

しかし、この時俺らは想像してなかった。寧ろ、本人が一番想像してなかった。まさか…………この後に荷田に彼女が出来るだなんて…………。

修学旅行!!! 中編その1

~~~~翌日~~~~

アル「えっ? 2人組で班を作る!？」

一同「(ガヤガヤ)」

紫「静かに! これは先生達が決めた事だ。皆好きな人と組んでいいそうだ。」

アル「やった! 荷田、一緒に…」

紫「あー、アルペジオはのこれ。」

アル「えっ!?! なんて!？」

紫「いいから!」

アル「はい汗」

~~~~そして~~~~

アル「…ねえ紫杏。」

紫「なんだ?」

アル「なんで俺とお前のペアなの? 汗」

紫「こ、これは、お前が京都でも調子に乗らないように監視するためだ！そ、それ以外の何物でもないからなっ！／＼／＼」

アル「お、おう汗」

「だってら手は握らなくてもいいじゃないか汗」

アル「そういえば……おーい、荷田ー。」

荷「ん？なんでやんす？」

アル「お前のペアは？」

荷「そ、その件なんでやんすけど……。」

和「……よ、よろしくなあ荷田君汗」

アル・紫「……!?!カズ!?!」

荷「二人とも余り物でやんす汗」

和「あ、アハハ、他の女子とかみーんな、男子と組んだりして、残つてもうたわー！

アハハ！」

紫「カズ……お前大丈夫なのか？」

和「アルペジオとよくいる奴やから多分大丈夫……多分汗」

アル「おい荷田！気をつけろよ！カズは男子が苦手なんだからな！変な事すんなよ

！」

荷「わ、わかってるでやんすよ！汗」

和「そ、そんじやあ行こか！」

荷「ほいきたでやんす！」（タツタツタツ

アル「……紫杏。」

紫「なんだ？」

アル「行きたいところある？」

紫「特には……。」

アル「俺一つ提案があるんだけど。」

紫「奇偶だな、私も行きたいところはないが提案はあるぞ。」

くくくそしてくくく

アル・紫「これは2人を尾行する以外ありえない!!!」

紫「あのカズが男子と2人で行動だぞ！これはフォローしないわけにはいかない！」

アル「（もしかしたら……もしかしたら……これがきつかけで荷田にも春が来

るかもしれない！）」

『ちなみに典子ちゃんは部屋でお留守番してます』

荷「んー、何処に行くでやんす？」

和「わ、私あんまそーゆーのなれてないからおまかせで！汗」

荷「むー、そう言われると悩むでやんす……。」

アル「荷田って、別にコミュ症ではないんだよなー笑」

紫「どっちかつというコミュ症はカズの方だな……。汗」

和「ソワソワ」

アル「うわー、カズの奴ソワソワしてるよ汗」

紫「当然だろう、あいつは男子とまともな付き合いをしたことがないんだからな汗」

アル「それは紫杏もだ」(ガツーン)

アル「いてえ！何すんだ！」

紫「余計な事はいいんだ！取り敢えずあの2人だ！」

アル「へいへい。」

荷「じゃあ京都といたらやっぱり清水寺でやんす！」

和「おつ、ええな！じゃあ行こう！」

アル「どうやら清水寺に行くらしいぞ。」

紫「……不思議だな、あのカズが、男子と2人つきりだというのにどこことなく楽しそうにしている……。この調子なら私らがいなくても大丈夫だな。」

アル「荷田パワーのおかげだな笑」

紫「なんだその不可解なパワーは汗」

アル「てかき、今思っただけどき、」

紫「なんだ？」

アル「今の俺ら、わが子を見守る夫婦みたいじゃない？笑」

紫「ふうっ!?!／／／」

アル「どうした汗」

紫「な、なんでもないっ!／／／」

アル「ふーん。おっ! 2人がバスに乗るぞ……………つて、あれ？」

紫「どうしたアルペジオ？」

アル「……マズイ! 今2人が乗ったバス、大阪駅にノンストップで行くバスだ!!」

紫「何い! 乗り間違えたというのか!？」

アル「早く伝えねーと!」(タッタッタッ)

紫「あ、ああ!」(タッタッタッ)

荷「そろそろバスの出発時間でや」

アル「荷田!」

荷「おうわ! アルペジオ君! アルペジオ君も清水寺に行くんでやんすか？」

紫「ち、違う! このバスは清水寺じゃなくて大阪駅に行くバスだ!!」

和「何やて!？」

アル「は、早く降り……」(プーッ！)

時既に遅し、バスが出発してしまった。次の停車場は大阪駅……。

四人「……………やっちゃったああああ!!!」

修学旅行!!! 中編その2

アル「ど、どうすんだよ!このままじゃ俺ら大阪に行っちまうぞ!」

紫「いくら京都と大阪が近いとはいえ、ここからは少なくとも片道で40か50分はかかるな。」

荷「うう、ごめんでやんす。」

和「い、いやいや!荷田君のせいやないって!」

アル「そうだよ、それよりも今はこれからどうやって戻るかを考えようぜ。」

くくくそしてくくく

アル「と、取り敢えずようやく着いたな、大阪汗」

紫「まずはここから京都に戻るバスの確認だな。」

アル「んくつと、後15分後に来るみたいだぞ。」

紫「帰りのバスはノンストップではないから……そうすると……い、1時間半はかかるな汗」

和「宿舎に集合する時間は4時やから……今は何時や?」

荷「えつと……11時半でやんす。」

アル「そうか！それなら何処か散策する時間もあるな！」

和「よ、よかつたあ……。」

アル「じ、じゃあバスが来るまで待つか！」

くくくそしてくくく

アル「あつ！来た！」

紫「早く乗るぞ！」

荷「ほいきたでやんす！」（タツタツタツ

くくくそしてくくく

和「ふう……やつと一息ついたで……汗」

アル「あつ！待ってる間にたこ焼きでも買えばよかつた！失敗したなー笑」

紫「そんなことをしてる場合ではないだろう汗」

アル「そういや2人はこの後予定通り清水寺に行くのか？」

荷「そうでやんすね。それが元々の目的でやんしたし。」

アル「そつか。楽しんでこいよ！（まっ、バレないように尾行するんだけどな笑）」

（キキーツ

アル「おつ？止まったぞ？停留所か？」

紫「い、いや、そんなはずは……。」

アナ『ただいま、渋滞に巻き込まれたためこの先、かなりの時間がかかります。大変申し訳ございません。』

四人「だ、ダニイ!？」

アル「どうすんだ!かなり時間かかるってよ!？」

紫「な、なんだって今日はこんなについてないんだ!？」

荷「むむむ……。」

和「……。」

~~~~~

アル「や、やっと着いた……けど……もう3時……か。」

紫「今から清水寺に向かったとして、片道で30分はかかる……。清水寺に着くのは3時半……。集合時間は4時……。」

和「間に合わへんのか……。」

荷「……いやっ!行くでやんす!」

アル「荷田!」

荷「折角の修学旅行なのにこのまま終わっていいはずがないでやんす!それに……大江山もこのまま終わるのは嫌でやんしょ?」

和「荷田君……。」

アル「……そーだな、行くか！」

紫「アルペジオ！」

アル「心配すんなつて。先生には俺が後で言い訳しとくからさ。」

紫「……本来なら、私はここで止めるべきなんだろうな。(しかし、カズが折角男子と距離を縮められるかもしれんというのだ……。) ……特別に許可する。」

荷「やったでやんす！じゃあ出発でやんす！」

くくくそしてくくく

アル「着いた！今の時間は……やべつ、3時40分！後で言い訳するとはいえ急がねーと！」

荷「わかつてるでやんす！大江さん！」

和「あつ、うん！」

くくくそしてくくく

アル「一通り周れたか？」

荷「そりゃあもう！」

紫「そうか……まずい！もう4時だぞ！」

和「は、走るで！」

アル「わかってる！」（タッタッタッ

荷「おいらの足の速さを舐めるなでやんす！」

和「……あつ！」（ズサーッ

紫「カズ！大丈夫か!？」

和「だ、大丈夫や……ちよつと転んだだけ……ッ！」

荷「あー、ちよつと痣になつてるでやんす……ほいつ！」

和「あつ……。」

アル「荷田、大丈夫か？カズを背負つて走れるか？」

荷「これぐらい余裕でやんす！」

アル「よしっ！バスまで走れえええ!!!」

和「……………」

くくくそしてくくく

アル「や、やつと着いた……も、もう4時半か……。」

荷「ふー、時間は大幅にオーバーしたでやんすけど、楽しかったでやんす！」

アル「じゃあ俺ちよつくら怒られてくるわ！笑」

紫「あつ！待てアルベジオ！」

アル「？」

紫「……私も一緒に行く。」

アル「……おう！ありがとな！」（タツタツタツ

荷「……大江さん、もう足大丈夫でやんすか？」

和「あつ！大丈夫大丈夫！ごめんな、心配かけて汗」

荷「あれぐらいなんてことないでやんす！とはいえ、大江さんは先生に診てもらおうべきでやんす。おいらもついていくでやんす。」

和「あつ、うん。わかった。」

くくくそしてくくく

先「うん、痣にはなっているが心配ないだろう。」

和「そっか、ありがとうございます。」

先「えーつとそれと……あれ？荷田君どうした？顔に怪我してるぞ？」

荷「えっ？あれっ？ほんとでやんす。気付かなかったでやんす。」

先「絆創膏貼つてあげよう。ほら、メガネとつて。」

荷「ありがとうでやんす！」

和「（……あれ？そういえば荷田君の素顔って見たことないような……。）」

（スッ

荷「これでいいでやんすか？」

和・先「……………!!?ええええええええええええええ!!?」

くくくそしてくくく

紫「全く……………今日は散々だった……。カズを助けるいい機会になったとはいえ……。ん?」

和「(ブーツ)」

紫「カズ?どうした?」

和「へっ?あ、ああ紫杏か!えへへ、ちよつとブーツとしてたわー!笑」

紫「……………?もう怪我は大丈夫なのか?」

和「あつ、うん!大丈夫大丈夫!……………あのだ。」

紫「ん?なんだ?」

和「……………荷田君って、彼女いないんやろか……………?」

紫「……………えっ?」

くくくそしてくくく

アル「いやー、もう今日は大変だったよー!」

典「全く、私に心配かけないでくださいよ!もう……………」

越「とはいえ荷田と大江のデートは成功こそはしたんだろ?」

アル「まっ、そうだな。あれを機会にカズももつと男子との交流が深まるといいんだ



けどな……。」

(ガラッ)

荷「ただいまでやんす!」

アル「おつ! おかえり荷田!」

荷「いやー、今日はスリリングでやんしたねアルペジオ君!」

アル「まっ、楽しかったけどな! ……あれ? 荷田顔怪我したのか?」

荷「あーそうなんでやんすよねー。何時怪我したのかわからないでやんすが。」

アル「……そうだ! 荷田、この際素顔見せてよ!」

荷「へ?」

アル「要するにメガネとってみてよって話!」

荷「メガネでやんすか? いいでやんすよ。」

(スッ)

荷「こうでやんすか?」

アル「……ええええええええええええ! 荷田! おまつ、マジかよ!」

荷「な、何がでやんすか? 汗」

アル「お前つ! めつつつつちやイケメンやん!!」

この日、俺達はカズが恋に落ちていたことに気づくことはなかった。荷田がカズの気

持ち気づくのはそう遠くはないが、それはまた別の話。

## セツトヴァルエンチンは死の香り・・・？

2月14日、バレンタインデー。この日は年に一度、男も女も輝く日！これを機に付き合い始めるカップルや、思いを込めたチョコレートを渡す女子も多いだろう。そんな非リア充以外からしてみれば最高のイベントであるこの日、親切高校ではとあるカップルのせいで、戦慄のバレンタインデーになるとは、誰も思いはしなかっただろう……。

(ジリリリリ)

アル「んう……。」

目覚まし時計のやかましい音で目覚めた俺が、最初に考えたのは朝ごはんでも新聞の事でも今日の学校の事でもなかった。

アル「今日、バレンタインデーか……。……リア充どもめ(小声)」

くくくそしてくくく

アル「ふわあ〜。」

別に今日がバレンタインデーだからといって何かが変わるわけでもない、俺はいつも通りの時間にもいつも通りに下駄箱で上履きを履く……はずだった。

アル「……………!? アイエエエエ!? ナンデ!? なんて俺の靴箱封鎖されてんの!? ………………はっ! まさか……………」

こんな事をするのは一人しかないだろう。今までこんな事はなかったが、考えてみれば『今日はバレンタインデーなのだ。』言いたいことわかるな? 俺はすかさず彼奴に電話する。

(プルルル (ガチャ

天「もしもし……………」

アル「五十鈴? お前だろ俺の靴箱封鎖したの汗」

天「あつ、すまない、伝えるのを忘れていた。大丈夫、上履きは取っておいたから、今から渡しに行く。」

アル「いやそれもそうだけど! なんでこんな事したの? 汗」

まあ大体想像つくけど汗

天「なんでって、今日はバレンタインデーだぞ! もし……………私以外の奴がアルペジオにチヨコレートを渡すなんてことがあったら……………私は奴らに何をするかわからない! ……………だから未然に防いだ。」

アル「まあ、そんなところだと思っただけさ汗 そんな心配すんなって。だって俺だぞ？俺みたいな奴にチョコレート渡すのって五十鈴ぐらいだぞ？」

天「俺……みたいな奴……？」

あつ、やべ、地雷踏んだ汗 地雷踏んだぞこれ汗

天「アルペジオはそんな価値の低い奴なんかじゃない!!!」

アル「うわっ！」

耳元から叫び声聞きこえてきたのでびっくりして危うくスマホを落とすところだった汗

天「アルペジオは……私の大切な人だ……私を孤独から救ってくれた……優しい奴だ……。そんな誰にでも優しいアルペジオが、他の女から狙われないわけがない!!!そう思うと……不安で……怖くて……」

アル「わっ、わかったから泣かないで！」

傍から見たら問題だらけの彼女だと思いかもしれない。けど俺は別に不満があるわけじゃない。寧ろ俺の方から五十鈴に告白したんだ。勿論、今も五十鈴の事は大好きだ。こんな性格はしているが、その反面優しいところとかどんな事にでも必死に取り組む姿は俺の目標でもあるんだ。

~~~~~

(ガラガラ)

天「……………！アルペジオ……………」

教室で五十鈴は一人で窓から外を眺めていた。目元は泣いた痕らしきものが見える。

アル「おはよう五十鈴。」

天「おはよう……………。……………あつ、アルペジオ。」

アル「ん？」

天「これ。」

アル「あつ！チョコレート！」

天「こんな物しか渡せなくてすまない。どうしても、私が作ったチョコを食べてほしくて……………」

アル「ううん、五十鈴のチョコレートってだけで俺は満足だよ。こんな嬉しいバレンタインのチョコは初めてだ。」

天「あ、ありがとう。い、一応言っておくが、チョコ以外には何も入っていないからな！心配しなくて大丈夫だ！」

アル「別に疑ってないよ笑」

天「一瞬、私の血を入れようか迷ったが……………(小声)」

アル「ん？どうした？」

天「な、なんでもない。それで……食べて感想を聞かせてくれないか？」

アル「ん？今？」

天「い、今だ……。」

アル「わかった！（パクッ）」

天「……（ソワソワ）」

アル「うん！美味しい！」

天「そ、そうか、よかった……。」

アル「ありがとな！お返し待ってるよ！」

天「ああ、楽しみにしてる。」

アル「……あれ？」

天「どうした？」

アル「なんで俺のグローブがここに？」

天「アルペジオのグローブを取り出さなのまま部室のロッカーを封鎖したらアルペジオに迷惑がかかるだろう……。だから教室に置いておいた。」

さっすが五十鈴！抜け目がないぜ！！汗

くくくくくく

アル「もう昼休みか。」

天「あ、アルペジオ！」

アル「ん？どうしたの五十鈴？」

天「誰からもチョコレート貰ってないよな!? 私だけだよな!？」

アル「う、うん、誰からも貰ってないよ汗」

天「本当……？」

アル「ほんとだよ。」

天「そ、そうか……よかった……。」

アル「そんな心配しなくてもチョコレートなんて……」

少女A「あ、アルペジオ君！」

アル「……？なにかな？」

少女A「これ、バレンタインのチョコあげる！」

アル「!？」

少女A「そ、それじゃ！」(タツタツタツ)

アル「……………」。

後ろを振り向くのが非常に怖い。しかし、このままだと埒が明かないので、恐る恐る後ろを振り向いた瞬間……。

(ガシッ)

天「……………じゃあ。」

アル「？」

天「そのチョコレートを私に渡せ。」

アル「えっ？」

天「渡シテ。」

アル「アツハイ！渡シマス！渡シマス！」

そう言つてチョコレートを五十鈴に差し出した。もしこれを拒否したら世にも恐ろしいことになっていただろう汗

天「……………すまないアルペジオ、私はちよつと用事があるからもう行く。」

アル「お、おう。頑張れよー。」

(タツタツタツ)

アル「……………嫌な予感しかない汗」

くくくその頃くくく

天「……………フヒツ、フヒヒヒヒ、ユルサナイ、私のアルペジオを奪おうとするなんて……………絶対にユルサナイ……………地の果てまで追つてやる……………。アルペジオは私のモノ私のモノ私のモノ私のモノ私のモノ……………。」

う。翌日、俺にチョコレートをくれた少女Aがこの世の終わりのような顔をしていたとい

打ち上げえええええ!!!

くくくあるファミレスにてくくく

アル「よーしみんな揃ったな！これから宴会を始める！準備はいいか！」

一同「おおお!!」

アルA「まず自己紹介！俺はアルペジオ！さらルートのアルペジオ！紛らわしいからアルペジオAって事で！」

アルB「おっす！紫杏ルートのアルペジオです！紛らわしいからアルペジオBで！」

アルC「へーい！いつきちゃんルートのアルペジオです！紛らわしいからアルペジオ

Cでオナシヤス！」

アルD「ども、五十鈴ルートのアルペジオです！紛らわしいからアルペジオDでよろしく！」

アルE「ちーっす、死んだ後にさらに結ばれたルートのアルペジオです！紛らわしいからアルペジオEで！」

アルF「うっす、死んだ後に紫杏と結ばれたルートのアルペジオです！紛らわしいか

らアルペジオFでいいぞ！」

アルA 「よし、というわけで、日々の苦勞が耐えない俺ら、特にアルペジオDの体を
勞うというところで俺が呼びかけたわけですが、今日はみんなに小話を一つずつしてもら
う！」

一同 「おおお！」

アルA 「まあ話の流れからしてトップバッターは俺がいかせてもらいます！」

アルB 「ちなみに彼女に關係することか？」

アルA 「原則はな。でも別にそれ以外のことでもいいぞー。」

アルD 「まあ……話の流れからして俺は彼女の話だろうなあ笑」

一同 「ぜひお願いします！」

アルD 「お、おう汗」

アルA 「じゃあ俺からいきまーす！まあ、みんな知ってる通り、俺はさらの心を変え
ることに成功できたわけなんだよ。」

アルE 「くう……俺にない何かがある！一人の俺にはあつたのかあく泣」

アルA 「……汗 で、だ。まあ、これはそのちょうど2ヶ月後当たりの話なんだけ
どな。」

アルB 「うんうん。」

アルA 「彼奴がバイト始めたわけなんだわ。」

アルC 「えっ? 親切高校ってバイト出来なかったよね?」

アルA 「俺の世界では出来ることになってるんだよ。」

アルC 「なんとまあ、羨ましい。」

アルA 「でさ、そのバイトがさ! ……:メイド喫茶なんだわ笑」

一同 「ぶふう!!」

アルE 「えっ!? 何!? さらにメイド服着て奉仕するのか!？」

アルA 「そーなんだよー笑」

アルE 「……………ぐはっ! (吐血)」

アルF 「ちよっ! アルペジオE大丈夫か!？」

アルE 「だ、大丈夫大丈夫、想像してみたらちよつと破壊力がやばかったってだけで

汗」

アルA 「うん、実際俺もそうだった笑」

アルE 「だよなー! 笑」

アルF 「なるほどなー。彼奴がメイド喫茶ねえ。」

アルA 「あーちなみに、紫杏も一緒にメイド服着てやってたよ笑」

アルF・B 「ぶっ!!! ギャハハハハハハ!!!」

アルB 「ぎやつ、ギャツプがwww」

アルF 「これはひどいwww」

『無慈悲な2人である』

アルA 「よーっし、俺はこんな感じかな？」

アルB 「ん、じゃあ次俺か。えーつとな、まず紫杏の性格についてなんだけどな、まあアルペジオEは知ってるかもだけど紫杏つて実の性格は至って普通の女の子なんだよ。」

アルA 「えっ!? そうなの!？」

アルD 「初耳だなく。」

アルB 「でさ、これは俺が甲子園の決勝まで行った時の話なんだけどよ……。」

~~~~~回想~~~~~

アルB 「もう九回裏……ここで俺がホームラン決めれば勝ち。決めなければ勝つのは絶望的だ……。」

紫 「~~~~ツッ!」

その試合はさ、紫杏も見に来てたんだよ。まあ、そうなりや決める以外ないっわけよ。アルB 「いや決めてやる! 甲子園に絶対優勝するって決めた! 紫杏にも約束した! なら……決める以外ない!」

~~~~~

アルB「……………決まった……………?決まったのか……………?」

荷「やったでやんすー!アルペジオ君流石でやんす!おいらたち優勝でやんすよ!」

アルB「……………勝った、勝ったあああ!!っしやあああ!!」

で、俺達はなんとか甲子園で優勝できたんだよ。でさ、勿論紫杏にも報告したんだよ。

そしたらさ……………。

~~~~~

アルB「呼び出してなんだ?なんかあるのか?」

紫「……………突然呼び出してすまない。……………皆の前じゃ恥ずかしくてできなかつたけど

……………その……………優勝おめでとう。」

アルB「お、おう。ありがとう。」

紫「……………それで……………な、わ、私は信じてから!アルペジオが……………勝ってくれるって……………

でもさ、今日の試合……………すごく不安で……………ああもう!!」(ギョツ

アルB「!?」

紫「すっごい心配のよ!?!負けるかもしれないって不安になって!!あーもー馬鹿あああ

あ!!うわああああん!!」

アルB「ご、ごめんって!なんで謝らないといけないのかわかんねえけど汗」



くくく回想終わりくくく

アルB 「つて事があつたんだよ。」

アルA 「あ、あの紫杏がまさかそんなテンションになるとはwww」

アルD 「くくく! (笑うの必死にこらえている)」

アルA 「ふう………じゃあ、いこうか。」

アルD 「えっ? いこうかって?」

アルA 「君のターンだ!」

アルD 「ええ!? マジで!」

アルA 「マジだ! 早く五十鈴との馴れ初めを教えなさい! 笑」

アルD 「うっ……ま、まあ先に言つとくけど、五十鈴との付き合いはさ、俺から告白してからなんだよね。」

アルA 「えっ!? 五十鈴からじゃなくてお前から告白したの!」

アルD 「そうだよ。だって俺が五十鈴の事好きになつちやつたんだから仕方ないじゃん。」

アルC 「ちなみに……それは今でも?」

アルD 「当たり前じゃん! 好きじゃなかつたらとつくに別れてるよ。」

アルE 「んー、聞いている限りじゃなんの問題もなさそうなんだがな……。」

アルD 「ま、まあ、束縛が強いつてのは思ってるし、病んでるって感じは確かにするんだよ。でもそれももう慣れたっていうか、これから2人で少しずつ変えていけばそれでいいかなーって思ってるんだよね。」

アルA 「言いたいことはわかった。でもあんまり無茶はするなよ?」

アルD 「わかってるって!.....ああああ!!!」

アルA 「ど、どうした?」

アルD 「俺、五十鈴から離れてる時は、定期的にメール送らないといけないんだけどさあ。」

アルB 「(ヤンデレだなあ.....汗)」

アルD 「メール送るのすっかり忘れてた!!!」

アルA 「ファツ!? ヤバイヤン! はやくメールし」

(プルプル)

一同 「.....」

アルA 「だ、誰から?」

アルD 「.....五十鈴からだ汗」

アルA 「よし! 今日解散だな! みんな今日はありがとう!」

アルB・C・E・F 「お疲れー!」

アルD「ちよつ、ちよつと待つてええええええええ!! 俺を見捨てないでえええええええええ!!泣」

# 修学旅行!!! 後編その1

~~~~翌日~~~~

アル「今日は班行動なのか。ええつと俺の行動班は……。」

『アルペジオ 神条紫杏 高科奈桜 芳槻さら』

アル「えつちよっ！俺男子1人かよ!!汗」

荷「ハーレムでやんすね。羨ましいでやんす（ニヤニヤ）」

アル「そ、そうは言ってもなあ汗」

天「……（ムスツ）」

奈「あれ？すずちん、なに怖い顔してるんですか？」

天「何故か……あの班の構成が気に食わない……汗」

奈「？」

『アルペジオ……五十鈴……ヤンデレ……うつ、頭が……。』

~~~~そして~~~~

アル「みんな揃ったかー？」

紫「ああ。」

奈「なおつちもさりんもいますよー！」

アル「じゃあ、行こう！」

~~~~~

アル「まずは金閣寺についたわけだが……。」

紫「私は銀閣派だな。」

アル「どうして？」

紫「あの素朴な感じが好きなんだ。」

アル「ふーん、渋いねえ。」

奈「アルペジオ君！紫杏ちゃん！」

アル「ん？どうした？」

奈「さら！今のもう一回やって！」

芳「は、はい……。」（スツ

アル「な、何やってるのさら汗」

紫「コアラの真似か？」

奈「違う違う！こつちから見て！」

アル「？」

奈「ほら、こっから見たら……金閣寺を抱えるさらりん笑」

アル「ぶっ！お、お前はなんでそんな物を思いつくんだwww」

芳「も、もうやめてもいいですか？恥ずかしいです……／／／」

くくくそしてくくく

アル「そ、それにしても暑いな……汗」

紫「夏だからな……仕方あるまい。」

奈「ぐう……汗 あっ！みんな！あそこでアイス売ってますよ！」

アル・紫「今すぐ買おう!!」

くくくそしてくくく

芳「はあく、幸せです……／／／」

アル「一気に20歳ぐらい若返った気がする！」

紫「お前は20歳も若返ったら死ぬぞ汗」

アル「あっ、そういやそうだな！……ねえ、」

紫「なんだ？」

アル「紫杏の一口頂戴！」

紫「あ、ああ、いいぞ。」

アル「(パクッ) うん、美味い！」

紫「……………こ、これって関節…………。」

アル「ん？どうした？」

紫「えっ!?!いい、いやなんでもない！」

くくその頃くく

荷「いやー、まさか今日も大江さんと一緒になるとは思ってたでやんす！」

和「せ、せやな……………//」

荷「どうしたでやんす？」

和「えっ？」

荷「顔が赤いでやんす。」

和「き、今日暑いから……………あはは…………。」

荷「？」

和「な、なあ…………。」

荷「なんでやんす？」

和「その……………よかつたら、手え繋いだりしない……………？」

荷「えっ!?!手でやんすか!?!」

和「あつ!ごめん!いい、今の忘れてや！」

荷「い、いや、寧ろこつちこそお願いでやんす！」

和「……!そ、そっか……じ、じゃあ……/ /」

荷「やったでやんす!アルペジオ君、おいらついに女の子と初めて手をつなげるでやんす!!」

~~~~~

アル「いやー!楽しかったな!」

奈「いっぱい写真撮っちゃいました!」

アル「後で集合写真とか頂戴!」

奈「了解です!」

アル「サンキュー!……あれ?」

典「……。」

アル「の、典子ちゃん!?ど、どうして外に出てきたの!?!」

典「おかえりなさいアルペジオさん。ちよつと、話がありました。」

アル「話?」

典「いえ、アルペジオさんではなくて……さらさんと。」

アル「えっ?さらと?」

典「……いいですか?」

芳「……はい、いいですよ。」



典「ありがとうございます！」  
アル「……………。(話ってなんだろう?)」

## 修学旅行!!! 後編その2

芳「それで……話ってなんですか？」

典「……………さらさんは、」

芳「？」

典「アルペジオさんの……何処が好きですか？」

芳「え、ええ!?!そ、それは……// //」

典「……………」

芳「……私は、アルペジオ君は、別に特別カッコイイとか、頭がいいとか………そういうのは無くて、何処にでもいそうな男の子だと思います。」

典「は、はあ……………」

芳「お人好しで……何時もどこか抜けていて……可愛い女の子が好きで………本当にどこにでもいそうな人だと思ってます。」

典「……………」

芳「……でもね、私知ってるんです。アルペジオ君の良いところたくさん。人一倍優

しくて、誰よりも他人を考えて、大切な人のためなら自分の身を平気で投げ出してしまふ。私は、そんなアルペジオ君の優しさに助けられた一人なんです。……ずっと信じてるって言ってくれた。アルペジオ君が信じてくれるから私もアルペジオ君を、仲間を、家族を信じられるようになったんです。」

典「……………」。

芳「だから私は、アルペジオ君の事が大好きなんです。カッコよくなくても、頭が良くななくても、私にとっては自慢の……何よりも大切な人なんです。」

典「……………」そう……ですか。」

芳「典子ちゃん……………」。

典「……………」ありがとうございます。ごめんなさい、時間を削ってしまつて。」

芳「だ、大丈夫ですよ。」

典「……………」それじゃあ。」(タッタッタツ)

芳「あつ……………」！……………」典子ちゃん。」

典「……………」もう……なんですかあは……………。あんなの……………勝てるわけないじゃないですか……………(ポロポロ)」

……………その頃……………

荷「……………」

アル「おつ、荷田く今日はやけにテンション高いなあ笑」

荷「フツフツフツ、アルペジオ君! 遂においら女子と手を繋げたくてやんす!」

アル「ダニイ!? 誰と誰と!」

荷「秘密でやんす笑」

アル「ちえーつ、教えてくれたっていいじゃん!」

(ガラガラ)

典「……。」

アル「あつ、おかえり典子ちゃん!」

典「……ただいまです、アルペジオさん。」

アル「……? どうかしたの?」

典「えっ?」

アル「泣いた痕みたいなのが……」

典「えっ、あつ、これはそのっ!」

アル「……。」(ナゲナゲ)

典「あつ……。」

アル「大丈夫? 辛いことがあったなら俺に言えよ? 心配だからね。」

典「ツ!……アルペジオさんの……ばかあああああ!!!」

アル「フアツ!? な、なんで!? なんで泣くの!」

典「うわああああん! ほんと……ばかあ……なんで……優しくするんですかあ……そんなんじゃあ私……諦められないじゃないですかあ!!」

アル「えつ、え、な、なんかごめんね? 汗」

典「うわああああん!」

あーあ、私って、ダメだなあ……。さよなら、私の初恋。

~~~~~翌日~~~~~

アル「今日でこの京都も見納めかあ。」

荷「しっかりと目に焼き付けておくとやんす!」

紫「全員押さないように新幹線に乗り込め!」

アル「なあ、荷田。」

荷「なんでやんす?」

アル「……修学旅行って、楽しいな!!」

色んな経験、新しく芽生えた恋、そしてひっそりと失われた初恋。沢山の思い出の詰まった修学旅行が終わった。この修学旅行は、きつと生涯忘れられない物になるだろう。

アル「……………あああ!!」

荷「どうしたでやんす？」

アル「色んな世界線の俺宛のお土産買うの忘れた!!!」
荷「何の話してやんす汗」

MGN | 2nd

みなさんこんにちは！皆のアイドル、なおつちですよー！フッフ、今日はですね、この親切高校の恋愛事情に密着しますよー！

奈「さあ、ショータイムです！笑」

アル「何がだ汗」

奈「うわっ！アルペジオ君！びっくりしてスタンドも月までぶっ飛ぶかと思いましたよー！」

アル「何処の仗助だ!!」

奈「あつ！アルペジオ君！アルペジオ君も私の取材手伝ってください！拒否権はないですから！」

アル「ないんかい！まあいいけどさ汗」

~~~~~

和「で、私に何を取材しに来たん？」

アル「カズの恋愛事情についてだとき。」

和「恋愛!?や、やだなー! 私は恋愛とかそーゆーのようわからんて!」

奈「荷田君……(ボソツ)」

和「くっッ! / /」

アル「あー、やっぱりお前荷田のこと好きなんだーそうなんだー(ニヤニヤ)」

奈「(ニヤニヤ)」

和「う、うう……そんなニヤニヤされても…… / /」

奈「遂にニユダつちにも春が来たんですね!」

アル「お前荷田のことなんだと思ってるんだ汗」

くくくくくくく

芳「わ、私の恋愛事情ですか!」

奈「要するにアルペジオ君との馴れ初めの話をしてください!」

アル「お前俺を恥ずか死なせる気か!」

芳「え、えーつと……は、恥ずかしくて言えませんっ! / /」

アル「ぐはあっ!! (吐血)」

奈「アルペジオ君!」

アル「知ってるか!? これ俺の彼女なんだぜ!? 羨ましいだろう!」

くくくくくくく



奈「さあ、世界線を越えてやってきました！アルペジオB君の世界線です！」

アル「お前、どうやって飛び越えた？汗」

奈「仕様です。」

アル「お、おう汗」

奈「あつ、噂をすれば！紫杏ちゃ〜ん。」

紫「お前は……奈桜か？」

奈「はい！アルペジオA君の世界線の奈桜です！」

紫「そうか、じゃあこっちのアルペジオはアルペジオAか。」

アル「そゆこと。」

奈「さあ、アルペジオB君との恋愛事情を聞かせてください！」

紫「は、はあ!?私にそんな話をさせるのか!？」

奈「ほれっ！はよ！（ノシ、わ、）ノシ バンバン」

紫「い、いやっ、私は別に、あいつと何時でもイチャイチャしたいとかそういうのじゃなくて！ただ……たまにでも一緒にいられたらなーっていうか……な、何か問題でも!？」

奈「いやー、なんも問題ないですよ〜（ニヤニヤ）」

紫「ニヤニヤするなー!!!」

くくくそしてくくく

奈「さあ、アルペジオ君！遂に来ましたよ！」

アル「い、いや、ここはやめた方が……汗」

奈「アルペジオD君の世界線でーす！」

アル「死ぬ気しかない汗」

奈「あつ！アルペジオD君！」

アルD「あれ？奈桜にアルペジオA？どしたん？」

奈「アルペジオD君！すずちんとの恋愛事情を教えてください！」

アルD「えっ？五十鈴との？」

奈「はいです！」

アルD「んー、まあ、確かに多少病んではいるけど……俺もなんだかんだで五十鈴の事好きだし、そういう性格のところももう慣れたっていうの？それに普通に接してる分には五十鈴はすっごくいい子だし……！！？」

奈「ん？どうしたんですか？」

アルD「あつ……あ……な、奈桜……う、後ろ……（震え声）」

奈「えっ？（クルッ）」

天「……………」



アル「今更過ぎんだろ!!!」

奈「いや〜でも楽しかったですね!」

アル「まあな、なんだかんだで楽しめたな笑」

奈「これからも数々のカップルを取材していきますよー!」

アル「迷惑にならないようにな汗」

いつき「……………扱いが全然ちがああくう!!泣」

Requiem is quietly played

アル「……お前が、今まで自分を偽ってきた奴だったとしても、俺はそれでも愛してる！」

紫「愛……そんな物で何でも解決しようとするなバカ者！」

アル「ッ！」

紫「……さよなら………ごめんなさい。」

アル「紫杏！」

くくくそしてくくく

和「……行ってしもたか。」

アル「………わかってる。」

和「？」

アル「紫杏は………たった一人で世界を救うために行ったんだ……。わかってるよそんな事は。」

和「アルペジオ……。」

アル「でも………きつといつか、紫杏は酷い目に合わされると思うんだ。」

和「……。」

アル「だから俺は……。」

~~~~~月日は流れて~~~~~

紫「…………。」

今日で私も公から姿を消す。結局……私は役を演じなければ生きていけないんだ。これからもずっと……。『それでも愛してる』……か、女々しいな、あの日、私は彼奴を断ち切ったつもりなのに……。

上「社長……時間です。」

紫「……そうか。」

上「お急ぎください。……何か嫌な予感がするのです。」

紫「わかつてる。」

上「……社長？」

紫「ん、なんだ？」

上「何か考え事をしているのですか……？」

紫「…………私は、」

上「？」

紫「私は……大勢の人を犠牲にして今の地位を手に入れた。あまりにも多くの犠牲を出したんだ。男も、女も、子供も……大切な人も……。」

上「社長……それでも貴方は生き残らなければなりません。早く車に！」

紫「……わかった。」

~~~~~その頃~~~~~

ル「そろそろ彼奴が出てくる時間のはず……。そこを狙って狙撃して全て終わりよ。」

~~~~~その頃~~~~~

?「……まだか、まだ出てこないのか社長は！早くしないと……。」

~~~~~そして~~~~~

上「社長早く！」

紫「ああ。(……心残りがあるとすれば……もう1度……もう1度だけ……あい

つと……)。」

ル「?」「来た！」

ル「死になさい！」

?「おい！」

上・紫「!?!」

?「伏せろ!!!」



上「ッ！」（ガバッ

（ダーン）

上「狙撃!？」

ル「外した!? どうして!？」

上「社長! 無事ですか!？」

紫「だ、大丈夫だ……それより……お前は……?」

フードを被つてゐらしく、私をかばつたそいつの顔が良く見えない。犯罪者かなにかこいつは……? でも……この声何処かで……。

? 「そんな事言つてる場合じゃない! 早く車に乗り込め!」

上「彼の言う通りです。社長早く!」

紫「あ、ああ……。 (あの声……そんなはずは……。)」

ル「ッ! まだ弾丸は1発残つてる! 今度こそ終わりよ!」

? 「これで終わりのはず……!? (まだこつちを狙つてる!? まだ弾丸があるのか……? そんなはずは……『俺がここに來たせいで歴史が変わつたのか!?!』)」

ル「今度こそ死になさい!」

? 「紫杏!!」 (ガバッ

紫「!？」

(ダーン)

ル「くっ!……。(プルルル(ガチャ)

?「どうしました?」

ル「狙撃は失敗よ。……『この世界線の未来が変えられたわ。』」

?「そうですか……仕方ありませんね。ならあの娘に頼むしかありません……。」

ル「そういう事だから、私はしばらく休ませてもらうわ。(ガチャ)

くくくそしてくくく

紫「う、うう……。」

上「社長!大丈夫ですか!」

紫「私は大丈夫だ……。あの男は?」

上「……社長をかばって狙撃されました。」

紫「ッ!その男は何処にいる!」

上「ち、治療のために車の中に運びました。ですが……。」

紫「……?」

上「弾丸には、毒を塗られていたらしく、もう……助からないかと……。」

紫「ッ!」

(車のドアを開ける)

上「し、社長！」

紫「……おい！しつかりしろ！」

？「うつ……うつ……。」

紫「待つてろ！今病院に……！」

？「いや……もう……俺はダメだ……。」

紫「そんな……。」

？「毒が……思った以上に酷くてな……ゴホッ！ゼエゼエ……。」

紫「……一ついいか？」

？「…………なんだ？」

紫「……お前の顔を見せてくれ。」

？「ッ！そ、それは……。」

紫「お願いだ……。」

？「…………わかった。」

紫「……。」（スツ

紫「……アル……ペジオ……？」

上「えっ？（じゃああの人が社長が何時ぞやに言っていた……。）」

アル「ホントは……お前に顔を見せるつもりじゃなかったんだけどな……。このざま

じやなあ笑」

紫「どうして……どうして私を庇ったりしたんだ！そもそも……何でお前は私が狙撃される事を知っていたんだ！」

アル「……俺はさ……未来から来たんだよ。」

紫「……未来？」

アル「……本当の歴史は……お前は、さっきの狙撃で死んでたんだ……。」

上・紫「！」

アル「……おばあちゃんが言っていた、ちやぶ台をひっくり返していいのは、余程飯が不味かった時だつてさ……。俺の場合……過去をひっくり返しに来ただけだけどな……。過去に戻るための装置を使って……お前を助けに来たつてわけだ……。」

紫「お前は……私の……私のためだけに、過去に来て、自分を犠牲にしたつて言うのか!？」

アル「……そうだ。」

紫「……なんでだ……何でそこまで……何でそこまで私に尽くすんだ！お前はお前のために生きれば良かったじゃないか！なんで！なんで……っ！」

アル「……俺のために生きようとした結果がこれなんだよ。」

紫「……？」

アル「俺は……お前にどうしても幸せになつてほしかった。自分を押しつぶして欲しくなかつた……。お前自身のために生きて欲しかった……。ただそれだけの事さ……ゴホッ！ゲホッ……！」

紫「アルペジオ！」

アル「……はあ……はあ……。」

紫「私は……お前も、その他の大勢も、犠牲にしてきた女だぞ……。それなのに……何故そこまでする価値があるんだ……。」

アル「……何度も……言わせんな……。」（ギョツ

紫「あつ……。」

アル「『それでも愛してる』からだ……。」

紫「……愛？」

アル「へ、へへ……見たか……お前の理論は大ハズレだ……。お前がバカにした愛つてやつが……俺にお前を守りきらせたんだからな……。ざまーみろ……。」

紫「あ……………あ……………」

アル「けど……………これで良かったんだ……………お前はこれから……………俺の事に構わず生きてきけばいい……………。それが……………俺の望みだ……………」

紫「……………だ。」

アル「……………」

紫「そんなの……………無理だ……………。私には……………お前を忘れるなんてことは出来ない……………。あの日……………私がお前から離れてから……………ずっと考えてたんだ。お前が最後に言ってくれた言葉を……………」

アル「紫杏……………」

紫「ずっと謝りたかった……………会って話をしたかった……………こんな形で……………再会したくなかった……………」

アル「……………なあ、紫杏。」

紫「……………」

アル「……………俺は……………それで満足だ……………。お前が……………ずっと俺のこと考えてくれた……………それだけで俺は満足だ……………」

紫「アルペジオ……………」

アル「……………一つ、頼みがある。」

紫「？」

アル「……お前を庇いに行く前、この時間の俺に会いに行つたんだ。それで……いつか過去に行つて紫杏を助けに行くように頼んだんだ……。じゃないと俺の努力が無駄になるからな……。それで……。お前には、この時間の俺が過去を改変するのを……止めないで欲しいんだ……。」

紫「ッ！」

アル「へ、へへ……。紫杏は優しいからなあ……。きつとこの時間軸の俺を止めに行くかと思つたからな……。釘を指しておこうつてね……。」

紫「でも……。でも……。」

アル「あんたなら……。わかつてくれるだろ……。甲斐さん……。」

上「……。わかりました。」

紫「甲斐！」

アル「サンキュー……。甲斐さん……。」

紫「そんな……。」

アル「そんな泣きそうな顔するな……。ッ！ガハッ！ゴホッ！……はあはあ……。」

紫「アルペジオ！」

アル「……は、はは……そろそろ……。ダメみたいだ……。」

紫「ま、待ってくれ！私はまだ……なにも……。」

アル「……紫杏……最後に……いい……かな……？」

紫「……？」

アル「あの時の……返事、聞かせて欲しいんだ……。」

紫「あつ……。」

アル「いいかな……？」

紫「……私も……お前のことが好きだ……。あの時、突き放してしまったけれど、それでも……私にはお前以外ありえない……。だから……！もう……遠くに行ったりしないでくれ……！」

アル「……そっか……。その答えが聞けてよかった……。それに……。」

紫「？」

アル「お前には見えなくても……俺はずっと紫杏の事を見るから……傍にいるから……。だから……安心しろ……。」

紫「アルペジオ……。」

アル「……紫……杏……。」

紫「……？アルペジオ！しつかりしろ！」

アル「……負けんじゃ……ねえ……ぞ……。」「（ガクツ





いたい……だから……今だけは、甘えさせてくれ……。何時か私が壊れてしまう……その時まで……。

## 全ては未来（さき）のために

あの日から何年か経った。私の最愛の人が、私のために命を投げ出してまで守ってくれた日から。いくら年月が経とうと、あの日受けた傷は、決して癒える事は無い。

紫「……アルペジオ……………」

（タツタツタツ

上「社長！」

紫「甲斐……？どうした？」

上「ニユース、見ましたか……………」

紫「ニユース？」

そう言われて私はテレビをつけ、ニユースを見た。

紫「……………これは……………」

それは……………NOZAKIグループが、過去に行くことが出来る、いわばタイムマシンのような物を開発することに成功したニユースだった。もちろん……………私がそれを見て思ったのは……………。

紫「アルペジオ……。」

上「はい、アルペジオさんはきつと、この機械を使って……。だとするとこの時間軸のアルペジオさんはもうすぐ……。。」

紫「ツ！」（ダツ）

上「社長！……。社長、わかってます。貴方がどうしたいのか……。でもそれは、アルペジオさんの行動を無意味にすることです。それに貴方は生き残らなければなりません。だから私は……。。」

~~~~~

紫「はあ……。はあ……。」

この時間軸のアルペジオは今、ある野球チームのコーチをしている。私は……。あの事件以降、度々その様子を見に行っていた。

紫「……アルペジオ……。何処……。？……。！アルペジオ！」

アル「ん……。？……。！紫杏！」

紫「はあ……。はあ……。」

アル「……久しぶりだね。ホントに……。。」

紫「アルペジオ……。ニユース、見たか？」

アル「……。タイムマシンのこと？」

紫「ッ！」

アル「……心配すんなって！あの時の俺に言われた通り、ちゃんとお前を守ってやるから！怖がる必要なんて……」

紫「違う……。」

アル「え？」

紫「違う！私は死ぬのが怖いんじゃない！お前が……いなくなるのが怖いんだ……。」
アル「し、紫杏？」

紫「私は……お前を突き放してしまった……でも、やっぱりお前の事を忘れられなかった！大好きだったから……忘れられるわけがなかった……。そんなお前が……いなくなるのが一番怖い……。会えなくても……世界の何処かで幸せに生きているって思えるだけでいいんだ……。でも……お前が過去に行ったら！お前は……私のために……。」

アル「紫杏……。」

紫「だから……お願いだから……行かないでくれ……。私は死んだっていいんだ……。沢山の犠牲を払ってきた私は……今更死のうががいいんだ……。アルベジオに……生きてて欲しいんだ……。」

アル「……紫杏。」

紫「？」

（ギョッ）

紫「あつ……。」

アル「……そんな事言うなよ。紫杏の幸せが、俺の幸せなんだ。だから……俺は紫杏に笑って生きてて欲しい。大丈夫だよ、俺がいなくなつて、紫杏には沢山友達がいるだろ？だから……きつと大丈夫。」

紫「あ……ああ……。」

アル「それとさ、俺の事好きって言ってくれてありがとう！すごい嬉しい！……それで十分だよ。」

紫「アルペジオ……。」

アル「……もうそろそろ行かないと。」

紫「ま、待つて！」

アル「大丈夫……必ず、守るから。」（タツタツタツ）

紫「アルペジオ……待つて……嫌……行かないで……。」

上「社長！」

紫「甲斐……アルペジオが……。」

上「社長……。」

紫「うう……………ごめん…なさい……………私……………アルペジオとの約束守れなかった……………」

上「……………社長、戻りましょう……………」

紫「……………」

……………その頃……………

アル「……………」

？「心残りはないの？」

アル「ああ、もう大丈夫。協力してくれてありがとう、維織さん。」

維「ん……………貴方は、私に翼をくれた人にそっくりだから。だから協力するの。」

アル「翼？」

維「そう……………翼。……………健闘を祈ります。」

アル「……………ああ。……………タイムスリップ、開始！」（ギョオオオオオ

……………そして……………

アル「……………着いたな。……………必ず守ってみせる。……………あの時の俺が言うには、後10分ぐらいで来そうなんだが……………」

上「社長早く！」

紫「ああ。」

アル「来た！おい！」

上・紫「!？」

アル「伏せろ!!!」

上「ッ!」（ガバッ

（ダーン

上「狙撃!？」

ル「外した!?! どうして!？」

上「社長! 無事ですか!?!」

紫「だ、大丈夫だ……それより……お前は……?？」

アル「そんな事言ってる場合じゃない! 早く車に乗り込め!」

上「彼の言う通りです。社長早く!」

紫「あ、ああ……。（あの声……そんなはずは……。）」

ル「ッ! まだ弾丸は1発残ってる! 今度こそ終わりよ!」

アル「これで終わりのはず……!?!（まだこつちを狙ってる!?! まだ弾丸があるのか……

? そんなはずは……。）」

ル「今度こそ死になさい!」

アル「紫杏!!!」（ガバッ

紫「!?!」

(ダーン)

くくくその頃くくく

紫「うう……ひつく……」。

上「……社長、アルベジオさんはとても勇敢な人でした。あなたのためだけに命を投げ捨てることを躊躇おうとしない。社長は、素敵な人に恵まれました……」。

紫「でも……もう……その大切な人も……」。

「ばーか。ここにいろだろ？」

上・紫「!？」

紫「……アル……ペジオ……？」

アル「おう、ただいま！」

紫「ツ！」(ギユツ)

アル「とおおおお!?」

紫「バカツ!!こんな……こんなに心配かけて!それでノコノコ出てきてただいまつ

て何よ!!!」

アル「ご、ごめん汗」

紫「……………どうして……………どうして生きてるの……………?」

アル「……………前の俺にさ、言われたんだよ。弾丸は1発しか飛んでこないはずだつて。あと……………『万が一のためにシールドになるものでも持つてけつて』ね。」

紫「あつ……………」

アル「そしたらなんだよ!弾丸2発目来たんだよ!?!馬鹿じゃねーのあいつ!いや俺だけどさ!!シールドがなかったら死んでたわ!!!」

紫「くッ!うわああああああああああん!!!」

アル「し、紫杏!?!」

上「ご、こんな社長初めて見ました汗」

アル「紫杏!泣かないで!ごめん!謝るから!」

紫「……………アルペジオ。」

アル「ん?」

(チュッ)

アル「!?!」

紫「おかえりつ……………」

アル「……ただいま。」

打ち上げえええええ!!! その2

アルA「はい! やってまいりました! 第2527回打ち上げを開催したいと思いまーす! 司会は私、桜空ルートのアルペジオAです!」

アルB「そんなに打ち上げやったっけ汗 紫杏ルートのアルペジオBです。」

アルC「それ以前に状況を把握しきれない、いつきちゃんルートのアルペジオCです。」

アルD「取り敢えず彼女にメールを送るのに必死な、五十鈴ルートのアルペジオDです! 汗」

アルE「ヤンデレな五十鈴に一生懸命メール送ってるアルペジオDを高みの見物している、死んだ後に桜空と結ばれたルートのアルペジオEです笑」

アルF「冥界に行ったら美少女と遭遇した、死んだ後に紫杏と結ばれたルートのアルペジオFです。」

アルA「はい! しかも今回はですね! 新メンバーが二人いるんです! 紹介します!」
アルG「はい、初めましての方初めまして。未来人であり、自分を犠牲にして紫杏を

守ったルートのアルペジオGです。」

アルH「どうも！第三者によって作り出された奈桜ルートのアルペジオHです！」

アルA「はい、というわけで新メンバーを加えた8人でやっていくんですが、ちよつと不気味だよな俺と同じ顔のやつが8人もいるとか汗 こないだなんてうP主の友達がこの小説みて、この小説の別名『アルペジオ〇ん』にしようぜって言われたらしいぞ笑」

『実話です笑』

アルB「その時はちようど6人だったしな笑」

アルA「ですよ！今回はさ、このままじゃみんな同じ顔、同じ性格に見えて仕方なくてさ、アルペジオさんどころかアルペジオくん状態の今を打開しようと思うんだよ！」

アルG「なるほどな。でも、性格は微妙にちがくねーか？」

アルA「だーかーらー！今回は、みんなで自分以外のアルペジオの特徴を書いていって、それを元にしてキャラを決めたいんだよ！」

アルC「キャラって、メタいなあ……汗」

アルA「よし！早速やっていこう！」

~~~~~

アルA 「みんなかけたー?」

一同 「書けたー!」

アルA 「よし! まず俺の特徴について発表していつて!」

アルB 「じゃあまず俺から言うよ。」

アルA 「おっ! いいぞ!」

アルB 「はい、ジャジャジャー!」

『馬鹿』

アルA 「てめえ!!」

アルB 「だつてどう見ても馬鹿だもん汗 因数分解に対して勝手に分解すんなつてい

う奴が馬鹿じゃないわけないだろ汗」

アルA 「ぐぬぬ……。じ、じゃあ次はアルペジオC!」

アルC 「はいはい。そおい!」

『ボケ役』

アルA 「否定はしない笑」

アルC 「だよー笑」

アルA 「次からは面倒臭いからもうみんな一斉に見せて!」

アルDEFGH 「はいはい。どじゃあーん!」

『憎めない』

『まとも……?』

『桜空推し』

『優男』

『体は大人、頭脳は子供』

アルA 「言いたい放題だなおい！あと優男って悪口だからな!」

アルG 「知ってるぞ？」

アルA 「ガーン！」

アルB 「じゃあ次は俺のね！みんな一斉に！」

アルA C D E F G H 「SOY (醤油)！」

『馬鹿』

『ボケ役』

『ノーテンキ』

『紫杏推し』

『ドS』

『女には優しい』

『うどん』

アルB 「馬鹿じゃねーし!」

アルA 「Spring has comeを『バネもってこい』って訳す奴が馬鹿じゃないわけないだろ笑」

アルB 「どうか馬鹿はいいとして、うどんってなんだよ!!」

アルG 「うどんが好きって意味で。」

アルB 「うどん好きだわ! 畜生め!」

アルC 「じゃあ次俺! みんなよろしく!」

アルA B D E F G H 「メメタア!」

『馬鹿』

『ツツコミ役』

『不憫』

『いつき推し』

『のんびり』

『優男』

『サンドバッグ』

アルC 「ば、馬鹿!」

アルA 「だってお前、中学の時に告白された時「俺には野球しかないから」って言っ



たじゃん。馬鹿以外の何者でもないだろ笑」

アルC 「そ、それにしたってサンドバッグって何!？」

アルG 「そりゃあ、そのままの意味ですけど?」

アルC 「怖い!」

アルD 「じゃあ次は僕の番!」

アルA B C E F G H 「デデーン!」

『馬鹿』

『ツツコミ役』

『彼女がヤンデレ』

『五十鈴推し』

『唯一の僕っ子』

『アルペジオ唯一の良心』

『小動物』

アルD 「な、なんで馬鹿なの? 汗」

アルA 「だってテストで5点取れたぐらいで大喜びしてるレベルじゃん笑」

アルD 「というか小動物ってなに? 汗」

アルG 「アルペジオDは小動物(五十鈴にとって)」

アルD 「お、おう汗」

アルE 「次は俺やで！よろしく！」

アルA B C D F G H 「オラオラア!!」

『馬鹿』

『ボケ役』

『死んでる』

『桜空推し』

『ピュア』

『泣き虫』

『ウイスパー』

アルE 「な、なんで馬鹿!?!」

アルA 「だってお前こないだハンバーグにチーズがかかっているの見て超喜んでたじゃん。」

アルE 「それって馬鹿なの!?!っていうかウイスパーじゃねーよ!!!」

アルG 「妖怪ウ○ツチじゃないぞ?」

アルE 「あつ、映画の方ね笑」

アルF 「俺だ俺だー！よろしく！」

アルA B C D E G H 「ドラララ！ドラア！」

『馬鹿』

『ポケ役』

『変態』

『紫杏または小野さん推し』

『三角関係』

『樂觀的』

『ゴース』

アルA 「最初に言っておくけど、お前が馬鹿な理由は、オムライスにケチャップで絵を書いてもらってはしゃいでたから。」

アルF 「なんでや！嬉しいやろ！ていうかゴースって！ポケモンかよ！」

アルG 「お前とゴースを一緒にするんじゃないやねえ！」

アルF 「酷くない!？」

アルG 「次は俺か……。」

アルA B C D E F H 「ポポポポーン！」

『馬鹿』

『ポケ役』

『クール』

『紫杏または山下推し』

『三角関係』

『唯一の大人』

『ドライアイス』

アルG 「俺のどこが馬鹿だし。」

アルA 「お前だつてこの前自分の投げたボールに当たつて気絶したじゃん。」

アルG 「ふーん、ドライアイスとクールつてどう違うの?」

アルH 「クールはかっこいい、ドライアイスは冷たいつてことじゃない?」

アルG 「なるほど、否定はしない。」

アルH 「ラスト!俺やで!」

アルA B C D E F G 「お、お、ん!」

『馬鹿』

『ツツコミ役』

『テンション高い』

『奈桜推し』

『アホ』

『一番10主に似てる』

『ガンダーロボ』

アルA 「こいつは救えないぐらい馬鹿！だってSt, Valentineをセツト  
ヴァアルエンチンって読むやつだぞ！笑」

アルH 「う、うるせー！てかガンダーロボって何よ！」

アルG 「だってお前特撮好きじゃん。」

アルH 「だからって……汗」

アルA 「まっ、一通り書いていったわけで、これからはこんなキャラを意識していこ  
う！で、最後に一言いいか？」

アル一同 「ん？」

アルA 「結論！みんなバカ！」

アル一同 「異議なし！」

## ジェネレーションギャップ

視聴者の方々、お初にお目にかかるでござる。アルペジオJでござる。第三者によって生み出されたアルペジオFに代わって小野映子殿のルートのを務めるアルペジオでござる。そんな拙者にはある悩みがあるのでござる……。

アルI「ヘーイ！Jクーン！ワツツロング？」

アルJ「I殿……。」

この方はアルペジオI殿でござる。拙者と同様第三者によって生み出されたアルペジオでござる。ちなみに山下貴子殿のルートのアルペジオでござる。ダイジョーブ博士ではないでござる。

アルI「そんなに暗いフェイスしていると、テンションダウンしちゃうネー！」

アルJ「……I殿、最近少し悩みがあるのでござる。」

アルI「トラブル？」

アルJ「拙者、侍ゆえ、服装などはまあ、すぐにこの時代に馴染むことは出来たでござるが、未だに『じえねれーしょんぎやつぶ』という物に悩まされるのでござる。」

アルI「ナルホドネー。わかった！俺に任せろネー！」

アルJ 「かたじけないでござる。」

~~~~~

アルA 「で、俺らを呼んだってわけか。」

アルI 「みんなでJ君に現代のジャパニーズカルチャーを叩き込むネ！」

アルB 「で、まずはどうするんだ？」

アルI 「まずはこれネ！」

『ジャパニーズカルチャーそのー』『デレ』

アルC 「ちよつと待てええええ!!!」

アルI 「ン?なんでございましょう?」

アルC 「た、確かにジャパニーズカルチャーの一つだけども!汗」

アルI 「これも立派なジャパニーズカルチャーネ!ちなみに、デレには少なくとも四

種類あるネー!」

アルJ 「よ、四種類……。」

アルI 「まずはデレデレネ！」

アルJ 「これは……どんなデレでござるか?」

アルI 「読んで字のごとく、デレデレなキャラを表すネ!例えて言うなら、C君の彼

女ネ!」

アルC 「ま、まあ、いつきちゃんはデレキャラかもしれないけど……汗」

アルJ 「な、なるほど……。」

アルI 「次はツンデレネ！ 普段はツンツンしてるけど、好きな子に対しては素直じゃないデレを見せるキャラネ！」

アルI 「た、例えば？」

アルI 「例えば……瑠璃花ちゃんネ！」

アルA 「パワポケでも数少ないツンデレキャラだな笑」

アルI 「次はヤンデレネ！ 好きな人が好きすぎて監禁しちゃったりほかのガールズと関わることを極端に嫌うキャラネ！」

アルJ 「これは見たことある気がするでござる……。」

アルI 「ご存知D君の彼女が代表例ネ！」

アルD 「そ、そうだけでも！ 汗」

アルA 「全盛期の五十鈴はヤバイ汗」

アルG 「……。」

アルA 「ん？ どうしたG。」

アルG 「いや……最近紫杏が五十鈴に似てきたような気がしてだな……。」

アルA 「フアッ!？」

アルI「紫杏ちゃんがヤンデレ!? ホワイ!」

アルG「いや……大体俺のせいなのかもしれんが、最近妙に束縛が強いというか、今日も、何時までに帰るっていう誓約書書かされたし……汗」

アルA「まあ、一度は目の前で自分の大好きな人が死んだんだからな。束縛が強くなったのはもう二度と離れないでほしいっていうことだろ?」

アルJ「うーむ……悩ましきヤンデレ……。」

アルI「最後にクーデレネ! これはクールな感じだけど好きな子に対してはデレが激しいキャラのことを言うネ! 例えるなら維織さんや真央ちゃんや真央ちゃんやそうネ!」

アルA「二人共クールな感じだけど、主にはデレデレだからなく笑」

アルI「ここまでわかった?」

アルJ「うむ、大体わかったでござる。」

アル「よし! ネクスト!」

『ジャパニーズカルチャーその2 『メイド喫茶』』

アルE「何でこんなのばっかなの!」

アルI「まあまあ、これはわかりやすくレクチャーするために、実際にメイド喫茶に行くネー!」

アルA「メイド喫茶………あつ……(察し)」

アルJ「め……いど……?」

くくくそしてくくく

アルA「やっぱりここかよ汗」

アルB「ここつて……アルペジオAが言った桜空と紫杏と唯がバイトしてる場所か
!？」

アルEFG「(ガタツ)」

アルA「お、落ち着け3人とも汗」

アルEFG「早く入ろう!(ノシ、>▽<)ノシ バンバン」

アルA「わ、わかったから汗」

くくくそしてくくく

唯「おかえりなさいませ!ご主人様!」

アルABCDEFGHI「ちーっす!」

唯「フアア!?!お、おかえりくださいませ!ご主人様!汗」

アルA「帰るか汗」

唯「うっわー!遂にアルペジオ君勢揃いで来ちゃったよ!汗」

アルJ「お、女子があのような格好をするとは……」。

唯「なるほどー、君が噂のアルペジオJ君か……」。

アルJ 「お初にお目にかかるでござる。」

アルA 「唯ー、桜空と紫杏は？」

唯 「あつ、今日二人共休みなんだよねー汗」

アルA B E F G 「ガーン!!!」

唯 「ドンマイドンマイ笑」

? 「唯ちゃん、お客さんまだー？」

唯 「あつ、ごめんなさいー！准さーん！」

アルー同 「……………えっ？」

アルA 「ゆ、唯、お前今、なんて言った？」

唯 「えっ?……………ドンマイドンマイ？」

アルA 「その後。」

唯 「んー、准さんのこと？」

アルA 「それ！准ってまさか……………」

准 「もー、お客さん待たせちゃダメでしょー？」

唯 「ごめんなさい汗」

准 「ごめんなさいね！ご主人……………さ……………ま!?!」

アルー同 「……………汗」

准「あああああああああああああああああああつ!!!」

アル一同「あああああああああああああああああああつ!!!」

准「な、ななななんでアルペジオさんたちがここに!?!」

アル一同「それはこっちのセリフだ!!!汗」

准「……………おかえりくださいませ!ご主人様!」

アルB「お前もか!!こんちきしようが!!!」

くくくそしてくくく

准「全員水でよろしいですね!」

アル一同「いじめか!!汗」

アルJ「じ、准殿は、メイドをやっていたのでござるか……………汗」

准「そういうえばJさんに会ったときは私服だったからね笑」

アルI「あー、J君!勘違いしちゃノードだから一応言っておくけど、准ちゃんはいメイドとしては悪いフォーエグザンプル」(ズガーン)

准「何か言った?」

アルI「じ、ジーザス……………」

アルJ「准殿は相変わらず容赦ないでござる汗」

准「私と言ったらメイドなの!わかった!?!」

アルJ 「アツハイ。」

准 「で、ごちゅーもんは？」

アルI 「J君！ここはオムライスを頼むネー！」

アルJ 「わ、わかったでござる。お、おむらいすを所望するでござる。」

准 「はいはい！」

~~~~~そして~~~~~

准 「はい！どぞ！」

アルJ 「ふおおお……！」

アルA 「目が、侍の目がキラキラしてるぞwww」

准 「じゃあほら、あーん。」

アルJ 「!?」

准 「あーんっ！」

アルJ 「せ、拙者には……小野殿という……心に決めた人が……／＼／＼

アルI 「アチャ、確かに……。……そうだ！（プルルル）」

アルA 「？」

アルI 「あつ、オノサン？アルベジオーデース！ちよつといいですかー？（ゴニョゴ

ニョ）サンキューー！ではまた今度！（ピッ）」

アルA 「何話してたんだ？」

アルI 「J君！あーんしてもらってオーケーネ！」

アルJ 「な、何故でござる？」

アルI 「オノサンに了承してもらったネ！」

アルJ 「小野殿が？……ま、まあ、それなら。」

准 「はい！じゃああーん！」

アルJ 「あ、あーっ／／」（パクッ

准 「どう？」

アルJ 「き、気分が高揚するでござる……／／／」

アルA 「ピユアか！www」

くくくそしてくくく

アルI 「いやー！ベリーエキサイティングでしたネー！」

アルA 「せやな！」

アルB 「どうだった？J？」

アルJ 「うむ、楽しかったでござる。少し、じえねれーしよんぎやつぶを克服できた

気がするでござる。」

アルA 「じゃあ次はあれだな、口調を変えるか！」

アルJ「それは勘弁してくれでござる汗」  
ちよつと現代になじむ事が出来た、おさむらいさんなのでした

## キャプテンとロボット

C P アル「……。」

俺の名はキャプテンアルベジオ。この宇宙を支配し、あらゆる利権を操る宇宙連邦に反旗を翻す……俗に言う反逆者だ。そんな俺には今……一つ悩みがある。

C P アル「……………ブラック。」

ブ「なに……………？キャプテン。」

C P アル「ちよつと……………離れてくれないかな汗」

ブ「どうして……………？」

C P アル「い、いやちよつと動きにくいなあつていうか、わかつた俺の負けだからそんな泣きそうな顔しないでくれ汗」

こいつはブラック。見た目は可愛らしい女の子だが、実はロボット。けど子供を残すことも出来るらしい。そんなブラックに懐かれて懐かれてちよつと大変なのだ。

ブ「んっ……………。(ギョツ)」

C P アル「……………汗」

シ「あらあら、今日も懐かれてんの？」



C Pアル「シルバー……。」

こいつはシルバー。人の形をしているが実は寄生生物。白瀬さん……？知らない子  
ですね……。

C Pアル「何とかしてくれよう、お前の相棒だろ？汗」

シ「相棒だからこそ、相棒の幸せを邪魔するわけないじゃない。」

C Pアル「うう、おっしやる通りです汗」

ブ「キャプテン……。 (スリスリ)」

C Pアル「ま、まあ真……。じやない、ブラックは可愛いけどさあ……。汗」

シ「お幸せにね〜笑」(スタスタ)

C Pアル「ちよつ、ちよつと！」

ブ「……キャプテン。」

C Pアル「な、なあに？」

ブ「んっ……。」

C Pアル「ちよつ!?ぶ、ブラック!？」

ブ「キス……。して……。？」

C Pアル「ま、待っ！(顔近い近い近い!!)」

ブ「んー……。」

オ「キャプテン！大変でやんす！敵襲でやんす!!」

C Pアル「ダニイ!」(タツタツタツ

ブ「あつ……。……。……。」。」

くくくそしてくくく

C Pアル「くそっ！連邦の追手か!!」

オ「す、直ぐに攻撃準備でやんす!!汗」

C Pアル「落ち着け！取り敢えずシルバーとブラックを……。」。」

シ「ねえ、キャプテン。」

C Pアル「ん?」

シ「ブラックなら……。もう行っちゃったわよ?」

C Pアル「は?」

シ「だから……。ブラックなら、敵陣に乗り込みに行つたわよ?」

C Pアル「ファツ!」

くくくその頃くくく

敵A「撃てえ！反逆者を殲滅せよ!」

敵B「た、隊長！変です!」

敵A「ん?何がだ?」

敵B 「こちらに何か向かってきます!」

敵A 「なんだ?! 戦闘機か!」

敵B 「いえ……それにしても小さすぎます!」

敵A 「ではなんだ……? ……?! あれは……ロボット!」

敵C 「ロボットが自分に装備されてるジェットで飛んできたのか!」

ブ 「……許さない。(ドドドドド)

敵B 「す、すごい速さでこちらに向かってきます!」

敵A 「ええい! 撃ち落とせ!!」(ドーン)(ドーン)

敵B 「あ、当たらない!? 何故だ!」

ブ 「許さない……キャプテンとの時間を邪魔した……許さない……あと少し

で、キスも出来たのに……。」

くくくその頃くくく

オ 「て、敵艦隊が襲撃を受けてるでやんす!」

C Pアル 「ブラック……汗」

シ 「恋はロボットですら狂わせるのね……汗」

オ 「狂うというより、強化してるでやんす汗」

結果から言えば、敵艦隊はブラックの襲撃により、大ダメージを受けてあえなく撤退

していった。この事件以降、『とある反逆者の宇宙船を襲うと死神が現れる』という噂が流れた。

C P アル「やれやれ……偶然にもブラックのおかげでしばらくは連邦軍に追われなくて済むとは笑」

オ「ロボ男に感謝でやんす！」

C P アル「ま、そうだな笑」

ブ「キャプテン……。 (ギョツ)」

C P アル「おっ、どうした？」

ブ「……前の続き。」

C P アル「えっ、ちよっ!？」

ブ「んー……。 (チユツ)」

C P アル「くッ!!!」

オ「ななな! リア充爆ぜるでやんす!!!」

シ「あらあら笑」

## 親切高校の主張！

アルA「はいはい！全世界のみんな、やってまいりましたよ！親切高校の主張の間です！この企画は、かの有名な○6のパロディであり、親切高校の生徒が、全校生徒の前で自分の思いをぶちまける企画です！では、いつてみよう！まずは、ペンネーム『黄色の悪魔』さんの主張です！」

桜「どうも、黄色の悪魔こと、桜井いつきです！……ちよつといいでしょうかー!!」  
一同「いいよー！」

桜「私には！付き合ってる人がいまーす!!」

一同「だーれー!?!」

桜「それは！先輩のアルベジオCさんでーす！」

アルB「ヒューヒュー！」

アルC「こ、こらっ！／／／」

桜「すつごく優しくて！いい人なんですけど！最近、ちよつと構ってくれる時間が少ないんでーす！」

アルB「あつ、ひどーい!笑」

アルC「う、うう……。」

桜「だから!今度私とデートしてください!!」

アルC「いいよー!」

アルAB「ヒューヒュー!」

一同「ニヤニヤ」

アルC「くつ、恥ずつ!／＼／＼」

アルA「いやー、いつきの主張というよりはほぼアルペジオCの主張だったな笑  
えー、次は!ペンネーム『しあーん』さんの主張です!」

紫「……どうも、紫杏です。……一言いいですか?」

一同「いいよー!」

紫「……最近、私の扱いが酷い気がします!めっちゃキャラ崩壊させられたり!魔法少女のコスプレさせられたり!私はこういうキャラじゃないってわかってるはずだ!私  
!!!私の扱いを改善してくれえええ!!!泣」

アルA「アハハハハ!!さ、早速キャラ崩壊してるしwww」

アルB「可愛いよー!紫杏!」

紫「うるさいっ!／＼／＼」

アルA「紫杏のキャラ崩壊が起きたところで、次の主張です！ペンネーム『セットヴァルエンチン』さんの主張です！」

奈「……私には！最近凄く傷ついたことがありました！」

一同「なーにー!?」

奈「この前！公園で、絵を書いている男の子に会って、試しに私を描いて欲しいって言うたらー！」

一同「なーにー!?」

奈「まな板の絵を描かれました!!!」

アルA「ぶっ！アハハハハハハ！」

奈「私はまな板じゃありませんえええん!!!包丁と仲良くはなれませええん!!!保険の先生!!私の胸を大きくしてくださいださあああああ!!!泣」

アルA「は、迫真的すぎるwww」

アルH「夢いwww」

アルA「いやー、女子の闇ですなwww 次は、ペンネーム『♂』さんの主張です！……嫌な予感しかしない汗 ていうかこれ、生徒の主張だよね!!」

鬼「……。俺には！最近悩みがある！」

一同「なーにー!?」

鬼「最近、深刻な男子諸君の筋肉不足が激しい!♂」

男子「ゾクッ」

鬼「俺に諸君の筋肉をよこせえええええ!♂」

アルA「教師としてその発言はどうなんだ!?!汗」

アルB「嫌な予感しかしない汗」

アルA「ま、まあ、よくわからない主張をされたところで、次行こう!ペンネーム『カズーイ』さんの主張です!」

和「……(大丈夫……はつきり言うんや!)私には!……す……好きな人がいまーす!!!」

アルA「フアツ!?!」

アルB「マジかよ……。」

一同「だーれー!?!」

和「それはあ!……野球部の!荷田君やー!!!／／／」

アルA B C D H「だ、ダニイ!?!」

荷「……!?!」

和「こ、こんなあたしでよかつたらー!付き合ってくれやー!!!」

アルA「お、おい荷田!どうすんだよ!?!」



荷「えっ!? ……いい、いいでやんすよ?」

和「えっ!? ホンマ!」

荷「嘘を言うわけないでやんしょ汗」

アルA「な、なんてこつたい笑」

奈「これは大スクープですよ! 明日の新聞の一面トップに……。」

和「や、やめーや! 汗」

アルA「ま、まあとにかく! 第1回親切高校の主張はこれにて終了です! 次回も見てくださいね〜!」

## ハーレム少年の苦悩

アルC「はあ、暇だなあ。」

みなさんこんにちには、いつきちゃんルートのアルペジオこと、アルペジオCです。今日は、みなさんに俺のちよつと変わった友達を紹介したいと思う。

?「うわつととと！アルペジオさん！ちよつと助けて！」

アルC「……今度はどうした？ミリ旗さん。」

この人がその変わった友人。ミリ旗さん。この親切高校の俺の同級生。そんな彼、実は……。

紫「やつと見つけたぞ！」

和「もー！どこ行ってたんや！」

白「さあ、はつきりしてもらおうよ！」

ミ「ヒイイ！」

紫・和・白「誰が一番好きなの!？」

この学園屈指のハーレム状態の男子なのだ汗

くくくそしてくく

アルC「で、つまりこういうことか？紫杏か和那か白瀬さんの、誰が一番好きなのか決めて欲しいと。」

3人「(コクリ)」

アルC「で、ミリ旗さんは誰が好きなわけ？」

ミ「おい見ろ！虹がかかっているぞ！」

アルC「話を逸らすなあ!!!汗」

ミ「え、えーつと汗」

紫「私を選んだらお前の身の回りのことはちやんと世話してやるぞ。」

和「あ、私だって！ミリ旗君のためならなんでもできるで！」

白「もし私を選ばなかったら、今すぐ殺すから。」

アルC・ミ「ヒイイ!!」

紫「こ、こんな人を脅迫する女には任せられない！やっぱり私が！（ギユツ）」

和「あああ！ずるい！私や！（ギユツ）」

白「私よね？ミリ旗。（ギユツ）」

ミ「く、ぐるじいでず……！」

アルC「やめて！ミリ旗さんが死んじゃう！汗」

くくくそしてくくく

ミ「くつ、首の骨が折れた汗」

アルC「軟体動物に骨折は無いZOY!!」

紫「で、結局誰が一番好きなんだ？」

ミ「うつ……。」

アルC「じゃあ1人ずつミリ旗さんと面接すればいいんじゃないかな。」

ミ「面接？」

アルC「そうそう、そうすればミリ旗さんも決めやすいだろ？」

ミ「お前天才か……？」

アルC「いや普通に思いつくだろ汗 じゃあまずは紫杏からな。」

紫「わかった。」

くくくそしてくくく

アルC「じゃあほら、紫杏、ミリ旗さんの好きなどころ言つて。」

紫「ミリ旗は……私の内面を見てくれた。こいつのおかげで私は役者を演じることをやめられたんだ。だからどうしようもないぐらい好きなんだ。あつ！勿論ミリ旗の面白いとこやカツコイイとこも好きだぞ！」

ミ「……なにこれ僕を恥ずか死なせたいの？照」

アルC「ま、まあまあ汗　じゃあ次は和那！」

和「ほいきた！」

くくくそしてくくく

和「私なあ、ミリ旗の全部好きやねん。カツコイイとこも身長がちつちやくて可愛いところも。」

ミ「ち、チビって言うな！」

和「褒めてるんよ？」

ミ「うっ……っ、続けて。汗」

和「でな、あの日私のこと必死に引き止めてくれたの、すっごい嬉しかったんや！私のために……泣いてくれて嬉しいかったんや／／／」

アルC・ミ「(何この可愛い生き物！)」

くくくそしてくくく

アルC「じゃあ最後は白瀬さんな。」

白「………正直言うとな、私ミリ旗のことそんなカツコイイとか思ってたことないわ。」

ミ「ガーン!!」

白「そんなんじゃないよ……一緒にいて、すっごく安心するのよ。こいつなら私の

命預けてもいいかなって。そんな事思えるのあんたが初めてでさ。」

アルC「(おお……さすが白瀬さん……。)」

白「というわけで、あんたに私の命預けてるから必然的に正妻は私ってことで！」

アルC・ミ「フアツ!？」

紫「なっ!そんなことは許さんぞ！」

和「そうやそうや!それなら私だってミリ旗君に命預けてるんやで！」

白「預けるのは一人で十分よ！」

紫「ならお前は辞退しろ!私が預けるっ！」

和「ああ!私が預けるんや！」

3人「ぐぬぬぬ……。」

アルC「可愛い修羅場だな笑」

ミ「やっぱ、三人とも好きじゃ駄目？」

アルC「ダメに決まってるだろ汗」

ミ「畜生！」

親切高校は今日も平和です笑

## 天国か地獄

アルA「ハッピーバースデートウーユー♪ハッピーバースデートウーユー♪ハッピーバースデートウーユー♪ハッピーバースデートウーユー♪ハッピーバースデートウーユー♪ハッピーバースデートウーユー♪フウーー!!!」

聖「へへへ、ありがとね。」

アルA「姉御の誕生日だから祝って当然だよ！」

聖「それにしても、私が小説に出る日が」

アルB「わあああああ!!メタイ!メタイ!」

アルC「誕生日だからって何しても言い訳じゃないから汗」

聖「ちえー。」

唯「おめでどう!聖杯ちゃん!(ギューツ)」

聖「うわっ!あつ、唯ちゃん!」

唯「えへへー!今日はおめでたい日だからもつと私に甘えていいよー!○<△」

天「待ってください。聖杯さんは私とイチャラブするんですよ。(ギューツ)」

唯「えー!そんなの天本ちゃんが決めたことじゃない!」

天「だからって、唯さんだけが聖杯さんとイチャラブしていいわけがありません!」

聖「ちよ、ちよつと……汗」

2人「どっちを選ぶの（選ぶんですか）!？」

聖「え、えーつと……ふ、二人ともお持ち帰り！」

2人「こうなったら裁判で決めよう！」

聖「あはははあ！どうなつちまつたんだあああああああああ  
あ!!!」

くくくそしてくくく

アルA「はい、ではこれから、第2896回聖杯さん所有権裁判を開廷します。」

聖「どうしてこうなった。」

アルA「ではまず、唯さんの主張です。唯さんどうぞ。」

唯「はい！まず最初に！最近聖杯ちゃん私の絵、あんまり描いてくれてないよね？だから私が少しぐらい独占してもいいと思うの！〇くくく」

アルJ「確かに最近是一本殿や紫杏殿の絵が多いでござるな。」

アルA「なるほど……じゃあ次は天本さんの主張です。」

天「唯さんはあ言いますが、常に愛情を注いでもらってるのだから多少出番が少ないのは妥協すべきです。だからこそ今回も私が聖杯さんを独占してもなんの問題もありません。」



唯「い、いやいやいや!?!それとは全く別だからね!というか、常に愛されてるならやっぱり私が聖杯ちゃんといチャラブしても問題ないじゃん!」

聖「あ、アルペジオさん、どうすればこの不毛な争いを止められると思う?汗」

アルA「無理だ。おばあちゃんが言っていた。この世でどうしようもないことは二つある。一つは女同士の修羅場、もう一つはメシマズの嫁だつてな汗」

聖「唐突のおばあちゃん語録やめようよ汗」

アルA「カブトリスペクトですから笑」

聖「じゃあアルペジオBさんでもいいから二人を止めて!汗」

アルB「無理。じいやが言っていた。誰かを取り合う時の女を止められる者は誰一人としていないつてな。」

聖「Bさんはぼっちゃまか!!汗」

唯・天「ぐぬぬぬぬ……。」

アルA「じやあもう一層の事2人で愛でちやええば?」

聖「えっ!?!」

アルA「それがいい、それなら二人とも聖杯さんとイチャラブできるじゃん。薄い本が厚くなるじゃん。結果オーライじゃん笑」

アルB「じゃんじゃんうるせえよ!カンクロウかお前は!!」

アルA 「うるさいのはお前だ！汗」

唯・天 「A君……………それ採用（☆▽☆）」

聖 「えっ。」

（ガシッ

唯 「そういうことなら。」

（ガシッ

天 「善は急げですね。」

（ズルズル

聖 「ちよちよっ！引きずらないで！擦れちやう！制服が擦れちやう！いやあああああ  
あ！」

アルA 「聖杯さーん！」

聖 「ん？」

アルA 「ハッピーバースデー！」

聖 「この状況じゃ喜べないよ!!!汗」

## Hello New World!

アルA「……………」

皆さんこんにちは。アルペジオAだつて自己紹介していたいところだが、ちよつとそういうわけにもいかない。何故なら今俺は……殺されそうだからだ汗

アルA「くっそ、あの野郎……いきなり襲撃してきやがつて！しかも学校でだぞ!?しかもなんでこの世界線にいるんだよあいつが!？」

(ダーン)

アルA「ツ！あぶねえ……汗」

?「チツ……外れた……」

アルA「おい！なんで俺を狙つてるのか知らないけどな、俺はお前のことよーつく知ってるんだ！大人しく暗殺をやめて正々堂々戦つたらどうだ!？」

?「……………それもそうね。」(スツ)

アルA「やつと出てきたか。なんでお前がこの世界線にいるのか聞きたいところだが、それよりも先に聞きたい、なんで俺を殺そうとするんだ?」

? 「……命令を受けたからよ。上の奴からね。」

アルA 「上の奴……………CCRか!？」

? 「はっ?なにそれ?」

アルA 「とぼけたって無駄だ。お前はサイボーグだろう。言ったはずだ、俺はお前のことをよーつく知ってるってな。」

? 「だから、CCRって何よ?私はそのまもの聞いたこともないわよ……………」

アルA 「……………はっ?じゃあ……………じゃあ聞くけどな、お前の名前、『白瀬芙喜子』じゃねーのか!？」

白 「……………驚いた、あんた超能力者?……………いや、超能力者か。」

アルA 「やつぱり、間違いなくこいつは白瀬だ……………。けど、こいつ本当にCCRのこと知らなそうだし……………。……………!そうか、こいつが違う世界線の白瀬だっていうなら話は合う。違う世界線の白瀬だから生い立ちも違うって事になるな。けど……………じゃあこいつはどうやってここに来たんだ……………?こいつに世界線を超える能力はなかったはず……………」

白 「どうやらあんたが私のことを知ってることは嘘じゃないようね。なら……………私もあんたに一つ教えてあげる。」

アルA 「……………」

白「私があんたを殺そうとしてるのは……………未来のためよ、『歴史の破壊者さん』」  
アルA「未来のため……………？歴史の破壊者……………？」

白「……………私はね、あんたを殺すために作られたサイボーグ。誰に作られたかは……………言えないけどね。そもそもね、貴方は本来の歴史にはいないはずの存在なの。」

アルA「な……………？」

白「……………私のいた世界線ではね、『カタストロフ』つてのが起きたらしいの。私を作った奴は具現化がなんとかって言ってたけど……………私もよくは知らないわ。」

アルA「具現化？」

白「カタストロフはね。ある1人の男によって起こされたものらしいの。けど、その計画は結局失敗したらしいのよ。……………けどね、カタストロフ……………いいや、具現化は存在が消える前に、ある物を生み出したの。それが……………貴方、『アルペジオ』なの。」

アルA「ツ!？」

白「具現化はね、簡単に言うとな人の願いや思いを事態として表すものなの。もともとその具現化を引き起こした男の願いは、簡単に言うと世界の改変みたいな感じ。そして具現化はその男の望みを叶えるために、最後の最後に、世界を改変できる能力を持った、『アルペジオ』という存在を、ありとあらゆる世界線の過去にばらまいたの。その結果が今ってこと。あんただって知ってるでしょ？『本来死ぬはずだった神条紫杏がアルペジ

オによって救われた世界線があるって事を』。」

アル「ッ！」

白「それだけじゃない、『大江和那がアルペジオによって引き止められた世界線』や『芳槻さらをアルペジオが自分の身を体して守った世界線』もあるのを、貴方は知ってるはずよ。」

アルA「……………」

白「その結果……………未来に何が起こったと思う？」

アルA「まさか……………」

白「そう……………未来に矛盾、パラドックスが起こった。その結果、未来の建造物、人物、歴史が破壊と再生を繰り返して、滅茶苦茶になったのよ。」

アルA「そんな……………」

白「つまり……………私がここに来たのは、貴方を殺して未来を元ある形にするためよ。勿論、貴方を殺した後は他の世界線の貴方も殺しに行くわ。」

アルA「……………」

白「さあ、覚悟は出来たかしら？（銃を構える）」

アルA「……………俺の、俺達の……………やってきた事は……………間違ってたのか……………？」

白「……………さよなら……………『K』。」

アルA「ッ！」

？「待ってください！」

白「……………」

アルA「桜空……………」

芳「……………」

白「あら、この世界線のアルペジオの彼女ちゃんかしら？……………聞いてたでしょ、今の話。」

芳「……………聞いてました。」

アルA「……………」

白「なら、どうするべきかわかるわよね？貴方も可哀想ね、偽物の恋を今までしてきたんだから。でもそれももう終わ……………」

芳「偽物じゃありません!!!」

白「……………」

芳「……………確かに、本当なら私はアルペジオ君には……………会えないのが本当の歴史なのかもしれない……………。でも、私はその方が幸せだなんて絶対思いません！だって……………この想いは、紛れもないアルペジオ君が私にくれたものだから……………アルペジオ君だから今の気持ちでいられるんです。恋してよかったって、アルペジオ君のことを好きになって

よかったって！私には……これ以上の幸せは考えられません……偽物なんかじゃないんです……この想いは……。」

白「……………んですよ。」

芳「えっ？」

白「なんでよ！おかしいでしょ!? あんたはずっと、いるはずのない人に恋をしてたのよ!? そんなのおかしいに決まってるじゃない！偽物に決まってるじゃない!!!」

芳「白瀬さん……………。さつき、言っていましたよね？」

白「えっ？」

芳「…………私には、ちゃんと聞こえてました。白瀬さんが…………アルペジオ君を殺そうとする前に…………白瀬さんが、別の名前を…………『K』って人を呼んだこと…………。」

白「あつ…………。」

芳「…………私の予想が正しかったら、それは…………その人は…………。」

白「ツ!!」(タツタツタツ)

芳「あつ…………!」

アルA「白瀬…………。」

芳「…………白瀬さん…………貴女は…………。」

アルA「…………桜空。」



芳「あつ、大丈夫ですかアルペジオ君！怪我してませんか……？」

アルA「俺は大丈夫。……………」

芳「……………アルペジオ君。」

アルA「ん？」（ギョツ）

アルA「ちよつ、えつ？」

芳「……………さつきの言葉、嘘じゃないですよ。私は、アルペジオ君は間違つてないと思います。アルペジオ君は……………きつと私達を幸せにするために来たんだと思います。B君やF君やGさんは紫杏さんを、C君はいつきちゃんを、D君は五十鈴さんをつて、みんな、私達を幸せにするために来てくれたんだと思います。だから……………私たちは幸せになれたんです。みんな、アルペジオ君たちのおかげなんです。だって……………もしアルペジオ君がいなかったら……………私はあの時……………。紫杏さんだって、きつとあのまま遠い場所に行つてたし、殺されてたかも知れません……………」

アルA「あつ……………」

芳「……………アルペジオ君がいなくてよかつたつて思つた日なんてありません。絶対ありません。だって……………アルペジオ君たちは、私達の大切な人だから。」

アルA「桜空……………」

？「その通りだ。」

アルA「……紫杏。」

紫「私がここにいるのはお前のおかげなんだ、アルペジオ。」

？「そういうこつちや！君はいい奴やで！」

アルA「和那……。」

和「……アルペジオ君がいなかったら、うち今頃、荷田君とも付き合えなかったし、紫杏もここにおらへんかったやろう……。アンタには感謝してもしきれないんよ！」

？「そうでやんすよ！」

？「アルペジオ君は、私達の家族同然の人です！」

アルA「荷田……奈桜……。」

荷「アルペジオ君がいたから、オイラ彼女が出来たでやんす！野球ももつと好きになれたでやんす！感謝感謝でやんす！」

奈「そうです！アルペジオ君がいたから私も学校を楽しめたんですよ！……それに。」

アルA「……？」

奈「……アルペジオ君がいなかったら……私、桜空と仲直り出来なかったかもしれません……。」

芳「お姉ちゃん……。」

奈「全部……全部アルペジオ君のおかげなのに……いかなかったらよかったなんて……思うわけないじゃないですかあ……泣」

アルA「……また、」

芳「？」

アルA「また、みんなに救われたな。俺は。」

芳「アルペジオ君……。」

アルA「……みんな、」

一同「？」

アルA「……ありがとう……泣」

一同「……こちらこそ、ありがとう！」

白「……K、私……間違ってたのかな……。アンタを殺した時は……しようがないって言い聞かせてたけど……間違ってたのかな……。アンタとの思い出は……偽物じゃなかったのかな……。教えてよ……。K……。」

もしかしたら、やっぱり俺は間違いをしていたのかもしれない。結局、俺がしていることはこの先の未来を捏造していることなのだから。……………だけど、それでも俺は今日を生きていく。この仲間とともに、新たな未来を掴み続けながら。

## 『偽物』の愛

白「……………K。」

アルK「……………」

白「……………」

アルK「芙喜子…どうして……………」

白「……………未来のためよ。」

アルK「……………そっか……………よくわからないけど、ごめんな……………俺が悪いんだよな……………」

白「ッ！なんで謝るのよ!!あなたは……………別に騙してたわけじゃない……………。それに……………謝られたら……………私貴方のこと……………」

どうしてこんなことになってしまったのだろう……………。私達……………いや、私は……………何処で間違えたのだろう……………。

くくく回想くくく

これは、三カ月前の事。私は自分の使命を果すため、Kを殺すためにこの世界線に来

た。

白「……………ここが親切高校…ね。この世界のアルペジオを探さないて」

アルK「ああああああああ!! (ズドーン)」

白「!?」

アルK「あいつてててて……………汗」

白「ちよつ、あんた大丈夫!」

アルK「だ、大丈夫大丈夫。」

白「つたく、何もないとところからいきなり転げ落ちてくるって、あんたバカでしょ汗」

アルK「う、うるさい……………それより、君は?」

白「私? 私はそこら辺にいるごく普通の女よ。貴方は?」

アルK「俺? 俺はアルペジオ! この親切高校の生徒や!」

白「ツ!! (こいつが……………アルペジオ……………!?! 歴史の破壊者って言うんだからてつきり凶悪なヤツかと思つたじゃない! ただの頓珍漢じゃないの! 汗)」

アルK「で、あんた名前は?」

白「私?……………白瀬、白瀬芙喜子よ。」

アルK「そつか、よろしくな白瀬!」

白「(ま、あんたは私に殺されるんだけどね。ただ、今日はまだ情報が少ないからやめ

といてあげるわ。……そろそろ帰らないと。」

アルK 「そうなのか？ また今度な！ 白瀬！」

白 「またって……汗（まあ、また会うのだけどね。）」

〃〃〃後日〃〃〃

白 「(さて……アルペジオの奴はつと……。）」

アルK 「……………」

白 「(いた……悪く思わないでね。これも未来のためなんだから。）」

アルK 「おっ！ そろそろ時間だな！（タッタッタツ）」

白 「ちよちよっ！ どこ行くのよ！ 汗 ……つたく、暗殺つてどうも苦手なのよね……。

(タッタッタツ)

〃〃〃そして〃〃〃

白 「ここは……屋上？」

アルK 「……おっ、いたいた！ おーい、桜空ー！」

芳 「あつ、アルペジオ君！」

アルK 「いやいや、遅れてごめんね。」

芳 「大丈夫ですよ、私も今来たところですから。」

白 「……ふーん。あいつの友達かしら？（可哀想ねあの子、真実を何も知らないんだ

からね……。）」

アルK 「それにしても、今日は何の用なんだ？」

芳 「いえ……この前の事、謝ろうかと思つて……。」

アルK 「この前？……あの事はもう気にしてないよ。俺は桜空を助けるためにやったんだから。」

芳 「……私嬉しかったんです。初めて誰かを信じる事が出来て……すごく嬉しかったんです。」

アルK 「桜空……。」

白 「……今日はやめとくか……あの子に流れ弾が当たつたら大変だしね。」

私は、あの日のあいつとあの子の会話を聞いてて、アルペジオが本当に悪なのか疑惑を持った。少しだけだったけどね……。けど……それからあいつを観察しているうちに、私の疑いはさらに大きくなって……そして私は……。

くくく後日くくく

アルK 「ここ……だよな？急に呼び出しなんて……。」

白 「ここよー、アルペジオ。」

アルK 「白瀬！なんだよ話つて。」

白 「ちよつとね……聞きたいことがあるのよ。」



アルK 「聞きたいこと？」

白 「……ねえアルペジオ、もしも、貴方が未来を変えられるとしたら……どうする？」

アルK 「えっ？ どうした急に？」

白 「いいから！」

アルK 「うーん……………特にないかなあ。」

白 「はあ!? 何言ってるのアンタ！」

アルK 「えっ、なんでそんな怒るの!？」

白 「もつとしたい事とかないの!?! 好きな人と付き合いたいかさあー！」

アルK 「……………別にそうは思わないよ。……………俺はさ、ただみんなと笑っていたいんだ。

毎日くだらねえことだべったりしてさ。それが俺の望みなんだ。」

白 「アルペジオ……………」

アルK 「あつ、そういうことならさ、俺はみんなと笑える未来を作りたい！ 未来を変

えられるなら俺はそうしたいな。みんなってのは、勿論白瀬もだからな！」

白 「……………! 私も……………」

アルK 「うん！ 白瀬も俺の大事な人だぞ！」

白 「……………」

アルK 「……………白瀬？」

白「……K。」

アルK「えっ?」

白「いいでしょ……下の名前でも。あんたも……私の事、芙喜子でいいから。」

アルK「……おう! わかったよ芙喜子!」

白「ッ! (タツタツタツ)」

アルK「ちよっ! 芙喜子!?!……変なやつ。」

白「……(ドキドキ)」

私は、とんでもないことをしてしまった。暗殺するターゲットに恋をするなんて……。けど……これは『偽物』。アルペジオは本当はいない存在。だから私は……例えアルペジオでも……。

くくく回想終わりくくく

アルK「あの時の……未来の話、これの事だったんだな。まさか……俺が歴史の破壊者だなんて……そんな存在だったなんて……。」

白「……。」

アルK「……芙喜子、頼みがある。いいかな?」

白「……何?」

アルK「……お前は……優しいからな。きつと俺を殺したら、罪悪感を感じちまうだ

ろ。……………だから、俺からお願いするよ。……………俺を殺せ、芙喜子。」

白「ッ!？」

アルK「それでみんなが笑って暮らせる未来が保証されるなら……………俺は本望だ!だから……………芙喜子も俺の事……………気にせず未来を生きて欲しい。」

白「K……………」

アルK「……………さあ、やってくれ。」

白「……………私は……………。(銃を構える)」

アルK「……………」

白「……………っ。」

そう……………私はケリをつけないといけない。未来を救うために……………Kの望む未来を作るために……………だけど……………。

白「うっ……………うう……………」

アルK「芙喜子……………?なんでお前、泣いてるんだ?」

白「えっ……………?あ、あれ……………?私、涙なんて出るはずなのに……………おかしいな……………壊れちゃったのかな私……………」

アルK「芙喜子……………」

白「駄目……………私は……………未来を救わなきゃ……………」

アルK「……!」

白「……K……さよなら。」

アルK「……ああ。」

白「っ!……うわああああああああああああああああああああああ!!」

その時、一発の銃声が鳴り響いた。

くくく前の話の続きくくく

白「……。」

あーあ、私さまさか後悔するなんてね……。Kを殺すのに、迷いは断ち切ったはずなのに……。あいつの医師を引き継いで頑張るつもりだったのに……。Kとの恋は……。『偽物』だっと思ってたのに……。まったくやつてくれたわよね、あの桜空って娘。『偽物だろうと関係ない』……。なんて、笑っちゃうよね。……。でも、その言葉をどれだけ待ち望んでいたろうか……。いや寧ろ、私は何故その言葉をKに言っただけなのか……。今になってやっと気づいた、例えばアルペジオという存在が本当はいなかった物だとしても、私のKに対する思いは紛れもなく本物だったのに……。私は『未来を救う使

命』に逃げて、それを受け入れようとしなかった。

白「そう……これは神様が私に与えた罰なんだ……。」

……ああ、私はなんて愚かなんだろう。自分で選んだ道なのに、まだ私は我侷を言ううとしてる。最低……最低の女、そして……誰よりも弱い女なんだ私は……。自分で選んで、自分でケリをつけたのに……まだ私は……。あいつを忘れられないんだ……。

白「K……会いたいよ……私。今すぐ……また貴方と2人で話したい……。あんたは、誰かと笑っていたって言ったけど……私にはあんたしかいないんだ……。今更すぎるかもしれない……もうどうしようもないことはわかってる……。でも、会いたいよ……K……。」

後日、親切高校の近くの森で、1人の壊れたサイボーグの少女が見つかったという。その少女はどうやら『自殺』したらしく、彼女の目からは、サイボーグからは出るはず

のない、  
涙が流れていた。

## 教えて！アルペジオさん！

世界戦というものを知っているだろうか？それは様々なルートによって別れた世界のことを言う。例えばスペースキャプテンであるアルペジオがいる世界線、そして芳槻さらと結ばれた世界線、様々な世界線がある。そんな中……ある変わった世界線があった……。

く親切高校の相談室にてく

芳「し、失礼します……。」

私は芳槻さら、親切高校の生徒です。今日はある相談があつてこの相談室に来ました。

？「あつ、いらつしやうい。何か相談？」

芳「は、はい……『アルペジオさん』。」

この相談室では、アルペジオさんが相談に乗ってくれるんです。アルペジオさんは私と同級生ですが、放課後にこうやって生徒の相談を受けてくれるんです。とっても人気なんですよ？……特に『男子』に汗

アル「んー？じゃあ聞かせてー？」

芳「は、はい。実は……最近悩みがあるんです。」

アル「悩み?」

芳「……私、最近好きな人が出来たんです。」

アル「へー。どんな人?」

芳「そ、それは……//」

アル「ごめんね、言えないよね。それで?」

芳「けど……どうしても思いを伝えられなくて……。」

アル「……なるほどねー。さらちやんの気持ちすつごくわかるよ。『私』だって、好きな人に思いを伝えるのはすつごく恥ずかしいもん。同じ『女の子』同士、すつごくわかる。」

芳「はい……//」

えっ? アルペジオさんは女の子なのかって? はい、そうですよ? だから男子から人気があるって言ったじゃないですか笑

アル「だからね、少しずつ努力していけばいいんだと思うなー。今は恥ずかしくても、きつと言える日が来るからね。あつ、でも後悔しないうちにいうべきだとは思うよ!」

芳「はい、ありがとうございます!」

アル「えへへ、どういたしまして。」



くくくそしてくくく

アル「さて、そろそろ帰ろつかない。」

？「ちよつ、ちよつと待つてええ！」

アル「ん？」

？「はあ……はあ……間に合つた汗」

アル「君は？」

？「待つた！会つて早々で悪いが君の名前から教えてくれないか？」

アル「私？私はアルペジオだけど？」

？「ああ、やっばりな汗」

アル「それで、君は？」

アルA「……俺はアルペジオ、基本世界のアルペジオだ。」

アル「えつ、えええええ！」

くくくそしてくくく

アル「なるほどね。信じられない気もするけど、意外とそういうのもあるかもね。

他の世界線の私つて。」

アルA「信じてくれるのか？」

アル「だって、その方が楽しいじゃない！他の世界線の私が私に会うために世界線を

超えてやってきたなんて、ロマンチックじゃない!」

アルA「ま、確かにね。」

アル「それで、A君も親切高校の生徒なの?」

アルA「うん、そうだぞ。」

アル「へー、そしてA君はさらちゃんと呼き合っていると……。」

アルA「まあね笑」

アル「実はねー、今日さらちゃんから恋愛相談受けちゃったんだー!」

アルA「ダニイ!?相手は!」

アル「それは教えてもらえなかつた笑」

アルA「ぐぬぬ……。」

アル「……そうだ!A君もなにか相談とかなあい?」

アルA「えっ?相談?」

アル「私ねー、相談室で生徒の相談を聞いてあげてるんだー。結構学校で評判なんだ

よー?どう?なんかなあい?」

アルA「そーだなあ。……じゃあさ、ちよつと待っててくれる?」

アル「えっ?いいよ?」

~~~~~

アルA「連れてきたよー！」

アル「うわっ！私ってこんなにいたの!？」

アルB「うわあ、ほんとに女子だ汗」

アル「そ、それで……相談は？」

アルA「いやー、そんな大したことじゃないんだけどね？俺達さ、一応………同一人物じゃん？見た目同じじゃん？彼女が違うだけじゃん？なんか見分ける方法ない？このままじゃ名前がアルに統一されたら視聴者が混乱しちゃうからさ汗」

アル「メメタア汗　そ、そうだなあ………思い切ってイメチェンしたら？」

アルD「い、イメチェン………？」

アル「例えば少し髪の毛の形変えるとか、それぞれがなんか特徴を作ればいいと思うよ?。」

アルE「なーるほど。その手があったか。」

アルF「流石女子は考えることが違うね！あつ、同一人物として、そしてお近づきのしるしにおっぱい触らせて！」

アルA「このド変態野郎が!!」

アル「えー、いいよー？」

アル一同「ファッ!？」

アル「だって、私が自分で触るような物でしょー?なら別にいいかなーって。」

アルA「なんて懐のかい人だ汗」

アルG「ほら、了承されたんだから遠慮なく触ったらどうだ?」

アルF「あつ、え、えーつと……やっぱ無理ー!!! (タツタツタツ)」

アル「あつ、行つちやつた笑」

アルA「ヘタレめ……。」

アルB「でー、今思つたんだけどさ。」

アルA「ん?なに?」

アルB「この子の名前どうするの?」

アルJ「そういえばそうでござるな。」

アルH「んー、普通にLちゃんでもいいんじゃない?」

アル「私もそれでいいと思うよー?」

アルA「じゃあそれにけつてーい!」

こうして、また新たなアルペジオが増えることになったのであった。

アルL「えへへ、これからよろしくね!」

アルA「おう!………とここで………彼氏とかいるの?」

アルL「えっ?彼氏?いないよー?」

アルA「あつ、そうなんだ。（確かに親切高校にカツコイイ男子そんなにいないからな汗）」

アルB「ちなみにタイプな人は？」

アルL「んーつとねー、パワプロに出てきた矢部君みたいな人！」

アルー同「じゃあ荷田でいいじゃねーか!!!汗」

やっぱ好きやねん

アルA「……………来てたのか。カズ。」

和「へへへ、まあね。だって今日はミリ旗君にとって大切な日やろ？」

アルA「ま、そうだな。しかしあのミリ旗さんがねえ……………」

そう、今俺達は教会にいる。なんでかって？……………ミリ旗さんが結婚したからだよ
バーカ！誰と？そりやあ……………あ、いや、訂正。『そりやあ』じゃなくて、『まさかの』
白瀬さん。訂正したのは……………ミリ旗さんのことを好きなのは白瀬さんだけじゃな
いからだ。そう、横にいるこいつも、同じなのさ。

和「しつかしミリ旗君もええお嫁さんを貰ったなあ。美人さんで、家事もちやんと出
来て……………私とは大違いやなあ……………」

アルA「カズ……………お前……………」

和「やめて！……………それ以上言われたら私……………我慢出来なくなるから……………」
アルA「……………」

和「やっぱさ、私は幸せとかとは無縁なんよ。あの時、ミリ旗君に別れを告げて……………」

正解やったなあ……。」

アルA「……………カズ。」

和「……………」

アルA「……………お前、どうせミリ旗さんに会わずに行くつもりだったんだろ？」

和「そりゃあ……………そうや……………」

アルA「……………もう一度だけ会ってこい。」

和「でも……………私、」

アルA「大丈夫だって。……………だってさ、仮にも自分の大好きだった人に、折角会えるチャンスなのに会わず終いなんて、悲しいでしょ？」

和「そうやけど……………」

アルA「……………行つてこいよ。」

和「……………。」

くくくそしてくくく

アルB「ミリ旗さんピースピース！」

ミリ「へいへい。ピース！」（パシヤッ

アルB「はいオッケー！」

ミリ「ちゃんと撮れてなかったらミンチだからな！」

アルB「だ、大丈夫だって汗」

ミリ「おお、安定のイケメン！」

アルB「おい汗……………あれ？」

ミリ「ん？どしたん？UFO？」

アルB「……………カズ……………？」

ミリ「えっ？」（クルツ

和「……………」

ミリ「カズ……………ひ、久しぶり！」

和「あつ！うん、久しぶりやね！」

ミリ「……………来てくれたんだね。」

和「……………うん。ミリ旗君の記念日やからね。」

ミリ「へへ、ありがと！」

和「……………」

変わらない。ミリ旗君は変わらない。あの時と同じ顔で、同じ笑顔を見せて、おどけた笑い方をする。私達が恋人やった頃のミリ旗君がそこにいた気がした。……………でも目の前のミリ旗君は私の恋人やない。そりやあそやね、自分で突き放したんやから。

和「……………ミリ旗君。」

ミリ「ん？どした？」

和「……………ごめんなあ……………」。

ミリ「……………あの時のこと？」

和「(コクリ)」

ミリ「許さん！」

和「(ビクツ)」

ミリ「と、言いたいところだけど、許しちやる！」

和「も、もく、脅かさんといてや……………」。

ミリ「そんな引きずるほど僕は悪い奴じゃないよ汗 もう、過ぎたことだろ？」

和「……………過ぎたこと……………そうやな！引きずってる方が馬鹿やな！」

ミリ「なんだよ！いい気になりや好き放題いいやがって！」

和「アハハ、ごめんごめん笑」

ミリ「つたく……………」。

和「……………ミリ旗君。」

ミリ「……………なあに？」

和「……………お幸せに。」

ミリ「……………カズ、僕……………」

和「……………」

ミリ「……………ありがとう！」

和「……………おう！」

くくくくくくくくくく

和「……………ふう。」

アルA「お疲れ。」

和「アルペジオ……………」

アルA「どうだった？ちゃんと話せたか？」

和「うん、話せた。」

アルA「そっか。……………なあカズ。」

和「ん？なんや？」

アルA「……………これを、お前にやる。」

和「えっ？……………これは？」

アルA「後でじっくり見てよ。」

和「……………。」

くくくくくくくくくく

和「……私宛の……。」

『アルA「それさ、ミリ旗さんが書いた手紙なんだよ。カズ宛に。」

和「え？私宛……？」

アルA「うん。あの人さ、口で伝えようとするのと恥ずかしがるからさ、手紙でカズに自分の考えをつたえようとしたんだよ。」

和「……………」

アルA「ホントはさ、甲子園で優勝した後、カズに渡すつもりだったんだって。カズがいなくなつてさ、もう渡す必要も無いのに、あの人、その手紙ずっと大事そうに持ってたんだ。』

和「……………」(手紙を開ける)

『拝啓 大江和那殿。

この度は失礼ながら手紙を認めさせていただきました。こうでもしないと僕……いや私は思いを伝えられないというか……ああもうめんどくせえ！えーつとき、だからね、何時もカズには迷惑かけたりして振り回してばっかだったけどさ、それでもカズは僕のこと好きだって言ってくれたよね。あれさ……恥ずかしかったけどすっごく嬉しかったんだ。だからさ、今日は僕もちゃんと伝えようかなって思ったんだ。』

和「……………」

『好きだって言ってくれてありがとう。僕のがままに付き合わせっぱなしでごめんなさい。時々見せる泣き顔とかすっごく可愛かったです。何時も二人で楽しく話すのもすっごい好きだ。カズと一緒にいる時が一番楽しいです。それで……………僕は……………』

和「……………もうっ……………なんやこれは……………（ポロポロ）」

『僕も、カズのこと大好きです。』

和「……………なんやこれは……………ほんと……………いけずやな……………ミリ旗君は……………こんな見せられたら……………私、もう我慢出来ないやない……………か……………（ポロポロ）」

あの時間は、もう二度と戻らへん。今更後悔してももう遅いんや。……………でも、不思議なんや。悲しい、すっごく悲しい。せやけど、なんだか、嬉しい気持ちの方が大きいんや。私、ミリ旗君に愛されてたんやなあって、私のこと好きだったんやなあって。嬉しかったんや。……………嗚呼、そうなんや。私、今でもミリ旗君のこと大好きなんや。素敵なお嫁さんがいてもいい。私のこと忘れてしまってもええ。それでも……………。

和「やっぱ好きなんやなあ……………。アンタやなきやアカンよ……………。」

アルA「……………なあ白瀬。」

白「あら、なあに？」

アルA「……………こんなことはさ、本来は男であるミリ旗さんに言うべきなんだろうけどさ。……………ミリ旗さんのこと大切にしろよ。でないと……………俺が許さねえからな。」

白「……………ええ。わかってる。」

アルA「そつか。それならよかった。でないと……………」

白「でないと？」

アルA「……………報われないからな、あいつがさ……………」

白「……………」

おばあちゃんと言っていた。恋愛つてのは、人をよわくするものだ。けど、人は弱みを知って初めて強くなる。人を愛するつてのは、必ずしも幸せになれるものではない。けどその辛さが、その弱さが、きつと何物にも変え難い宝物になると。今の俺はその意味がよくわかる気がする。

アルA「……………今日は星が綺麗だな。」

白「……………そうね。」

空に光る夏の大三角。眩しく輝く彦星（アルタイル）と織姫（ベガ）の二人。その横

で、
羽。何故か今日に限って一際眩しく輝き、ふたりを見守り続ける、白鳥（デネブ）が一

ノーラブ、ノーライフ

アルA 「さあやってまいりました！『アルペジオの突撃！隣の晩御飯！』」

アルB 「もはや隠す気ZEROだな汗」

アルA 「今回はこちらのお宅におじやましまーす！」

アルB 「とうわけで突撃ー！」

アルA B 「うおおおおお！！」（ドドドドド）

(ピンポーン)

アルA 「ごめんくださいーい！」

唯 「はーい！あつ！アルペジオくん！久しぶり！」

アルA 「うおつ!?まさかの唯のお宅でしたか！」

唯 「え、え？私に用があつて来たんじゃないの？」

アルB 「アポなし訪問故に俺達も誰の家かわからなかったんだ汗」

唯 「……汗」

大神 「なんだ？騒がしいな………!?」

アルA B 「フアツ!? 大神!？」

唯 「ちよ、ちよっと! 汗」

アルA 「えっ? これどういう……?」

唯 「……………//」

~~~~~

アルA B 「え!?! 二人共結婚してたの!？」

唯 「う、うん。去年の十月にね……………//」

大神 「まさかアルペジオが来るとは思わなかったが汗」

アルA 「お前らが結婚してる方が衝撃的だわ汗」

アルB 「いやあー、じゃあ折角だし晩御飯はやめて2人の馴れ初めを聞いちゃいます

か笑」

アルA 「さんせい!」

唯 「ちよちよっ! 馴れ初めって何!？」

アルB 「だーかーらー! 2人が結婚するまでの経緯だよ!」

大神 「な、なんで急に……………汗」

アルA 「いいから、はーやーくー!」

大神 「とは言ってもだな……………。」



アルA「じゃあどっちから結婚してくださいって言ったの？」

唯「ええつと……それは……その……。」

大神「唯からだな。」

唯「博之君！／＼／＼」

大神「なんだ？まずかったか？」

唯「そ、そんなあつさり……／＼／＼」

アルA「なるほど……唯からのアタックだったのか。」

アルB「ついでに二人共名前で呼びあつてる件www」

アルA「考えてみたら今の唯は、『大神 唯』なのか。」

唯「ま、まあね……／＼／＼」

アルB「さつきから照れてばかりだぞお前汗」

大神「熱か？無理しない方がいいんじゃないのか？」

唯「さ、3人のせいでしょ！もうっ！／＼／＼」

大神「そうか？こんなのいつもの事じゃないか？」

唯「ちよ、ちよつと博之君！汗」

大神「毎日俺が仕事に行く前と帰ってきた時と寝る前にはキスはするし、寝るときは何時も同じ布団だし、それらを俺がたまに忘れると泣きつかれたりするし……。」

唯「も、もうやめて！／＼／」

アルA「(・▽・) ニヤニヤ」

アルB「く、口から砂糖が出てくる……汗」

唯「どういことなの汗」

アルA「それぐらい甘甘だつてことだよ笑」

アルB「そういえば！」

唯「ん？なあに？」

アルB「二人はもう初夜は迎えたの？(・▽・) ニヤニヤ」

唯「なあっ！／＼／」

大神「まあ、一応。」

唯「だから！なんでそんなあっさり言っちゃうの！？／＼／」

アルA「おお！どうだった？」

大神「………唯の新たな一面を知った。」

アルB「要するに？」

大神「……可愛かった。」

唯「くっ！………そ、そつか………えへへ………／＼／」

アルAB「ピュアか！お前らピュアか!!!(ノシ，ω，)ノシバンバン」

唯「あ、アルペジオくん!? どうしたの!？」

アルAB「このバカツプル共! 末永く爆発しやがれ!」

唯「え、えええ!？」

大神「……言われなくてもそのつもりだ。」

唯「も、もうっ! 調子いいんだから! / / /」

アルAB「ぐはっ! (吐砂糖)」

唯「うわっ!？」

『しばらくの間、大神家では砂糖には困らなかったという。』

## 親切警察

紫「……やつと来たか。」

アルB「なんだよ大事な話って？」

紫「ちよつとあつてな……お前にしか頼めないことなんだ。」

アルB「俺だけ？何を？」

紫「……明日からお前には親切高校専属の警察官になつてもらう。」

アルB「……えっ？」

くくく翌日くくく

アルB「どうしてこうなつた汗」

紫「うむ、似合つてるぞ。」

アルB「そういうことじゃなくてなんで急に警察なんかを……汗」

紫「最近、この学校の風紀が乱れてる気がするのだ。」

アルB「例えば？」

紫「誰かさんが彼氏を泥棒猫に奪われそうになつたっていう理由で器物破損をした  
り。」

アルB 「五十鈴か……汗」

紫 「誰かさんがベクトル操作を謝って化学の授業の時に化学室を爆破したり。」

アルB 「アクセル……汗」

紫 「そんなわけだからお前に警察をやってもらう。」

アルB 「魂胆はわかった。……でもなんで警察なんだ？」

紫 「かつこいいから！（キラキラ）」

アルB 「お、おう汗」

紫 「そんなわけだからよろしく頼む！」

アルB 「お前は？」

紫 「私は朱里とミステリーサークル探してくる。（キラキラ）」

アルB 「小学生か!!!汗」

くくくくそしてくくく

アルB 「とは言ってもなあ……そんな事件なんて早々起きるものじゃ……。」

? 「助けてくれえー!!!」

アルB 「……フラグだったか汗」

くくくくそしてくくく

アルB 「どうしたどうした？」

アルC「ああ、B！あれ見てや！」

アルB「ん？」（ズガーン）

アルB「フアツ!？」

アルH「つ、机が……吹き飛んだ……汗」

アルB「だ、誰だ！机を吹き飛ばして遊んでるのは！汗」

天月「……………」。

アルB「ああ、まあ、予想はしてた汗 どうした五十鈴？D関係か？」

天月「……………」奈桜が……………」

アルH「え？奈桜がどうかしたのか？」

奈桜「だ、だから冗談ですって！助けて！」

天月「……………」冗談でも許されない……………」！」

奈桜「ヒイイ！」

アルB「一体全体奈桜が何したってんだ？」

奈桜「い、いやその……すずちんをからかうつもりで『私、D君と付き合ってるんで

すよ！』って言ったら……………」汗」

アルBH「ああ、なるほど汗」

天月「覚悟はいい……………」（ガシツ）

奈桜「しれっと片手で教卓を持ち上げないでください！怖い!!泣」

アルB「お、おつつけ五十鈴！」

天月「(ギロツ)」

アルB「ヒイイ！」

アルA「(あ、これはマズい……汗)」

天月「邪魔を……しないで……！」(ブンツ)

アルB「えっ、ちよっ、ぎゃあああああ!!!」(ズガーン)

アルH「Bいいいいいい!!!」

アルA「ったく、仕方ねえな汗 ハイパーキャストオフ！」

『Hyper Cast Off』

アルA「ハイパークロックアツプ。」

『Hyper Clock Up!!!』

くくそしてくくく

アルB「お、おつつけ五十鈴！」

天月「(ギロツ)」

アルB「ヒイイ！」

天月「邪魔を……しないで……！」(ブンツ)

アルB 「えっ、ちよっ！」（ガシッ

アルB 「くっ！……あれ？……A！」

アルA 「ふう、なんとか間に合ったか汗」

『Hyper Clock Over!!!』

天月 「……………」。

アルA 「ほら五十鈴、D連れてきたよ。」（ポイツ

アルD 「うわっ！」（ドサッ

天月 「アルペジオ……………」

アルD 「ぼ、僕は五十鈴以外の子と付き合ったりしないよ汗」

天月 「……………うん。」（ガシッ

アルD 「……………」

天月 「…………アルペジオが浮気しないのはわかってる。…………だが、今日はもう離れたくない。…………だから…………このままお持ち帰り。」

アルD 「ちよちよっ！あゝれゝ！」

アルA 「連れてかれた汗」

アルB 「Dも大変だなあ笑」

『翌日、Dの顔中にキスされた後の痣が出来ていた汗』



くくくそしてくく

アルB「はあ……結局警察らしいことしたのはAだったなあ……俺どつちかっていうと加○美みたいに殺されて『ウンメイノ』的な役しかやってねえや汗」

(ピロロロ)

アルB「ん？電話だ。はい、もしもし。……はい、そうですけど………はあ!？」

くくくそして交番にてくくく

アルB「……汗」

紫「……(プルプル)」

電話は警察官の人からだった。なんでも、親切高校のある女子生徒が立入禁止の場所に入り込もうとしていたらしく、その少女を連行して取り調べをしていたところ、俺の名前をずーっと叫んでいたらしい。で、俺が駆けつけてみると………そこには警察の取り調べを受けている半泣き状態の紫杏がいた汗

警察「この子がねえ、立入禁止の区域に入ろうとしていたものでね汗」

アルB「は、はあ、うちの紫杏が申し訳ございません汗 今日のところは、僕のメンツに免じて許してくれませんかね？」

警察「……まあ、これといった被害は出ていないからね。けど、今度からは気をつけるんだよ。」

アルB 「はい、ほんとすいません汗（なんで俺が怒られてんだよ汗）」

紫 「……（プルプル）」

くくくそしてくくく

アルB 「はあ、とんだめにあつた汗」

紫 「大体なんなんだ！私はただミステリーサークルを探しに行こうとしただけなのに！」

アルB 「だからって立入禁止の区域に入ったらダメだろ汗」

紫 「むうく……。」

アルB 「つたく、今度迷惑かけたら、わかってるよな？」

紫 「……？」

アルB 「警察が逮捕する前に俺が逮捕しちゃうからな。（ニコツ）」

紫 「くツ！うわあああああ！」（ポカポカ）

アルB 「いたたた！何すんだ！」

紫 「あーもー！もう親切警察は廃止だ！廃止廃止く！！」

アルB 「ど、どうしたんだよ汗」

紫 「大体いつからお前はそんな事を言うようになったんだ！アルペジオのくせに生意気だー！！」

アルB「どういう意味だよ！汗」  
なんだかんだでバカツプルな二人なのであった。

## SHINSETU M@STER

アルA「アイドルを結成します！」

芳「……え、アルペジオ君。急にどうしたんですか？汗」

アルA「そのままの意味だよ。アイドルを結成します！」

天月「どうして急に……？」

アルB「紫杏が面白そうだからやれって汗」

和「また紫杏の気まぐれかあ……汗」

奈桜「紫杏ちゃんの気まぐれ料理ですね！」

妙「どうしてレストラン風に言い直すのよ汗」

アルC「というわけで、ええーつと、『桜空、奈桜、妙子、和那、五十鈴、朱里、いつき』でユニットを作ることになりました。はい拍手ー。」

(パチパチ

桜「なんで私まで……汗」

朱里「プライドが許せないわね……(プルプル)」

くくくそしてくく

アルA 「実はもう曲はあるらしいんですわ。」

奈桜 「ラブラブビッグバンですか!？」

アルB 「んなわけねーだろ!!!汗」

アルK 「いつそ殺してええええええええ!!!」

アルB 「やめい汗」

天月 「じゃあ……『しんみり子』？」

アルA 「それはBGMだろ汗」

天月 「……(ジーツ)」

アルD 「………だけど、五十鈴が僕の前からいなくなろうとするなら、またどんなことをしても追いかけるよ。どんな不運があつたつて、二人なら絶対乗り越えていける。僕は野球も五十鈴も大切なんだ。」

アルA 「あのシーンか笑」

天月 「……(デレデレ)」

アルB 「絶対言わせたかっただけだな汗」

アルD 「は、恥ずかしいなあ……汗」

妙 「で、その曲っていうのは結局なんなの？」

アルA 「確か……『Absolute ni』（ズガン）」

アルB 「Aが爆撃された!」

アルC 「言論封殺でやんす! 汗」

アルG 「あとちよつとでこの小説が抹消されてるところだった汗」

~~~~~そして~~~~~

アルB 「で、結局曲名は何なの?」

アルA 「『恋の33-4』です!」

アルH 「なんでや! 阪神関係無いやろ!」

『阪神フアンの皆さん、ごめんなさい汗』

朱里 「……まあ曲は許すわよ。百歩譲ってね。けど……なによこの衣装!」

アルB 「い、いやごく普通のアイドルの衣装なんです汗」

朱里 「私にこんな格好をしろって言うの!」

アルA 「天道喜ぶかもよ? (ボソツ)」

朱里 「くッ!……し、仕方ないわねっ／＼／＼」

和 「わ、私はこーゆう服似合わんと思うけどなあ……／＼／＼」

アルB 「軽くミリ旗さんとか墮せるから大丈夫笑」

和 「……?」

芳「ど、どうでしょうか……／＼／＼」

アルA「ビッグバアアアアアアアアアアアアン!!! (吐血)」

芳「あ、アルペジオ君!？」

奈桜「似合ってますよさりりん！」

アルH「おっ、奈桜も似合ってるじゃーん！」

奈桜「そりゃあナオツチですからね！（ドヤツ）」

桜「私も着たよ！（ドヤツ）」

一同「……………。(シーン)」

桜「ガーン！（シクシク）」

アルC「じ、冗談だよ！いつきも似合ってるよ！」

桜「ほんと…………？」

アルC「ホントホント！」

アルAB「バカツプルめ…………。」

奈桜「…………ところで、」

アルA「？」

奈桜「なんですか？私だけ妙にバストが小さい気がするんですよねえ？いじめ？いじめですか？まな板系アイドルって奴ですか？泣」

アルE「奈桜のサイズにあったのを発注したらそうだった汗」

奈桜「大きくなってやる！泣」

くくくくくくくく

アルA「俺達は頑張り続けた……来る日も来る日も、歌やダンスのレッスンに明け暮れた。時にはぶつかり合い……なんどもユニットを解散する寸前まで行った……けどその度に結束を強めてここまで来たんだ！」

アルB「どこのスポコン漫画だよ！汗」

アルC「ついに本番だな……。お客さんいっぱい居るぞ！」

芳「き、緊張します……」

奈桜「いつも通りにやれば大丈夫ですよ！」

和「さあ、そろそろいくぞー！」

一同「おぉー！」

アルA「さあ行け！シンデレラ達！」

くくくくくくくく

アルA「みんなお疲れ！」

桜「うわああああ！失敗したああああ！」

アルC「だ、大丈夫だよ！すごく良かったよ！」

奈桜「大成功でしたね！」

朱里「なんだかんだ楽しかったわね……。」

アルD「うんうん、楽しかったね！」

アルA「そういやさ、紫杏の気まぐれで始まったこの企画だけどさ、まだ続くのかな？」

奈桜「どうせなら続けたいですねー。」

芳「私もです……。」

アルA「だよなー！続けたいよなー！」

アルB「フツフツ……。」

アルA「ん？どうしたB？」

アルB「そういうと思ってちよつと対策をうっておいた笑」

くくくその頃くくく

唯「ねえ、玲泉ちゃん！」

天本「なんですか？」

唯「面白い広告見つけたよ！」

『アイドル求む！女子高生なら誰でも！』

天本「アイドル……？」

唯「面白そうでしょ！ねえねえ、一緒にやろうよ！」
天本「そうですねえ………フフツ。」

t o b e c o n t i n u e ……

紫杏事変 その2

20XX年、ツナミという大企業に『神条紫杏』という会長がいた。彼女は人々に悪魔と呼ばれ恐れられていた。そんな鉄血にして熱血にして冷血で、某ハートアンダーブレードのような感じの彼女だが……。

紫杏「……………」。(キヨロキヨロ)

紫杏「(スツ (クンクン))」

紫杏「……………アルペジオの匂い……………」

(ガチャ)

アルG「紫杏…………ちよつといい……………か？」

紫杏「ッ!!？」

アルG「…………シツレイシマシタ。」(ガチャン)

紫杏「にやああああああ!!」(ガチャ (ポカポカ))

アルG「なんだよ、人が折角スルーしてやろうとしたのに汗」

紫杏「なんで入る時にノックをしないんだお前はああああ!!」(ポカポカ)

アルG 「い、いや、いつもノックしてねえじゃん汗」

紫杏 「むう……。」

アルG 「……じゃあ蒸し返されたついでに聞くが、」

紫杏 「(ギクツ)」

アルG 「……お前、俺の上着で何やってたの？汗」

紫杏 「お、お前の上着が汚くなってたから洗濯してやろうと思ってたんだ！汗」

アルG 「……質問を変える、なんで俺の上着の匂いを嗅ぎながら床に転がってたんだ

?汗」

紫杏 「うっ……お、お前の上着が余りにも臭かったから悶絶してただけだ！汗」

アルG 「なんですか？俺の上着はシュールストレミングとかよりも臭いっていうんで

すか？汗 ていうかそんな臭かったならすぐに上着を離せばよかったじゃねーか汗」

紫杏 「う……うう……。」

(ガチャ

甲斐 「失礼します会長。」

紫杏 「うわーん！甲斐く！アルペジオがいじめるく泣」(ギューツ

甲斐 「あらあら、アルペジオさんも酷いですねえ。こんな純新無垢な少女をいじめ

なんて。」

アルG「いじめてねえし汗　てか純新無垢な少女かこいつ？汗」

甲斐「大丈夫ですよー会長。私は貴方の味方ですからねー。ですから……」

紫杏「？」

甲斐「いい加減アルベジオさんの上着を大事そうに握りしめてないで返してあげたらどうですか？」

紫杏「あつ……。」

アルG「（あ、甲斐の奴、地雷踏んだな汗）」

紫杏「うわーん！みんな揃いも揃って私をいじめるんだー！もうやだ！おうち帰る！

泣」（タツタツタツ

甲斐「……私は何かまずいことを言ったのでしょうか？」

アルG「自覚なしとは尚更恐ろしい……汗」

くくくそしてくくく

アルG「結局あいつ戻ってこなかったし……汗　はあ、帰るか……。……あつ、ロッカーに忘れ物した。」

くくくそしてくくく

（ガチャ

アルG「確かロッカーだったはずなんだが……。」

(ガタガタ

アルG「……?今音がしなかったか……?」

(ガタガタ

アルG「……紫杏のロッカーからか。」(ガチャ

アルG「……………」

紫杏「……(グスツ」

アルG「……何やってんだ、お前汗」

紫杏「……………」

アルG「……拗ねてんのか?」

紫杏「拗ねてない……………」

アルG「じゃあどうしたんだよ汗」

紫杏「……私は会長だぞ……それなのにみんな私を子供扱いして……いじめて……」

(グスツ」

アルG「(実際子供っぽい行動しかしてないんだが、それを言ったらこいつ二度と出勤しなくなりそうだから……仕方ない汗)……そうは言うけどな、お前みたいに誰もが家族みたいに馴れ馴れしく関わる事が出来る会長なんて、この世にお前ぐらいだぞ。別にいいじゃないか、みんな、いじられ役にして癒し系会長つてのも。」

紫杏「……………」

アルG「少なくとも俺はお前が会長でよかったと思ってる……。」

紫杏「……………」

アルG「わかったら早く帰るぞ。」

紫杏「……………うん。(ゴシゴシ)」

アルG「全く……明日みんなに謝れよ？甲斐とか心配してたんだからな。」

紫杏「わかった。……アルペジオ。」

アルG「ん？」

紫杏「……………アイス食べたい。」

アルG「……………はあ、わかったよ汗」

紫杏「(ピコピコ)」

アルG「(やつぱ子供じゃねーか汗)」

~~~~小説収録後~~~~

アル(中の人)「はい！みんなお疲れー！」

一同「お疲れ様でしたー！」

アルG「はあ、ほんと紫杏の相手は疲れる……汗」

大神「全くだ汗」

アルB 「お疲れ二人共。」

アルG 「おつ、B。」

アルB 「な、なんか妙に疲れてんな二人共汗」

大神 「ヒント、紫杏。」

アルB 「把握汗 そだ、三人でご飯食べに行かない？日々の愚痴をする会として笑」

アルG 「いいなそれ。」

大神 「たまには愚痴らせてもらおうとしようか汗」

アルB G 「大神さんごちそうさんでーす笑」

大神 「なんで俺が奢ること決まってるみたいな感じなんだよ汗」

この後散々紫杏の愚痴りをして3人であった。



## ダイヤモンドは硬いけど砕ける 前編

アルA「……………」

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ。俺は朝起きた時スタンドを発現していた。な、何を言ってるのかわからねーと思うが俺自身よくわからない。幻覚だとか夢だとか、そんなチャチなもんじゃ断じてねえ。もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……おい、視聴者諸君、次にお前らは、『パワポケではよくあること』と言う。

アルA「え、えと……このスタンド……なんて奴だっけ？汗」

少年調査中

アルA「ああ、そうだ。スタプラさんか汗」

てか、これ絶対スタンド発現してるの俺だけじゃないよね汗 取り敢えず学校行くか。

~~~~~

俺の予想通りで、生徒の何人かがスタンド使いになっていた。ただ……その何人かが全員俺と関係が深い奴なのは気のせいだろうか汗

紫杏「Bー！見てよ！体を糸に出来るようになったぞー！」

アルB「なんか変なスタンド発現しとる……汗 おいおい、あんまはしやぎすぎるなよ？」

紫杏「にやああああ！糸が絡まったー！Bー！泣」

アルB「だから言ったのに汗 ほれっ。」（チョン

紫杏「おっ、戻った！」

紫杏は『ストーン・フリー』、Bは『クレイジー・ダイヤモンド』か。

五十鈴「D……。」

アルD「ん？」

（シユッ

アルD「うわわわわ!?どうしたの五十鈴!その髪の毛!」

五十鈴「朝起きたら……こんな感じに……。……これでもうDを離さずにすむ……。」

アルD「あ、ああ、そうだね汗」

五十鈴は『ラブ・デラックス』、Dは『エコーズ』か。……どこかで見たスタンドの組

み合わせだな汗

アルA「……そういえば……桜空はどうなんだろう……?」（タツタツタツ

~~~~~

アルA「桜空ー！」

桜空「あ、アルペジオ君。おはようございます。」

アルA「うん、おはよう。……なあ桜空、今朝からなんか変わったことない？」

桜空「え？変わったことですか……？」

アルA「うんうん。」

桜空「……えつと……その……私変なんです。」

アルA「え？何が？」

桜空「今朝起きた時……変わった事ができるようになってたんです……。」

アルA「変わったこと？」

やっぱり桜空もか汗　桜空のスタンドってことは……多分『ホワイト・アルバム』だな、雪の女王的な意味で汗

アルA「実はさ、俺もちよつと変わったことができるようになったんだよ。スタンドって言うんだけどさ。」

桜空「え？アルペジオ君も？」

アルA「いや、俺と桜空以外にも、紫杏とか五十鈴も同じなんだよ。」

桜空「そう……ですか。」

アルA「……なあ桜空、もしよかったらさ、桜空のスタンド、見せてもらってもいい

かな?」

桜空「え?……わかりました。」

アルA「あ、ありがと!……はっ!」

もし桜空のスタンドが本当にホワイト・アルバムだとしたら……あのごついスーツを桜空が着るハメになるのか!?!汗

桜空「……。(スウーツ

アルA「なーっ!?!」

おめでどう!桜空はサラに進化した!

アルA「ドレス着るだけかい!てかもろ12裏のサラやん!汗」

まあ、ホワイト・アルバムであることに変わりはないらしい汗

桜空「ど、どうでしょうか……。この姿だと私が触れたものが凍りついたりして……色々不便なんです……汗」

アルA「でしようね汗」

?「ああああ!!!誰が止めてー!!!」

二人「!?!」

アルG「止まらねえええええ!!」

アルA「G!?!どうした走り回って!?!汗」

アルG「知らねえよ！なんかどんどん加速するんですけどー!!」

アルA「あつ……(察し)」

『スタンド：メイド・イン・ヘブン 能力：時を無限に加速する』

くくくその頃くくく

アルK「ひいー!!!白瀬！大丈夫かー!!」

白瀬「わ、私は大丈夫！てかどうなってるのよこれ！なんで地面に対して『平行に重力がかかっているのよ』!?!」

アルK「俺も知らねえよ！とにかく手すりに捕まれ！後ろに落ちるぞ！汗」

和那「あわわ……なんか私のせいで大変なことに……汗」

『スタンド：C-MOON 能力：触れたものを裏返しにしたり、重力の向きを自分の立っている下方向にする能力』

くくくその頃くくく

浜野「……E。」

アルE「ビクッ！」

浜野「あんた校舎の窓割るの今月で何回目？」

アルE「10回！」

浜野「律儀に数えてんじゃないわよ!!今日という今日は許さないわよ……。」「(スッ

アルE 「え？コイン……？」

浜野 「このコインをよーく見てなさい。」（ポイツ

アルE 「……？」

浜野 「（カチツ）」（ドガガガーン

アルE 「コインが爆発したー!?」

浜野 「次はあんたを爆弾にする番よ……」（ゴゴゴゴ）

アルE 「ヒツ！……走れ！ジツパー！」（シユツ

アルE 「逃げるんだよー！」

浜野 「待ちなさい!!」（ドガンドガンドガーン

『スタンド：キラァー・クイーン 能力：触れたものを爆弾に変える能力』

『スタンド：ステイツキーフィンガー 能力：ジツパーを自在に操る能力』

アルE 「ヘルプミー!!!天道ー!!!汗」

くくくその頃くくく

アルA 「おいおい、スタンド使いだらけじゃねーか汗」

桜空 「一体どうして……汗」

? 「私がお答えしましょう！」

二人「!？」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
:  
:  
:

# ダイヤモンドは硬いけど砕ける 後編

アルA「だ、誰だ!？」

? 「フツフツフツ……私だ!」

アルA「お前だったのか。」

? 「これが禁じられた」

アルA「神々の」

アルA・? 「遊び。」

桜空「ふざけてないで! 汗 説明してください! お姉ちゃん!」

奈桜「い、いやあ……なんか朝起きたら目の前に変な弓矢があつて……それで試し打ちしたら……偶然通りすがりのお爺さんに当たってしまったって汗」

アルA「お巡りさんこいつです!!! 汗」

奈桜「そしたらそのお爺さんがスタンド使いになつたので面白そうだと思つて調子に乗つてアルペジオ君たちを寝てるうちに射抜いてたんです。」

アルA「張り倒すぞ!？」



桜空「お姉ちゃん？（ゴゴゴゴ）」

奈桜「ヒッ！」

桜空「質問です。右手でぶたれるか、左手でぶたれるの、どっちがいいですか？」

奈桜「ひ、一思いに右でやってください……。」

桜空「No! No! No! No!」

奈桜「ひ、左……？」

桜空「No! No! No! No!」

奈桜「りよ、両方ですかあ……!!?」

桜空「Yes! Yes! Yes!」

奈桜「もしかしてオラオラですかーッ!!?」

アルA「Yes! Yes! Yes! Oh my God……。」

『お見苦しい映像なので省略させて頂きます。』

奈桜「(チーン)」

アルA「ナイスオラオラッシュ笑」

桜空「当然の報いです。(プンスカ)」

アルA「ところで、どうする？ スタンド能力は消せないし……。」

桜空「じゃあ私、ずっとこのまんまなんですか!? 嫌ですよ……泣」

アルA 「これあれだ、また奈桜と桜空の関係が逆戻り確定だ汗」  
くくくそしてくくく

アルA 「そーいや他にもスタンド使いはいないのかな……。」

？ 「アルペジオくん！」

アルA 「こ、この声はまさか……汗」

？ 「ねえねえ見てよこれ！ スタンドって言うの？ これ凄いね！」

アルA 「唯……お前楽しそうだな……汗」

唯 「だってだって！ 石でも何でも生き物にできちゃうんだよ!? 凄いじゃん！」

『スタンド：ゴールド・エクスペリエンス

能力：生命を操る能力。矢で貫くと……。』

アルA 「なんでこいつがゴールド・エクスペリエンスなのかは知らんが遂にチートスタンドが来たな汗」

唯 「でもなんで急にこんなのが……。」

アルA 「ああ、それはな……。」

くくく説明中くくく

アルA 「ということなんだ。」

唯 「まさか奈桜ちゃんが犯人とは……これはスタンドも月までぶっ飛ぶ衝撃だよ

……!!」

アルA 「地味にジョジョネタぶっこまなくていいから汗」

唯 「それにしても生命を操るなんてねえ……あつ!」

アルA 「ん? どうした?」

唯 「すつごいいいこと思いついちゃった! ○<^」

アルA 「(い、嫌な予感しかない汗)」

~~~~翌日~~~~

アルA 「新しいバツティング練習?」

唯 「そう!」

アルA 「見たところ普通のバツティングマシンにしか見えないけど……?」

唯 「試しに打ってみてよ!」

アルA 「よしこい!」

(ウイーン (シュッ

アルA 「こんなの打ち返し……」

(グニャン

アルA 「フアツ!」

(ズガーン

アルA「……………えっと、唯さん？ボールに何したの？」

唯「ボールに生命を与えてクワガタにしてみました！これなら荒れ球のバッティング練習になるよ！」

アルA「ほう……………つまりクワガタムシが最大時速130kmで飛んでくると？殺す気か!!!」

唯「いいからいいから！頑張れ！」

アルA「よくねえよ!!!汗」

？「お困りのようですね、アルベジオさん。」

アルA「あつ、玲泉。」

天本「フッフ、要するにあのボールを一球でも打てばいいんですね？」

アルA「で、でもお前、野球やったことないだろ？それに時速130kmで飛んでくるクワガタムシだけ？」

天本「心配ないですよ。みなさーん。来てくださーい！」

(スタスタ)

アルA・唯「フアッ!？」

天本×10「これなら問題ないですよね？」

アルA「お前……………まさか……………そのスタンド……………」

『スタンド：D4C（いともたやすく行われるえげつない行為）

能力：物と物の間に挟まることでこことは違う世界に行き来できる能力。』

天本1「これだけ私がいれば、一球ぐらいは当たりますよー。」

アルA「そりゃあ……そうだけど……汗」

天本1「ただ問題は……。」

ド
ド
ド
ド
ド

アルA「……………」

天本×?「調子に乗って増やしすぎちゃいました汗」

アルA「……………C（くっ）。D（っ）バタツ」

このあと何とかして基本世界の玲泉以外を元の世界に送り届けたアルペジオであった。

そして少年達は、馬鹿でいる。

アル「……………！やべえ、すっかり寝てたのか……………つて、あれ？……………ここは？」
俺が目を覚ました時、俺は見知らぬ場所にいた。まるで……………列車の中のような……………。

アル「でも……………この内装、電車じゃないな……………どつちかっていうと……………いや、そもそも俺はなんでこんなところで寝てたんだ？」

とにかく色々調べてみ……………!?

アル「なんだよ……………これ……………？」

窓から見えた景色は俺の予想を反したものだ。けど……………割とごく見慣れてる風景でもあった。

アル「宇宙……………だと……………!?てことは今俺がいるここって……………あれ？」

でも考えてみればおかしいのだ。もし俺が本当に銀河鉄道なら、いつも見慣れてる内装のはずだ。けど……………この列車の内装は明らかに何時もの銀河鉄道じゃない。どういうことだ……………？

アル「本当に999なのか……………？」

(ガラガラ)

? 「お、起きたか。」

アル「?」(クルツ)

声のする方に振り返ると、そこに俺の知らない男が立っていた。

? 「よつ、初めまして……かな?」

アル「あ、あんたは……?」

? 「まーまー、そんなのはどうでもいいだろ? それより大事な事があるんだからな。」

アル「え? 大事な事……?」

? 「そ。俺がお前をここに呼んだのさ。」

アル「あんたが? ……なあ、一つだけ聞いていいか?」

? 「ん? なんだ?」

アル「今俺達がいるここって……銀河鉄道か?」

? 「ああ、その通りさ。それがどうした?」

アル「いや……なんか内装がいつもと違うなーってな。」

? 「……そうか! 『お前の世界線のは違うのか!』そりゃあ混乱しただろうな。ス

マンスマン!」(バシバシ)

アル「いたたた!! やめて! ……って、あれ?」

こいつは……俺と同じで複数の世界線があることを知ってるのか？なんで……。

？「……お前の察する通り、この銀河鉄道はお前の世界線のはちよつと違う。で、話は戻すが俺が今日お前を呼んだのは、お前に聞きたいことがあったからだ。」

アル「俺に？なにを……？」

？「……具現化によって生み出された『アルペジオ』……だな。」

アル「っ！」

なんでこいつがそれを……!?こいつ一体……。

アル「……なあ、話してやってもいいが条件がある。あんた……何者だ？それを教えてくれないか？」

車掌「……俺は……この鉄道の車掌だよ。」

アル「……はあ!?お、おおお前が!?あ、あの車掌だと!?あの黒くて目が怪しく光ってるあの車掌!？」

車掌「そんなに驚くか？汗」

アル「つーか一人称が『俺』だし……しかもなんか普通に人間だし……汗」

車掌「この世界の俺って一体何者だよ!!人間じゃねーのかよ!汗」

アル「えと……あ、あつた。ほら写真……。」

車掌「(ジーツ) !?なんだよこれ!?化け物じゃねーか!!!汗」

アル「いや、お前だよ!!!汗」

車掌「シジュールすぎるだろ……汗」

アル「はあ……まあいいや。で、俺に聞きたいことってなんだよ?」

車掌「あつ、そうだったそうだった。……俺は一応、あんたの事を知ってる。そしてその存在理由もな……。」

アル「……………」

車掌「アルペジオ、歴史を変えるつてのは……相当な罪だ。口では言い表せないぐらいべらぼうな罪だ。けど……お前が存在することは罪じゃない。どんな悪党だろうが、生まれる事や存在する事は罪じゃねえ。……つまり、お前は……お前達の存在は矛盾なんだ。存在する事は罪じゃない、けど存在理由は紛れもない罪……。今のお前はその矛盾の中を漂い続けてる状態だ。」

アル「……………」

車掌「だからこそ聞きたいんだ。お前はどうしたい?存在理由を優先し、罪人として生きるか……それとも存在理由を捨てるか……。だが……後者の場合はお前達は……………」

アル「……………」

車掌「俺が聞きたいのはその答えだ。」

アル「……………」

わかつてる。俺は……いや俺達は罪を犯した。それはもう、取り返しようがなく、俺達が一生背負っていく罪だ。……………だからこそ……俺達は……。

アル「……………」車掌、あんたの言う通りだ。俺達は罪人だ。大罪人だ。……………だから……俺達は……『未来の改変という存在理由を捨てる』。」

車掌「……………」それはお前達の存在をひて」

アル「違うね。」

車掌「……………」

アル「……………」前までの俺だったら、未来の改変なんて存在理由を捨てれば、それこそ本当に消えちまつてたさ。……………だけど、今は違う。俺には……沢山存在理由が出来るんだ。」

車掌「……………」

アル「色んな人に会って……沢山仲間と笑って……いつしか存在理由が沢山……いや、そんな理由なんて馬鹿らしくなったのさ。今をこいつらと笑って生きていたい。沢山馬鹿なことやって、笑っていたって。それで俺は十分なんだってな。」

車掌「……………」もし、お前が『未来の改変という存在理由』を捨てれば、2度と未来を改変する事はおろか、『あらゆる世界線に行き来する能力すら無くなるかもしれない』ぞ。

それはつまり……………」

アル「俺以外の俺が……………この世界線からいなくなる……………だろ？」

車掌「……………ああ。」

アル「……………いや、大丈夫さ。」

車掌「……………？」

アル「きつと会える。また……………何時か。絶対に。」

車掌「……………そうか。……………さっきの、俺がお前を呼んだっていうことなんだが……………」

アル「わかってる。……………本当は俺が呼んだんだろ？無意識に。」

車掌「お前……………」

アル「俺自身が、終止符を打つために、お前を呼んだんだ。いわば……………最後の未来改変だな。」

車掌「……………フツ、お前には全部お見通しってわけか。」

(ガラガラ)

アル「っ?!列車が!？」

車掌「お前は答えを出した。もうお前は罪人じゃない。」

アル「列車が……………崩れて……………」

車掌「あー、最後に一ついいか？」

アル「……………」

車掌「もし……………この世界の俺にもう一度会えたら……………その時は、『もう少しフアツシヨンに気を使え』って言うってくれ笑」

アル「……………ああ！」

車掌「……………じゃあな、『アルベジオ』。」

そうして俺の意識は、列車と共に光に飲み込まれた。

~~~~半年後~~~~

アルA「やべえ！遅刻する〜!!!」

くそっ！新学期早々これかよ！冗談じゃねえ！

？「おーい！『A』ー！」

アルA「あ?…:…なんだよ『B』かよ汗」

アルB「早くしないと遅刻するぞー！」

アルA「てめえ！自転車とかずるいぞ!!!俺も後ろに乗せる!!!」

アルB「えー。」

~~~~そして~~~~

アルA B「間に合った！」

アルC「つたくももう少しで遅刻だったぞお前ら汗」

アルB「大体こいつのせいだわ!!!」

アルA「なんだと！」

アルD「ま、まあまあ汗 落ち着こうよ汗」

車掌「やれやれ、まさか『全くの他人になっただけ』とはな汗 あいつらどんだけ縁が深いんだよ汗」

機関車「アレデハ前トナンラ変ワラナイノデハ……汗」

車掌「……そだな。ま、それがアイツらのいいところなんだけどよ笑 ……なあ、機関車さんよお。」

機関車「ナンダ？」

車掌「……もし……色んな世界線があるならよ、俺が……『あいつ』と恋人同士のままだった世界もあんのかな……？」

機関車「……ナンダ？急ニロマンチストニツタナ笑」

車掌「うるせえ！……ま、確かにちよつと女々しかつたな。さて、と。仕事に戻るか。頼むぜ機関車さんっ！」

機関車「了解！」

人に繋がりがあある限り、人は出会いと別れを繰り返し続ける。それは……アルペジオやこの車掌達だけではない。勿論……この物語をここまで見てくれた貴方もそう……。ここからのストーリーは貴方の……貴方だけのストーリー。さあ、今度は俺に聞かせてくれ、貴方の物語を……。

バレンタインデーキッス

今日はバレンタインデー。全国のリア充が輝く日なのだが、中には2月14日がバレンタインデーってだけで片付けられない人もいる。そう、それは俺の友人のように……。

アル「おう、ミリ旗さん、誕生日おめでとう！」

ミリ「おお、覚えていたか！じゃあ取り敢えずもう1回今度は尊敬の念を込めt」

アル「プレゼント、チョコレートでいいよなー？」

ミリ「KI☆KE☆YA！ってかいわけねーだろ！バレンタインデーと誕生日は別物なんだよ！それクリスマスマスが誕生日の人にクリスマスプレゼントが誕生日プレゼントでいいよなって言ってるのと同じだからなー！」

アル「冗談です。」

ミリ「ゆらりっぽく言ってもダメ！取り敢えずプレゼントはよ！（ノシ，ω，）ノシバンバン」

アル「わかつてるって（笑）ほらよ！」

ミリ「おー、中々綺麗な包装紙で包んでくれてるじゃないの。これなに？」

アル「取り敢えず開けてみるって。あつ、俺ちよつとトイレ行ってくる。」（タツタツ
タツ

ミリ「おう。んじやあ開けてみますか！つてあれ？この包装紙かてえぞ！どんだけ頑丈に包んでやがるんだ！はっ！まさかそんなに大層なものなのか?!さつすがアルベジオさーん！わかつてるじゃないの！」

アル「よーし、チャンスは訪れた！ジ☆エーンド！」（ポチツ

（ドガガガーン

くくくそしてくくく

アル「ただいまー！ミリ旗さーん！」

ミリ「……おい。」

アル「俺のプレゼント気に入ってくれた？」

ミリ「気に入ってくれたじゃねーよ！危うく感想を言う前に死にかけたわ!!」

アル「刺激的なプレゼントだったろ？」

ミリ「爆発的（物理）なプレゼントだったわ！」

アル「まあまあ（笑）大丈夫大丈夫、俺以外からもプレゼントあるからさ！」

ミリ「マジ?! 一体誰からだー？」

アル「さあ、じゃあ入ってきてください！」

（ガチャ

ミリ「あゝどんな天使だろう、僕にプレゼントをくれるなんて！」

白瀬「……。」

和那「……。」

貴子「……。」

霧生「……。」

冴花「……。」

リコ「……。」

ミリ「」

アル「はいこちらミリ旗ハーレムの皆さんです！」

ミリ「あのー……確かに嬉しいし天使だけどさ、なんか嫌な予感しかないのは僕だ

け？」

アル「気のせい気のせい！」

ミリ「……………えと、いやあ！皆僕のためにプレゼント持ってきてくれたの？嬉しいなー！（汗）」

白瀬「当然じゃない、『彼女』なんだから。」

他5人「（ジロツ）」

アル「おう、なんか一瞬悪寒が……（汗）」

ミリ「ね、ねえ、まさかプレゼントは弾丸よとか言つて銃撃してきたりしないよね？

（汗）」

白瀬「そんな事するわけないじゃない。」

アル「いや、白瀬さんだったらやってきs」（ダーン）」

白瀬「何か言つた？（ニツコリ）」

アル「なんでもないです！（泣）」

ミリ「えと、じゃあ早速プレゼントをば……。」

和那「ちよつと待つてな、ミリ旗君。」

ミリ「え？何？」

和那「ミリ旗君、いくら誕生日とはいえ、こんなに誕生日プレゼント貰つても困るや

ろ？」

ミリ「え、別に多くても嬉s」

和那「困るやろ？（ズイッ）」

ミリ「アツ、ハイ、コマリマス。」

和那「だからな、『うちのの中から一人を選んで、その子だけからプレゼントを貰う』ってのはどうや？」

ミリ「え、別に1人じゃなくても2、3人からは貰っても困る」

和那「（ジーツ）」

ミリ「アツ、ハイ、コマリマス。」

和那「そうやろ？だからこの中から『ミリ旗君が、誰のプレゼントが欲しいか』選んでほしいんや。」

ミリ「:(;。ω。):」

貴子「さあ、早く選んで！悩むまでもないでしょ？」

ミリ「あー、僕そろそろバレンタインチョコ貰いに行かないとなー（棒）」（スタスタ霧生「逃げんな！」（ガシッ）

ミリ「ノーン！」

アル「ケシカスくんかお前は！」

リコ「別にそんな深刻に捕えなくてもいいのよ。一旦落ち着きなさいな。」

ミリ「リコ……。」

リコ「私のが欲しいって言えばいいことでしょ？簡単じゃない（ニッコリ）」

ミリ「ブルータス、お前もか！」

6人「さあ！誰のが欲しいの!?!」

ミリ「あ、アルペジオさん……助け……」

アル「アルペジオはクールに去るぜ……。」（スタスタ）

ミリ「テメエええええ!!もう！来年からはパワポケじゃなくて、パワプロの彼女候補から誕プレ貰うんだからなああああ!!」（泣）

その後なんとか6人を説得して無事全員の誕プレを貰うことが出来た模様。ちなみにどれも素晴らしいプレゼントだったのでなんだかんだ言って充実した誕生日になったようです。

シアンと巨人

……何かがおかしい。おかしいとはいっても、人生とはおかしな事の連続であるわけで、しかも俺の場合常人が体験するおかしな事とは別次元のおかしな事を体験しまくっていたわけで（三年前の見知らぬ女子高生と身体が入れ替わったり、歌が大好きな人魚にあったり、いきなり常識の定義を大きく外れた巨大生物が現れたり）、今更何をおかしく感じるのだと自分でも思ってる節があるが、とにかく今現在俺は自分でもよくわからない、口で説明のしようがない『何かおかしな事が起きている』と感じている。それは例えば体調が悪いとか何故か頭の回転が早くなったりとかそういう些細なことではないが、突然超能力を身につけたとかゲーム病にかかったとかそういう重大なこともないg

紫杏「あー！うるさいうるさい！堅苦しすぎる！もつと柔軟に説明しないか!!!」

アル「あつ、こら！折角俺が今回だけはシリアス路線で行こうと思つてたのに急にギャグ展開にしやがって！」

紫杏「大体シリアスなんて私達に合うとも思つたのか！作者がシリアス路線の話考

えるのが苦手なくせに！」

アル「それを言うなよ！（汗）」

紫杏「まあいい、で、何がおかしいって？三文字でまとめてみる。」

アル「短すぎる！もつと長く！」

紫杏「じゃあ五文字！」

アル「ん、もう少しだけ！」

紫杏「じゃあ八文字！」

アル「ちっちゃくなった。」

紫杏「いやいやいや増えてるだろう！」

アル「いや、そうじゃなくて……ちっちゃくなってる。」

紫杏「はあ？それどういう……。」

アル「(・ω・)つ(鏡)」

紫杏「……なんだこの巨大な鏡は。」

アル「ちげえよ！お前が手乗りサイズ程に『ちっちゃくなった』んだよ！」

紫杏「ダニイ!?……そういえば今日のお前、やけにでかく感じてたが……なんだそういうことか。」

アル「遅せえよ！普通、会った瞬間に気づくだろ！」

紫杏「いや、錯覚かと思っただけ。」

アル「お前1回眼科行った方がいいぞ（汗）」

紫杏「いや、それほどでも（照）」

アル「褒めてねえよ（汗）つか、自分の体が小さくなってるっていう重大事件だつてのに妙に落ち着いてんなお前。」

紫杏「こういう時は落ち着くのが大事なんだ。下手に動揺して醜態を晒すわけにはいかないから早く助けてくれ頼む何でもしますから（震え声）」

アル「動揺してんじゃねーか！まあ確かに今のままじゃ社長としての威厳ZEROだからな。」

紫杏「そう！それが一番の問題だ！」

アル「まあ、元から威厳なんてZEROだけど。」

紫杏「（・・・）」

アル「取り敢えず解決策が見つからない今はいつも通り仕事してるしかないんじゃないか？」

紫杏「それもそうだな。よし、シゴトヲツツケルツ！ハアツ！」

アル「まだそのネタ引つ張りますか（汗）」

紫杏「……………アルベジオ。」

アル「ん？どした？」

紫杏「パソコンで文字が打てない。」

アル「あつ……。」「

~~~~~

アル「なんで俺がお前の仕事をやんなきゃいけないーんだよ（汗）」

紫杏「仕方ないだろう。今日までに終わらせなきゃいけないかった物なんだ。今はお前に頼むしかないだろう。」

アル「なんで今日までの仕事を今日までほっぽってたんでしょねえ？（威圧）」

紫杏「き、今日1日で全て終わらせる予定だったんだ！」

アル「本音は？」

紫杏「仕事忘れてました。」

（ペチッ

紫杏「にやあああああああああ！何をする！今の私にデコピンなんてしようものなら重症物だぞ！」

アル「寧ろデコピンですんでよかつたと思え（怒）」

~~~~~

紫杏「そろそろ昼だな。」

アル「そうだな、昼ごはんでも食べに行くか……つてちよつと待て。」

紫杏「ん？なんだ？」

アル「お前、その体の状態で昼ごはん食えるのか？」

紫杏「むっ、確かに……。」

アル「……まあいい、最悪残ったら俺が食うし。」

紫杏「だな。よし、行くとしよう！」

~~~~~

紫杏「ぷは、まさか人生であんな山盛りの白米を相手にする日が来るとは……。」

アル「……ちつちやくなつても食う量は変わらないとは……本人が食う分にはいつも通りなんだろうが見ている側からしたらとんでもない光景だったな（汗）」

紫杏「さて、食事も済ませたことだし、仕事に戻るとしよう！」

アル「どうせまた俺がやるんだろ？」

紫杏「当たり前だろう。」

アル「……お前何時か俺の仕事丸投げしてやるからな。」

『ちなみに移動する時は紫杏はアルベジオ君のスーツのポケットに入っていました。』

~~~~~

アル「やつと終わった！何時もの2倍疲れた……（汗）」

紫杏「うむ、ご苦労であった！」

アル「てめえ、人が仕事してる横でずっと紙飛行機なんか折ってんじやねーよ（怒）」

紫杏「何を言う！この姿では紙飛行機一つ折るのもかなりの肉体労働なんだぞ！」

アル「遊びだろうが！」

紫杏「紙飛行機は遊びじゃないんだよ！」

アル「どこの干物妹だ！……はあ、もういいや。帰ろうぜ。」

紫杏「そうだな。……あつ。」

アル「ん？どうした？」

紫杏「どうやって帰ればいいんだ……。」

アル「あつ、そうか（汗 ん？ちよつと待てよ。そういやお前今日どうやったら会社

まで来れたんだよ。」

紫杏「そこはほら……メタい話になる故……。」

アル「要するにご都合主g」

紫杏「わー！わー！言うな！」

~~~~~

紫杏「うむ、なかなか快適だな。」

アル「地味に気に入ってんじやねーよ（汗 お前が今いるのは俺のスーツのポケット

なんだからな？」

紫杏「しかしこうでもしなければ私は帰れないのだから仕方ないだろう。」

アル「またご都合主義で帰してもらえばいいだろ。」

紫杏「だからそーゆー事を言うな！」

~~~~~

アル「ほら、お前の家に着いたぞ。……………紫杏？」

紫杏「zzz……………zzz……………」

アル「ポケットの中で寝てる……………ひよこかお前は（汗 仕方ない。運んでやるか

……………つてちよつと待て。おい紫杏！起きろ！」

紫杏「んあ……………？なんだアルペジオ……………」

アル「お前ん家に着いたぞ。」

紫杏「おお、本当か。すまないな。」

アル「で……………お前、家の鍵は？」

紫杏「……………ひらけゴマ！」

アル「いや無理があるだろ！まさか……………」

紫杏「鍵、会社に忘れた。」

アル「デスヨネー。どうすんだよ！会社もう閉まつてるし、家に入れねえぞ！」

紫杏「……私にいい考えがある。」

アル「……? いい考え?」

~~~~~

アル「どうしてこうなった。」

紫杏「仕方ないだろう。お前の家に泊まるのが最善の策だったんだ。」

アル「お前が鍵忘れなければよかったただけだけだな（汗）」

紫杏「気にしたら負けだぞ。」

アル「いやお前は気にしろよ! ったく……明日も早いんだからもう寝るぞ。」

紫杏「そうだな。そうするとしよう。」

アル「えーつとお前のベッドは……そうだな。今のお前ならこのクッションでもベッドにしたらいいだろ。」

紫杏「……………」

アル「よし、電気消すぞ。」

(消灯)

アル「……………おい紫杏。」

紫杏「ん?なんだ?」

アル「確かにクッションが気に入らないのはわかる。それで俺のベッドを奪い取るつ

ていうのはよくある展開だと思う。で、それを踏まえた上で聞きたい。なんで俺の上に  
乗ってるんだよ(汗)」

紫杏「……………ここがいい。」

アル「いやいやいやせめてベッドの上とかにすれば…」

紫杏「zzz……………zzz……………」

アル「……………はあ、もういや(汗 寝よ。)」

コイツを元の姿に戻すのは明日考えるところでしょう……………。

……………次の日……………

アル「ん……………もう朝か……………なんか……………重い……………?」(チラツ

紫杏「…………………………」

アル「」

『ヒント……………ミニ紫杏、アルペジオの上で寝る↓ミニ紫杏、体が元に戻る』

紫杏「アールーページオー! (ドドドドド)」

アル「アツ、ドーモシアンサン。体、元に戻ツタンデスネ。ヨカツタヨカツタ(震え

声) いや、ちよつと、ほんとに待って! そもそも昨日お前が俺の上で寝たからこういう

事になったわけでごめんなさい私が悪かったです許してください何でもしますから(震

え声)」

紫杏「私は重くなーい!!!  
アル「いやそこかよ!!!」  
（泣）」

## バイトクエスト

五十鈴「バイトがしたい。」

アル「……………お、おう、どうぞ（汗）」

五十鈴「む、そこはもつと反応してくれても良かったんじゃないか？」

アル「い、いや、急にそんなこと言われましてもどうぞとしか（汗 あ、じゃあなんで急にバイト始めようと思ったん？」

五十鈴「特に理由はない。ただそろそろそういうものをやるべきだと思っただけ。」

アル「なるほどねー。」

五十鈴「というわけで、どんなバイトがいいかアドバイスが欲しいのだが…………。」

アル「どんなバイトがいいかって言われても…………五十鈴にあつたものが一番としか言えないなあ（汗 なんか自分の特技とかないの？」

五十鈴「私の特技は肉を削ぎ落とすことです。」

アル「どこのアツカーマンだ！（汗）」

五十鈴「後は…………トラックを運転できるぞ。」

アル「それ散々弄られたやつじゃねーか（汗）」



五十鈴「なら……艦娘。」

アル「おい五十鈴！撃沈しても知らねえからな!？」

五十鈴「まあそんな冗談は置いておいて……。」

アル「冗談のレベルがおかしい（汗）」

五十鈴「真面目に何をすればいいのかわからない……。」

アル「んー、取り敢えず色々試してみれば?」

五十鈴「……それもそうだな。なら早速……。」

『バイトNo. 1 ファミレスの接客』

五十鈴「ご、ご注文はお決まりでしょうか…（震え声）」

麻美「むう、どうしたものか……。」

13主「え?どうせお子様セットだろ?（笑）」

麻美「ちよつとー!バカにしないでよー!私高校生だからね!？」

13主「えー、でもそれが麻美らしいというか、それが良いというか。」

麻美「っつ!（ボンツ）」

五十鈴「あの、ご注文も」

麻美「え、えへへ……そっか、そこが魅力的……えへへ……／／……つて!そ

んなところが魅力的とか言われても嬉しくないよ!いや嬉しいけど嬉しくないよ!」

13主「どっちだよ（汗）」

五十鈴「……………」

くくくそしてくくく

五十鈴「ふんっ…………どうせ私はこの先一生独り身なんだそうに決まってる…………（グ  
スツ）」

アル「おいおい、元氣出せよ。ていうかバイト断念した理由がリア充の対応をしたくないってどういう事だよ（汗）」

五十鈴「アルペジオには芳槻という彼女がいるから私の気持ちは分かるまい…………。」  
アル「うっ…………。」

五十鈴「ほらみろ！あゝく！何が彼氏だ！ちつとも羨ましくなんかないからな！（泣）」  
アル「泣きながら言われても説得力ねえよ（汗）」

『バイトNo.2 メイド喫茶』

アル「ちよつと待てええええええええええ!!」

五十鈴「なんだ？何か問題か？」

アル「問題問題！大問題だから！（汗 何でよりにもよってメイド喫茶!?!」

五十鈴「リア充が少ない（グスツ）」

アル「まだ立ち直れてないのか（汗 でもお前…………例のセリフとか言えるのか…………?」

五十鈴「言える。」

アル「お前どんだけリア充耐性弱いんだよ（汗）」

五十鈴「半径100m以内にカップルがいたら血涙を流す程度の耐性。」

アル「もう誰か貰ってやれよコイツ……（汗）」

五十鈴「とにかく行ってくる。」

アル「お、おう……死ぬなよ？」

~~~~~そして~~~~~

五十鈴「……………」

アル「……………い、五十鈴……？……………し、死んでる……………」

五十鈴「勝手に殺すなバカっ！」

アル「すまんすまん（笑）で……………どうだった？」

五十鈴「……………率直に言うとファミレスよりはまだ……………」

アル「ええ……（汗）」

五十鈴「だが……………一つ問題が……………」

アル「あー、やつぱり恥ずかし」

五十鈴「私のキヤラのメイトは合わなすぎじゃないか!？」

アル「いやそこかよ！てか始める前に気づけよ！（汗）」

五十鈴「しかもなんか私がメイド服を着てツインテールにしたら若干ごちうさの理世ちゃんに似て」

アル「やめろ！それ以上言うな！（汗）」

その後も五十鈴のバイト奮闘記は続いていった……。

『バイトNo. 3 カラオケの店員』

五十鈴「何がああつてももういいの〜♪ぐらぐら燃える火を潜り〜♪貴方と行きたい〜♪天城〜越え〜♪」

アル「お前が歌ってどうするんだよ！つかチョイスが怖い！（汗）」

梨子「あの〜、注文したコーラまだですか〜？（汗）」

『バイトNo. 4 調査兵団』

五十鈴「肉を削ぎ落とすのは得意だと言ったが立体機動装置を操作出来るとは言っ
なあああああああああああ！（ドガーン）」

アル「予 定 調 和」

真央「まだまだ訓練が必要……。ア、ドモ、リバイ兵長デス。」

アル「お前のようなリヴァイ兵長がいるか！」

『バイトNo. 5 スパイ』

五十鈴「こちらイースズ。敵のアジトに潜入することに成功した。」

アル『おいイスイズ！スパイはバイト感覚でやることじゃない！戻れ！』

五十鈴「心配するな大佐、必ずバイトを成功させ、生きて帰ってくるさ」（ズガーン

アル『五十鈴ウウウウウウ!!!』

『バイトNo. 6 劇団員』

『ランサー役 天月五十鈴』

五十鈴「0（:3 | ）く チーン」

奈桜「ランサーが死んだ！」

桜空「この人でなし！」

アル「ほんと唐突だな（汗）」

『バイトNo. 7 はっぱ隊』

五十鈴「YATTA! YATTA! 告白成功♪ YATTA! YATTA! そのまま

入籍♪ はっぱ1枚あればいく♪生きているからラッキーだ〜♪」

アル「下だけじゃなくて上も隠せええええええええ!!!」

『バイトNo. 8 映画のスタントマン』

アル「五十鈴が映画に出るって聞いて撮影現場に見学しに来たけど……なんだよ『黄身の名は』って（汗 黄身に名前もクソもあるかよ（汗 てか『黄身』が名前だわ（汗」

監督「よい……アクション！」

ちよ「ねえ、もし本当に隕石が落ちてきて、それで……私達が……その……。」

9主「……例えこの後俺が死んだとしても、また来世、君を必ず見つけ出すよ。約束する。」

ちよ「9主……。」

9主「だから……もし会えたその時は……。」

ちよ「その時は？」

9主「君とまたゆで卵が食べたい！」

ちよ「……うん！」

アル「うわぁ……（汗）」

(ゴゴゴゴゴゴ)

9主「ッ！」

ちよ「本当に来た……!!！」

アル「いやいやいや!マジで落ちてきたぞ?!どうやって隕石なんか……ん?」

五十鈴(隕石)「我が魂はツナミと共にアリイイイイイ!!」

アル「お前かよ!（汗）……ん?あれ……ちよつ、待つ!」（ズガーン

監督「カットカット!また失敗か。」

ちよ「やっぱ隕石役って難しいんだね。」

9主「着地地点を間違えたら終わりだからなく。」

五十鈴「あ、アルペジオ……来てたのか……な、ナイスキャッチ……。」

アル「なにがナイスキャッチだこの野郎……（怒）」

五十鈴「い、隕石を受け止めた今の気持ちを……良ければ聞かせてくれないか……？」

アル「とんでもないや（怒）」

~~~~~そして~~~~~

五十鈴「はあ……結局良さそうなバイトはなかったな……。」

アル「それ以前にカオスすぎた気がするんですが（汗　つーか今回のお前どうした!?!  
キャラ崩壊激しすぎやしません!?!」

五十鈴「うっ……。」

アル「……自覚ありか。何があった？」

五十鈴「……私は、いつも無愛想だし、面白くもないから……変わりたい……。」

アル「……もしかしてそれでバイト始めたいとか言い出したり、リア充がどうとか  
言つてたのか？」

五十鈴「ああ……。」

アル「そんなに悩まずとも、今回のお前は奈桜よりもハツチャけてたと思うぞ。それ  
に……。」

五十鈴「それに？」

アル「多分視聴者の皆さんもいつもの五十鈴の方が好きだぞ（汗）」

五十鈴「……本当か？」

アル「ホントホント。」

五十鈴「……そうか……。 （ホツ）」

アル「これで一件落着だな。」

五十鈴「……最後に一ついいか？」

アル「ん？どした？」

五十鈴「……いつも通りにしてれば何時か彼氏出来るか!?! （泣）」

アル「あつ！それは本音だったのね！（汗）」